

建築と社会

2006 No.1012
Architecture and Society

7

日本建築協会

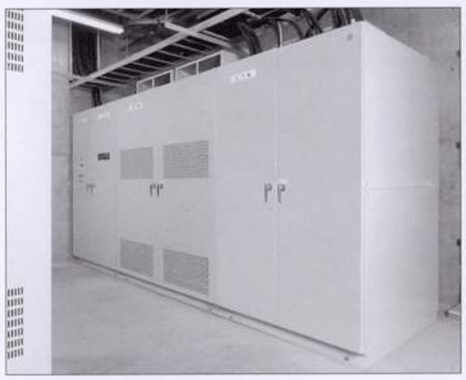
特集　設計図が伝えるもの

KOBE

環境に優しい電気を使いませんか

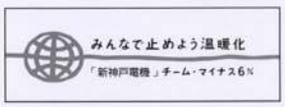
夜間電力はCO_2の発生が少ない電力です。夜間電力を蓄電し昼間に使用できます。
その上、非常用電源の機能も付加する事ができ経済的です。

株式会社 高速オフセット 堺工場 殿　納入事例




制御弁式据置鉛蓄電池

コウベ電力貯蔵システム Sefla（セフラ）システム



新神戸電機株式会社
URL:http://www.shinkobe-denki.co.jp/

本　　社	〒104-0044 東京都中央区明石町8-1（聖路加タワー）	TEL(03)6811-2251
関西支店	〒531-0076 大阪市北区大淀中5-14-31	TEL(06)4799-9773
中部支店	〒464-0807 名古屋市千種区東山通5-65（東山ビル）	TEL(052)782-5913
中国営業所	〒731-0103 広島市安佐南区緑井2-11-1	TEL(082)879-9811

キャドプロッター用紙
（インクジェット・LED）

設計奉公
www.skhk.jp



設計資材の
専門総合商社



図面用紙 今 昔
昭和30年代伊勢湾台風で土佐堀通り添のビルの地下が水につかり保管していた原図が水びたし 和紙原図はアイロンをかけて使用可能それ以来、建築設計図面にケミカル和紙が急速に普及しました。今はキャド化のあおりで製造中止となりました。

センメイ商事株式会社
〒540-0003大阪市中央区森ノ宮中央2丁目4番15
TEL.(06)6943-5048　FAX.(06)6946-8705

会告

総会議決お知らせ

平成18年６月21日開催の平成18年度第１回通常総会において、下記議案がそれぞれ原案のとおり承認されました。

- 第１号議案
  平成17年度事業報告の件（詳細2p）
- 第２号議案
  平成17年度収支決算報告の件
  （詳細3p）
- 第３号議案
  役員選任の件

＊６月21日付で退任した理事（敬称略）
久我三郎／久我産業㈱
古林敏郎／広島工業大学
菅谷　節／ダイダン㈱
中谷秀敏／大阪ガス㈱
浜辺鶴志／戸田建設㈱
広原盛明／元京都府立大学
堀田修二／鹿島建設㈱関西支店
森井雅久／都市再生機構

＊６月22日付で就任した理事（敬称略）
池内哲郎／野里電気工業㈱
河崎恭広／都市再生機構
木戸　徹／鹿島建設㈱関西支店
佐藤栄一／㈳日本建築材料協会
名張隆司／㈱大阪ガス
野村　昇／戸田建設㈱
森畑　武／MO建築研究室
吉村英祐／大阪大学

＊６月22日付で再任した理事（敬称略）
淺沼誠夫／㈱淺沼組
井上　豊／大阪大学名誉教授
上原正行／U建築工房
岡田聿之／㈱東畑建築事務所
古原直人／毎日工業㈱
佐野吉彦／㈱安井建築設計事務所
白井元之／㈱フジタ
瀬戸川葆／関西住宅品質保証㈱
相馬一男／住友電設㈱
立成良三／㈶大阪住宅センター
寺下　均／大成建設㈱
任田　勉／西松建設㈱
中井　進／㈱日建設計
伴　昭秀／㈱西原衛生工業所
人見尤浩／事務局
藤井　實／エスケー化研㈱
前川　翼／㈳大阪建設業協会
松本壮一郎／愛知工業大学
與謝野　久／㈱日建設計
渡辺勝紀／㈱熊谷組

＊６月20日付で再任した監事（敬称略）
前田隆司／㈱前田商会

臨時理事会議決のお知らせ

平成18年６月22日開催の平成18年度第１回臨時理事会において、役付役員並びに理事の会務分掌が、Ｐ５の別表のとおり決まりました。

クロスタワー大阪ベイ見学会

［大阪府建築士会（3単位）及びJIA（2単位）のCPD対象］

大阪港に近いベイエリア、弁天町に建設中のクロスタワー大阪ベイは、高さ約200m、54階と分譲マンションとしては日本一の高さとなり、現在、8月の竣工をひかえて工事が進んでいます。JR大阪環状線と地下鉄中央線がクロスする弁天町駅にペデストリアンデッキで結ばれ、ホテル、アミューズメント施設を有するオーク2000に隣接しており、主要なビジネスエリアから5km圏にありながら、海を望むことのできるロケーションが魅力です。ファッションデザイナー、アニエス・ベーがおもな住宅共有施設をデザインし、棟内にスカイラウンジや多彩なコミュニティ施設が設けられています。
また、365日オープンする診療所と介護サービスを備えた高齢者安心住宅（監修：春山満氏）や商業施設も併設されるなど、すべての人々が快適に暮らせる都心永住ライフを演出します。
クロスタワー大阪ベイの建設には、「スーパーRCフレーム構法」を採用。超高層建築でありながら、室内の柱・梁の出が少なく、将来のリフォームに対応した自由度をもたせています。

（㈱昭和設計／佐々木栄）

●建築概要

所在地	大阪市港区弁天町3-1
建築主	オリックス・リアルエステート㈱ 三井不動産㈱ 阪急不動産㈱
設計監理	㈱昭和設計 ㈱内藤建築事務所
構造設計	鹿島建設㈱
監修	アニエス・ベー：住宅共用 ㈱ハンディネットワークインターナショナル：高齢者安心住宅
施工	鹿島建設㈱
敷地面積	5,568.41㎡
建築面積	3,809.73㎡
延床面積	80,982.61㎡
構造規模	
住宅棟	RC造 地上54階、地下2階
賃貸棟	S造 地上10階、地下2階
工期	平成15年10月31日 ～平成18年8月31日
建物用途	住宅、老人施設、店舗、診療所



クロスタワー
大阪ベイ
パース

日　時　2006年**8**月**28**日（月）
13：30～16：20
（13：00より受付開始）
講　師　設計：佐々木栄／㈱昭和設計
施工：片山　豊／鹿島建設㈱
集　合　現地工事事務所
定　員　45名
※申込多数の場合は抽選
参加費　会員1,500円
一般2,500円
学生は各半額
申込方法　８月18日（金）までにFAXまたはEメールで、
①催し名「クロスタワー大阪ベイ」
②氏名
③会員・一般の種別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先
（住所、郵便番号）
⑥連絡先電話番号
⑦大阪府建築士会またはJIA会員（会員番号）であるかどうか
を明記の上、下記へお申込み下さい。

申込先　（社）日本建築協会編集事業課
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階（〒540-6591）
TEL.06-6946-6981
FAX.06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

平成17年度事業報告書　平成17年4月1日～平成18年3月31日

1．総　　会

(1) 第1回通常総会　平成17年6月15日
議事　①平成16年度事業報告承認の件
②平成16年度決算報告承認の件
③役員の選任の件

(2) 第2回通常総会　平成18年3月22日
議事　①平成18年度事業計画承認の件
②平成18年度収支予算承認の件

2．理　　事　　会

(1) 第1回通常理事会　平成17年6月1日
議事　①平成16年度事業報告承認の件
②平成16年度決算報告承認の件
③役員の選任の件

(2) 第1回臨時理事会　平成17年6月20日
議事　①会長等役付役員互選の件
②会長職務代行順位の件
③常設委員長並びに常任理事委嘱の件
④役員の会務分掌の件

(3) 第2回通常理事会　平成18年3月22日
議事　①平成18年度事業計画承認の件
②平成18年度収支予算承認の件

3．評　議　員　会

(1) 第1回定時評議員会　平成17年6月1日
議事　①副議長互選の件
②役員選任候補者の件

4．役　員　会　等

(1) 正副会長会議　2回
(2) 常任理事会　8回
(3) 常設委員長会議1回
(4) 支部長会議　1回

5．常 設 委 員 会 等

(1) 編集委員会	委員会	11回	小委員会等	65回
(2) 事業委員会		7回		7回
(3) 教育委員会		2回		4回
(4) 出版委員会		11回		11回
(5) 建材委員会		2回		

6．特 別 委 員 会 等

(1) 工高生デザインコンクール審査委員会	1回
(2) 青年技術者選考委員会	1回
(3) 1000号特集特別委員会	1回
(4) 読者と選ぶ「建築と社会」賞審査会	1回
(5) 日本建築協会賞選考委員会	1回

7．建築と社会・特集号

4月号　建築の経済化～得する建築、儲かる建築～
5月号　住まい方の変化～住み手のこだわりがもたらした住宅の現在～
6月号　人工栽培～植物工場の要素技術と建築への展開～
7月号　次世代に伝える「木」の建築
1000号記念特集
8月号　改正建築基準法と景観緑三法
9月号　火災から守る
10月号　構造の過去から未来へ～大阪万博から35年～
11月号　私の空間作法ー会員作品ー
12月号　第52回青年技術者
1月号　都市環境デザインと参加のまちづくりー六甲道南地区震災復興第二種市街地再開発事業・コーディネート／デザインレポート
2月号　「地方空港の時代」～まちと共存する空港づくり～
3月号　東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作

8．講　　演　　会

『上町台地を世界遺産に!』　6月15日
講師：河内厚郎　参加者45名

9．見　　学　　会

- **兵庫県立芸術文化センター**
5月20日　参加者40名
- **大徳寺茶室見学会**
日本建築学会・日本建築協会共催
9月3日　参加者45名
- **関西医科大学附属枚方病院**
11月10日　参加者52名

10．近代建築シリーズ

日本建築協会と阪急電鉄との共同企画により、講演と見学・そしてウォーキングを結びつけた企画を実施。
- ヴォーリズの建築（京都、2回）
- 明治村近代建築探訪（明治村）
- 神戸のドコモモ百選と旧居留地（神戸市）
- 異人館のある町（神戸市、2回）
- 和風住宅の精華（大阪市、東大阪市）
- 大大阪時代の建築と風景（大阪市）

11．建築工事実務講習会

本部主催「施工計画・仮設見積」
3月29日（水）　9：30ー17：30
講師：①施工計画(地下工事)・仮設工事
ー有光利治／鹿島建設関西支店
②施工計画(上部工事)・工程計画
ー河野浩司／竹中工務店大阪本店
③仮設計画・同見積り
ー阪井　聡／大林組本店
受講者：57名
東海支部主催「施工計画・仮設見積・積算」
1月26日（木）　9：30ー17：00
講師：①施工計画ー森　良次／清水建設名古屋支店
②仮設見積ー堀　政広／大林組名古屋支店
③積算業務ー山田　治／竹中工務店名古屋支店
受講者59名

12．新 建 材 の 紹 介

建材委員会事業として、会誌「建築と社会」の誌面を活用し、新建材の特性・市場への展開等の紹介を行ったほか、一般会員対象の建材工場見学会も行った。

13．コ　ン　ク　ー　ル

第51回工高生デザイン・コンクール
設計課題：コンビニエンス・ストア
応募者：28校・87点
審査会：10月22日　表彰式：11月19日
審査委員長：竹原義二／大阪市立大学教授
入選作品：10点（うち最優秀1点、優秀2点）

14．後援・協賛等の承認

- 「第12回大阪心ふれあうまちづくり賞」に対する協賛
- 「第25回大阪都市景観建築賞(大阪まちなみ賞)」に対する協賛
- 「大阪近代住宅ものがたりーあれこれの住まいを求めてー」特別展に対する協賛
- 「エネルギーソリューション&蓄熱フェア2005」に対する後援
- 「平成17年6月1日施行改正建築基準法・同施行令等の解説」講習会開催に対する協賛
- ジャパンストーンフェア・インターナショナル2005に対する協賛
- 第27回Japan Home & Building Show 2005に対する協賛
- 第4回ホームビルダーズエキスポ OSAKA 2005に対する協賛
- 「建築・建材展2006」に対する協賛
- 「2005年 E・家。くらし住まいの設計コンテスト」に対する後援
- 「建築／美術ー出会って何かになっていくことケーススタディとしての美術館」に対する後援
- 「あすなろ夢建築」第15回大阪府公共建築設計コンクールに対する後援
- 「鉄筋コンクリート組積造（RM造）講習会」開催に対する後援
- 「Tod Williams & Billie Tsien講演会」開催に関する後援
- 平成18年度1・2級建築施工管理技術検定試験受験準備講習会の開催に伴う共催
- ～大阪にカジノができたなら～開催に関する後援
- (社)日本建築学会近畿支部主催講演会の協賛
- 「大阪府(大阪府産業デザインセンター)」に関する後援
- 特別展「煉瓦のまち・タイルの町」開催に関する後援
- 「エネルギーソリューション&蓄熱フェア2006」への後援
- 創立30周年記念事業「今、日本が直面する内外の課題」講演会実施に伴う後援

15．青年技術者の顕彰

- 満35歳以下の青年技術者を対象に、昭和29年度より実施しており、第52回は、応募者40名のうち26名を顕彰した。
- また、顕彰者を称え激励するため、初めて表彰式・講演会、及び先輩・役員との交流会を実施した。

16．会員名簿の作成・発行

- 従来作成していた会員名簿にかわり、新たな会員名簿を作成し、各会員（個人・団体・準会員）へ無償で配布した。
- なお作成にあたっては、各会員個人に照会するなど、個人のプライバシーの保護に留意し作成した。

17．合同忘年懇親会等

建築関係団体合同忘年懇親会
17年度は、（社）日本建築協会が当番会となり、次のとおり開催した。
12月14日　18：00～19：30　太閤園
建築関係団体合同新年交礼会
17年度は、（社）大阪府建築士会が当番会となり実施された。
1月4日　14：30～15：30　都ホテル大阪

17．役員を送った団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪市街地再開発促進協議会	理事
日本建築総合試験所	理事
大阪建築防災センター	理事
大阪住宅センター	理事
国際デザイン交流協会	評議員

18．建　築　ク　ラ　ブ

協会会員の有志で組織する「建築クラブ」は、昭和47年6月から毎月続けてきた朝食会ならびに講演会を、平成16年6月の第381回を最後に開催していなかったが、「建築と社会」の平成17年12月号にその活動記録と会員有志の回想を掲載し、その活動を一応の休会とした。

平成17年度決算報告書

収支計算書

平成17年4月1日～平成18年3月31日

（単位：円）

Ⅰ．収入の部			
勘定科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 会費収入	51,150,000	54,737,750	△ 3,587,750
個人正会員	15,121,000	17,360,100	△ 2,239,100
個人正会員（地方）	1,138,000	1,383,600	△ 245,600
団体正会員	34,875,000	35,966,750	△ 1,091,750
準会員	16,000	27,300	△ 11,300
2 事業収入	28,310,000	31,252,783	△ 2,942,783
会誌収入	20,000,000	23,664,866	△ 3,664,866
契約約款収入	2,600,000	2,741,150	△ 141,150
会員名簿収入	2,660,000	2,181,900	478,100
出版委員会収入	1,000,000	458,134	541,866
事業委員会収入	300,000	340,750	△ 40,750
教育委員会収入	1,200,000	1,289,116	△ 89,116
建材委員会収入	0	0	0
事業雑収入	550,000	576,867	△ 26,867
3 寄付金収入	0	0	0
4 雑収入	15,000	143,059	△ 128,059
5 前払費用収入	0	21,569	△ 21,569
6 仮払金収入	0	106,646	△ 106,646
当期収入合計（A）	79,475,000	86,261,807	△ 6,786,807
前期繰越収支差額	0	62,395,115	△ 62,395,115
収入合計（B）	79,475,000	148,656,922	△ 69,181,922
Ⅱ．支出の部			
勘定科目	予算額	決算額	差引過不足額
1 事業費	26,520,000	32,247,237	△ 5,727,237
会誌発行費	20,000,000	26,180,930	△ 6,180,930
契約約款費	1,300,000	1,380,214	△ 80,214
会員名簿発行費	2,660,000	2,370,042	289,958
出版委員会事業費	300,000	76,727	223,273
事業委員会事業費	300,000	284,990	15,010
教育委員会事業費	1,200,000	1,400,257	△ 200,257
建材委員会事業費	0	0	0
記念事業費	0	21,000	△ 21,000
事業雑費	760,000	533,077	226,923
2 管理費	45,375,000	43,569,314	1,805,686
給与・手当	26,634,000	26,327,520	306,480
法定福利費	3,335,000	2,273,493	1,061,507
退職金	0	652,480	△ 652,480
福利厚生費	50,000	4,200	45,800
小計	30,019,000	29,257,693	761,307
助成費	2,500,000	2,444,266	55,734
会議費	1,271,000	955,990	315,010
旅費・交通費	45,000	44,520	480
通信運搬費	500,000	429,345	70,655
集金費	900,000	914,022	△ 14,022
消耗品費	2,000,000	1,854,257	145,743
備品購入費	200,000	45,990	154,010
修繕費	50,000	33,600	16,400
印刷製本費	80,000	74,025	5,975
光熱費	300,000	251,919	48,081
火災保険料	20,000	17,200	2,800
租税公課	1,100,000	817,422	282,578
清掃費	30,000	14,700	15,300
建物管理費	4,360,000	4,355,790	4,210
雑費	2,000,000	2,058,575	△ 58,575
小計	15,356,000	14,311,621	1,044,379
3 予備費	150,000	0	150,000
4 中期国債ファンド費用支出	0	55	△ 55
5 前受金支出	0	1,458,713	△ 1,458,713
6 仮受金支出	0	206,905	△ 206,905
7 退職給与引当預金積立支出	0	5,960,304	△ 5,960,304
8 記念事業積立預金支出	0	178,047	△ 178,047
9 事業基金積立預金支出	5,000,000	25,000,000	△ 20,000,000
10 貯蔵品支出	0	74,812	△ 74,812
小計	5,150,000	32,878,836	△ 27,728,836
当期支出合計（C）	77,045,000	108,695,387	△ 31,650,387
当期収支差額（A－C）	2,430,000	△ 22,433,580	24,863,580
収支差額（B－C）	2,430,000	39,961,535	△ 37,531,535
次期繰越収支差額（B－C）	2,430,000	39,961,535	△ 37,531,535

正味財産増減計算書

平成17年4月1日～平成18年3月31日

（単位：円）

科目	金額
Ⅰ．増加の部	
1．資産増加額	
中期国債ファンド増加額	55
事業基金積立預金増加額	25,000,000
退職給与積立預金増加額	5,960,304
記念事業積立預金増加額	178,047
貯蔵品増加額	74,812
小計	31,213,218
2．負債減少額	
前受金減少額	1,458,713
仮受金減少額	206,905
小計	1,665,618
合計	32,878,836
Ⅱ．減少の部	
1．資産減少額	
当期収支差額	22,433,580
前払費用減少額	21,569
仮払金減少額	106,646
ソフトウェア減少額	66,255
小計	22,628,050
2．負債増加額	
小計	0
合計	22,628,050

当期正味財産増減額	10,250,786円
前期繰越正味財産額	31,332,157円
期末正味財産合計額	41,582,943円

（注）
予算額に対して決算額が、5,000,000円以上差が生じた主な理由

（支出の部）
・会誌発行費：1000号記念特集号の編集経費が増えたため
・退職給与引当預金積立支出：期末退職給与の要支給額を新たに積立てたため
・事業基金積立預金支出：将来の当協会の運営において安定的な運営を確保するための必要資金を新たに積立てたため

貸借対照表

平成18年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額	科　目	金　額
Ⅰ．資産の部		Ⅱ．負債の部	
【流動資産】	44,342,399	【流動負債】	34,842,063
現金・預金	38,817,354	未払金	3,639,502
未収入金	4,783,683	前受金	30,980,301
前払費用	666,550	仮受金	222,260
貯蔵品	74,812		
【固定資産】	38,042,911	【固定負債】	5,960,304
有形固定資産	111,260	退職給付引当金	5,960,304
什器	111,260		
無形固定資産	93,861	【負債合計】	40,802,367
ソフトウェア	93,861		
その他固定資産	37,837,790	Ⅲ．正味財産の部	
退職給与積立預金	5,960,304		
記念事業積立預金	3,000,000	【正味財産】	41,582,943
事業基金積立預金	25,000,000		
中期国債ファンド	440,836		
保証金	3,436,650		
資産合計	82,385,310	負債及び正味財産合計	82,385,310

計算書類に対する注記

1．重要な会計方針

(1)固定資産の減価償却方法について

・有形固定資産：定額法

・無形固定資産：定額法

(2)引当金の計上基準について

・退職給付引当金

期末退職給与の要支給額を引当てている。

(3)資金の範囲について

・資金の範囲には、現金、預金、未収入金及び未払金を含めている。

(4)消費税等の会計処理について

・消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2．次期繰越収支差額の内容は、次のとおりである。

科　目	前期末残高	当期末残高
現金預金	73,866,974	38,817,354
未収入金	5,659,578	4,783,683
合　計	79,526,552	43,601,037
未払金	17,131,437	3,639,502
合　計	17,131,437	3,639,502
次期繰越収支差額	62,395,115	39,961,535

3．有形固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

科　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
什　器	1,112,560	1,001,300	111,260
合　計	1,112,560	1,001,300	111,260

財産目録

平成18年３月31日現在

（単位：円）

科　目	金　額
Ⅰ．資産の部	
1．流動資産	44,342,399
【現金・預金】	38,817,354
現金手元有高	20,571
中央三井信託銀行梅田支店	711,708
三井住友銀行大阪中央支店	13,415,505
三菱東京UFJ銀行瓦町支店	14,364,727
三菱東京UFJ銀行大阪駅前支店	198
りそな銀行北浜支店	2,392,656
郵便振替　00910－9－39975	6,876,980
普通貯金マーチャンダイズビル内郵便局	1,009
定額預金マーチャンダイズビル内郵便局	34,000
定期預金三井住友銀行大阪中央支店	1,000,000
【未収入金】	4,783,683
会誌収入	2,649,000
個人正会員会費収入	1,735,600
地方会員会費収入	94,500
団体正会員会費収入	289,583
教育委員会収入	15,000
【前払費用】	666,550
助成費	621,150
会誌発行費	45,400
【貯蔵品】	74,812
切手・はがき代	74,812
2．固定資産	38,042,911
【有形固定資産】	111,260
什器　書棚一式	111,260
【無形固定資産】	93,861
ソフトウェア	93,861
【その他固定資産】	37,837,790
退職給与積立預金	5,960,304
三菱東京UFJ銀行瓦町支店	5,960,304
記念事業積立預金	3,000,000
三菱東京UFJ銀行瓦町支店	3,000,000
事業基金積立預金	25,000,000
三菱東京UFJ銀行瓦町支店	25,000,000
国債ファンド　三菱UFJ証券	440,836
保証金	3,436,650
資産合計	82,385,310
Ⅱ．負債の部	
1．流動負債	34,842,063
【未払金】	3,639,502
会誌発行費	3,423,305
助成費	73,375
集金費	79,700
租税公課	42,122
記念事業費	21,000
【前受金】	30,980,301
個人正会員会費収入	5,312,800
団体正会員会費収入	25,343,801
地方会員会費収入	254,100
準会員会費収入	19,600
会誌収入	50,000
【仮受金】	222,260
給与源泉税預かり	22,250
報酬源泉税預かり	151,228
見学会暫定保険料預かり	38,782
会議費預かり	10,000
2．固定負債	5,960,304
退職給付引当金	5,960,304
負債合計	40,802,367
Ⅲ．正味財産の部	
正味財産	41,582,943
負債及び正味財産合計	82,385,310

平成18年度

日本建築協会役員会務分掌（敬称略）

名誉会長　佐野　正一／㈱安井建築設計事務所
名誉会長　市川　　宏／㈱東畑建築事務所
名誉顧問　薬袋　公明／㈱日建設計

会　　長	佐野　吉彦／㈱安井建築設計事務所	
副 会 長	足高　晴夫／㈱きんでん	会勢・事業担当
副 会 長	井上　　豊／大阪大学名誉教授	編集・研修担当
副 会 長	門川　清行／㈱竹中工務店	企画・財務担当
副 会 長	髙木　嗣郎／㈱大林組	会勢・事業担当
副 会 長	中井　　進／㈱日建設計	編集・研修担当
副 会 長	名張　隆司／大阪ガス㈱	総務・事務局担当

理事（○印は常任理事）

（総務） 6名
大林　剛郎／㈱大林組
栗原　信英／栗原工業㈱
立野　純三／㈱ユニオン
○松原　徹雄／㈶日本建築総合試験所
伴　　昭秀／㈱西原衛生工業所
○山形　政昭／大阪芸術大学

（財務） 4名
奥村太加典／㈱奥村組
木村　之彦／木村工業㈱
相馬　一男／住友電設㈱
森本　晴夫／三和建設㈱

（編集・出版） 9名
○上原　正行／U建築工房
岡田　聿之／㈱東畑建築事務所
木戸　　徹／鹿島建設㈱
佐藤　栄一／日本建築材料協会
佐藤友美子／サントリー㈱次世代研究所
○設楽　貞樹／㈱安井建築設計事務所
竹中　統一／㈱竹中工務店
立成　良三／㈶大阪住宅センター
吉村　英祐／大阪大学

（会勢） 12名
淺沼　誠夫／㈱淺沼組
池内　哲郎／野里電気工業
鴻池　一季／㈱鴻池組
小橋　鴻三／清水建設㈱
古原　直人／毎日工業㈱
錢高　善雄／㈱錢高組
野村　　昇／戸田建設㈱
藤井　　實／エスケー化研㈱
前川　　翼／㈳大阪建設業協会
松本壮一郎／愛知工業大学
森畑　　武／MO建築研究室
與謝野　久／㈱日建設計

（事業） 7名
河崎　恭広／都市再生機構
北山　啓三／大阪市住宅局
城口　俊雄／㈱大阪城口研究所
白井　元之／㈱フジタ
○瀬戸川　葆／関西住宅品質保証㈱
任田　　勉／西松建設㈱
渡辺　勝紀／㈱熊谷組

（研修） 7名
岩橋　貞雄／八千代電設工業㈱
片倉　健雄／元・近畿大学
岨　　良政／大阪府住宅まちづくり部
千種　幹雄／㈱昭和設計
寺下　　均／大成建設㈱
古元　眞美／㈱シブタニ
和田　克朗／元・㈶日本建築センター

常務理事　人見　尤浩

（監事）　川口　順弘／元・㈱竹中工務店
杉山　泰生／元・㈶日本建築協会
前田　隆司／㈱前田商会

平成18年度

日本建築協会評議員（敬称略）

議　長　三木　敏男／㈱サングローブ
副議長　宗田　奎二／㈱竹中工務店

本部所属評議員

（技術部門）
三木　敏男／㈱サングローブ
村上幸三郎／村上デザイン事務所

（総合部門）
木村　修治／㈱奥村組
小西　和一／㈱錢高組
笹本　孝史／㈱鴻池組大阪本店
重見　法人／三井住友建設㈱
中垣　　潔／安藤建設㈱
中窪　義征／㈱淺沼組
宗田　奎二／㈱竹中工務店
森井　繁夫／㈱大林組
山本　清彦／戸田建設㈱
和田　哲郎／飛島建設㈱
金山　隆興／㈱金山工務店
中道　正伸／㈱中道組
原　　眞一／コーナン建設㈱

（電気部門）
浅海　伸之／浅海電気㈱
大石　忠彦／㈱きんでん
嘉納　秀一／三宝電機㈱
嶋田　雅景／㈱クリハラント

（管工部門）
田中　達夫／㈱精研
若林　尚史／若林設備工業㈱
春木　雄一／三晃空調大阪本店
吉武　秀幸／㈱三冷社西日本支社

（建材部門）
月城　則男／新東洋合成㈱
深江　隆司／アスワン㈱
安田　　誠／安田㈱
山中　豊茂／㈱山中製作所

支部所属評議員

（京都支部）
上林　研二／㈱地域生活空間研究所
長瀬　博一／長瀬建築研究所
森島　照雄／森島建築設計事務所
山田　昌次／花豊造園㈱

（中国支部）
井上　弘美／アオケン㈱
国沢　幹男／日本住宅パネル工業協同組合
嶋津　孝之／広島大学
村重　保則／現代建築設計事務所㈲

（東海支部）
小宮　三辰／三辰設計事務所
後藤　利秋／㈲和光建築計画研究所
鈴木　慶智／㈱伊藤建築設計事務所
寺本　英一／㈲T.R.A
中村　哲士／元・安井建築設計事務所
福田　泰造／福田泰造建築事務所
森田富士男／㈲シード
芳山　明久／元・㈱INAX

（和歌山支部）
岩脇　伸行／環境建築計画
北山　泰秀／㈱北山組

平成18年度

日本建築協会支部長（敬称略）

京　都　望月　秀祐／モチケン・コーポレーション
中　国　森畑　　武／MO建築研究室
東　海　松本壮一郎／愛知工業大学
和歌山　東野　信義／東野建築設計事務所

「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円



A4判・240頁・並製本

1999年7月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正6年3月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階B室
TEL 06-6946-6981　FAX 06-6946-6984

頒　　価　1部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・銭高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

今月の表紙

企　　画　中村文紀
企画・写真・デザイン　伊藤　彰

窓がもつ意味は様々。穿たれた窓の趣は、例えば、陰影やプロポーションなど外部からの要請と内部における光の制御との整合といった、その意味の多重性の成否にかかっていると言えるだろう。

（中村文紀）

建物名
アンビエントホテル

■特集予告
8月号／建築物の安全・安心
9月号／第53回青年技術者
10月号／セキュリティ

編集委員会（平成18年度）

■副会長　鵜田　潤
井上　豊　△中塚　光一
中井　進　雛波　尚
■編集担当理事　肥嶋　好浩
上原　正行　房安　智也
岡田　聿之　向井　洋一
木戸　徹　安野　郷
佐藤　栄一　□設備分科会
佐藤友美子　△赤澤　正治
◎設楽　貞樹　石井　勝秋
竹中　統一　梶井　宏修
立成　良三　河井　康人
吉村　英祐　近藤　国夫
■特集小委員会　谷野　太志
□計画分科会　夏井　重行
★計画系　桝井　貴廣
飯田　匡　村上幸三郎
鈴木　克彦　山下　修
田中　直人　□施工材料分科会
高橋　和也　石原　卓也
辻　武之　平田　茂良
紅谷　昇平　△平野　剛
松田奈緒子　藤丸　啓一
△三宅　次郎　山岡　篤人
森　康郎　吉田　正友
守井　辰　□法令分科会
吉村　英祐　赤井　英稔
★建築計画系　片岡　正和
安部　新二　中迫　悟志
荒木　宏之　文山　達昭
江副　敏史　山口　一郎
奥村　明孝　山根　正利
菅野　忠司　■作品作風小委員会
神戸　嘉也　赤木　隆
木多　彩子　石塚なぎさ
楠　敦士　居内　章夫
△小林　優子　○井上　雅祐
所　千夏　稲垣　和江
野田　隆史　池上　明
枇杷　健一　川上比奈子
松森　織江　倉澤奈千子
★インテリア・住宅系　澤田　純一
阿部　泰浩　戸川　勝之
加藤　力　鞆野　淳司
神谷　浩司　中村　文紀
黒柳　亮　芳谷　晴彦
高野　直樹　増田　敬彦
田中　浩介　山田　俊紀
戸井賢一郎　■広告企画小委員会
ペリー史子　○渡邉　浩文
本山　仁　荒本　俊明
□構造分科会　今井　成年
秋田　智　大竹　賢次
木下　隆嗣　波多野　裕
瀧野　敦夫　古畑　健一
田渕　勝道　前田　衛

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2006年6月25日
発　行　2006年7月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
（株）NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

建築と社会

Architecture and Society　JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第87集　通巻1012

2006　7

特集●　設計図が伝えるもの

［総論］　建築設計図の意味をめぐって●西村征一郎 —— 22

［各論］　建築を知るとは何か—設計図を作図するに必要なこと—●木下孝一 —— 26
建築設計図が伝えるもの●庄野利博 —— 28
手書図面が持つ力●竹原義二 —— 30
ものづくりの現場が求める設計図—建設会社の設計施工における設計図の役割—●松﨑健二 —— 32
建築図面の役割について、日米の図面を比較しながら考える●光井　純 — 34
図面という思考の道具●竹山　聖 —— 36
村野藤吾の設計図面を巡る二三の事柄●竹内次男 —— 38

会告　総会議決お知らせ．臨時理事会議決のお知らせ．クロスタワー大阪ベイ見学会．平成17年度事業報告書．平成17年度決算報告書．平成18年度日本建築協会役員会務分掌．平成18年度日本建築協会評議員．平成18年度日本建築協会支部長　1

作品作風　姫路獨協大学　医療保健学部棟　8
徳島赤十字病院　10
おかもと総合クリニック　14
MEITEN-GAI（徳島駅前名店街）　16

研究の風景　山本直彦研究室（滋賀県立大学環境科学部環境計画科 環境・建築デザイン専攻 建築計画講座）　18

gallery　住宅地に面する工場建築（高草大二郎＋稲垣元宣）●池上　明　20

法令コーナー　エネルギーの使用の合理化に関する法律（省エネ法）の改正●笠原　茂　40

構造の頁　露出型固定柱脚工法●越智敏夫　41

設楽貞雄外遊日記　洋上で浄瑠璃を語って…＋インド洋をひた走る●監修：石田潤一郎　42

鼎談　大正初期の欧米と日本を追体験する●石田潤一郎×山本純孝×設楽貞樹　43

入賞発表　5回読者と選ぶ「建築と社会」賞　47
【作品部門】—国分寺文書センター、独立行政法人 国立病院機構 長崎医療センター、田原本青垣生涯学習センター、高島市立静里なのはな園
【論考部門】—21世紀の社会と建築家／馬場璋造、「建築と社会」創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷／北浦かほる

information　ドミニク・ペロー講演会を大阪市中央公会堂で.TAKENAKAデザイン展2006・大阪—御堂筋から—.小規模多機能サービス拠点の計画に関するシンポジウム.銀座・京橋・日本橋／中央通り照明デザイン国際競技.SDゼミ「木を知る」.インテリアプランナー試験実施.オープンネットワーク見本市.「人間サイズのまちづくり賞」募集.「大阪まちなみ百景」投票.タイシンけんちく展.プラド美術館展.「華麗なる日本画の美」.北斎と広重展.ピント君アートプロジェクト　51

月間の動き　平成18年5月分　53







作品
作風

設計■
安井建築設計事務所

監理■
学校法人　獨協学園　姫路獨協大学
安井建築設計事務所

施工■
大林組

姫路獨協大学　医療保健学部棟

計画地は、既存キャンパスから道路を隔てた西側に位置し、周囲を一望できる高台となっている。当施設は、文系学部のみの本大学に、理系学部として新たに創設される医療保健学部の実習・研究棟として計画された。２期計画である薬学部棟の計画を見据えて、既存キャンパス側から２棟構成の配置とし、両学部へスムーズにアプローチできる計画としている。

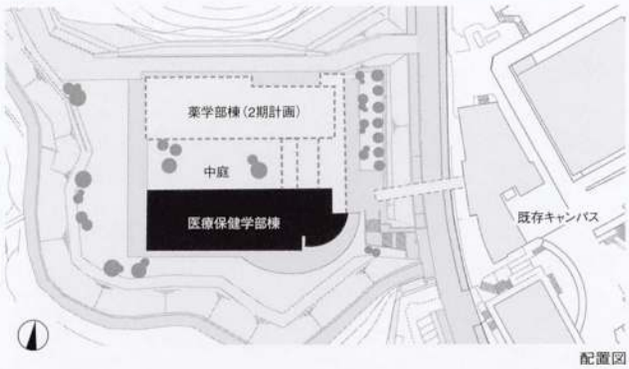
各室の配置は、縦動線の要であるEVホール・階段室を中心に、西側に実習室、東側に研究室を明快に分けたゾーニングとすると共に、建物の長寿命化を図るため、実習室の外部には設備バルコニーを設け、将来の設備環境の変化に柔軟に対応できる計画としている。また学生相互の出会いやコミュニケーションを促す憩いの場として、既存キャンパスが見渡すことができる見晴らしの良い階段室や学生ホールを設け、良好な教育環境を形成している。

外観デザインは、これら内部の空間構成を素直に表現しつつ、学生の伸びやかさと将来性を表現した縦強調の端正なファサードとしている。設備バルコニーに設けた金属パネルと、セラミックプリントガラスを用いたカーテンウォールの外壁、屋上のパーゴラは、白鷺をイメージさせる白色とし、爽やかで軽快な新学部棟に見合った顔づくりに努めている。また、建物の低層部は木製ルーバーやせっき質タイルの素材や色味を採用することで、親しみやすく暖かみのある外部空間を演出している。

実習・研究棟としての機能を整理しつつ、医療保健学部という新しい学部にふさわしい新キャンパスを創出した。

（上枝真二・三好裕司・守山敦子／安井建築設計事務所）

所 在 地 ――姫路市上大野7丁目
敷地面積 ――28,000㎡
建築面積 ―― 1,270㎡
延床面積 ―― 8,380㎡
構造規模 ――RC造、7F
工　　期 ――2005年１月～2006年２月
撮　　影 ――ナトリ工房



配置図









東側外観



緑と水に囲まれた病院



東側全景

所 在 地 —— 徳島県小松島市小松島町字井利ノ口103，104
敷地面積 —— 30,117.63㎡
建築面積 —— 9,683.21㎡
延床面積 —— 39,352.65㎡
構造規模 —— SRC造、免震構造、9F
工　　期 —— 2003年９月～2006年１月
撮　　影 —— 稲富茂仁



配置図

作品風作

設計・監理■
日建・安井設計業務共同体
病院棟：日建設計
複合棟・防災エネルギーセンター：安井建築設計事務所

施工■
（病院棟）　：建築　鹿島建設
　　：電気　栗原工業
　　：空調　三機工業
　　：衛生　三機工業
（複合棟・防災エネルギーセンター）：総合　大林組

徳島赤十字病院

■高度先進医療に特化した地域の中核医療施設

地域活性化を担う再開発計画の中核施設として405床の地域医療支援病院の移転新築計画。

幹線道路に面した東側の正面玄関と外来者用の駐車場に面した西玄関を接続するアプローチ空間として２層吹き抜けのエントランスホールを設け、北側に病院棟、南側に複合棟をわかりやすく配置した。

高度先進医療機能の特化をめざし、一般外来部門は複合棟の２、３階に集約配置し、将来的に外来部門の独立運営が可能な計画とした。

３階には手術部門、救命救急病棟（ICUを含む）、アンギオ撮影室などの高度医療機能を集約し、１階の救急車寄せ、及び２階の救急処置室と大型の救急エレベーターで直結した。

各階２看護単位からなる病棟は、スタッフステーションを各単位の中央に設けた十字型平面を雁行配置した。病室は個室及び２床室により構成し、将来の全個室運用にも備えた。

■緑と水と光を取り入れた自然に近い療養環境

病院棟の各所に大きな開口部を設けて良好な眺望を確保し、自然の光を取入れるとともに、中庭や屋上庭園を配置し、患者や家族、医療スタッフの憩いの場を創出した。

既存樹の森を建物配置と外構修景の核とし、駐車場全域の緑化と水庭の整備で、緑と水の潤いのある外構計画とした。

（中村俊一／日建設計）

■複合棟

エントランスホールを介して接続する複合棟は、１階にコンビニ・調剤薬局・レストランなどの商業施設、２・３階に徳島赤十字病院の外来部門を配置している。２階には総合診療部門・放射線診断部門・検査部門、３階には特殊診療部門及び歯科医院を配置している。

１階の商業施設は病院利用者の利便性向上はもちろんのこと、周辺地域の利便性向上にも同時に寄与した施設となっている。

■防災エネルギーセンター

再開発施設全体の共用設備を内包し、一括で維持・メンテナンスを行い、敷地内各棟にインフラエネルギーを安定供給する。

また東海・東南海地震発生による津波到達後の長期的な施設機能停止を回避するため、受変電設備および非常用発電機は２階以上の階に設置し、主要熱源機器および中央監視・防災エネルギーセンターをTP＋5.0ｍ以上に設け、機能復旧を早期に可能なように計画している。

（守安聡司・川井茂輝／安井建築設計事務所）



病院棟　２階ロビー



病院棟　救急外来



複合棟　外来ホール



複合棟　エントランスホール

西側外観



水庭のある潤いの空間



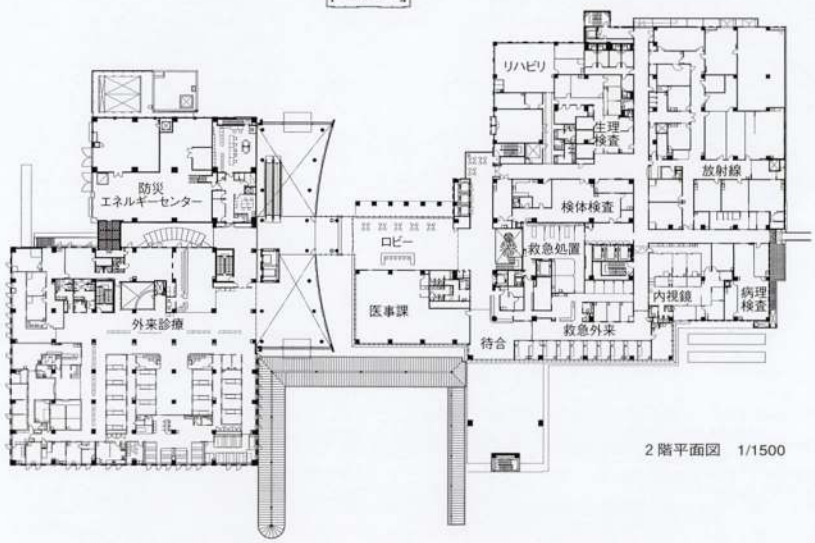
病室から望む屋上庭園



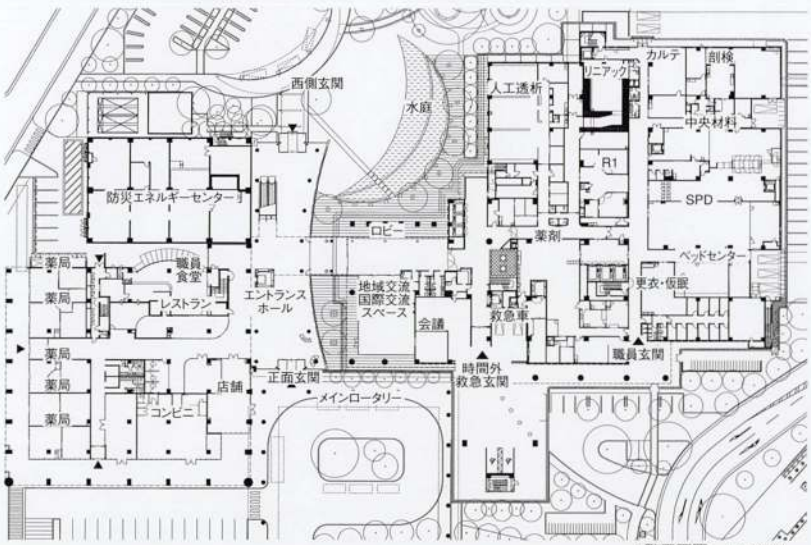
海の見える最上階の屋上デッキ



病棟基準階平面図　1/1500



2階平面図　1/1500



1階平面図　1：1500



吹き抜けのある病棟デイルーム（6階）



開放的で明るい病棟デイルーム（5、7階）



作品
作風

設計・監理■
大林組

施工■
大林組

おかもと総合クリニック

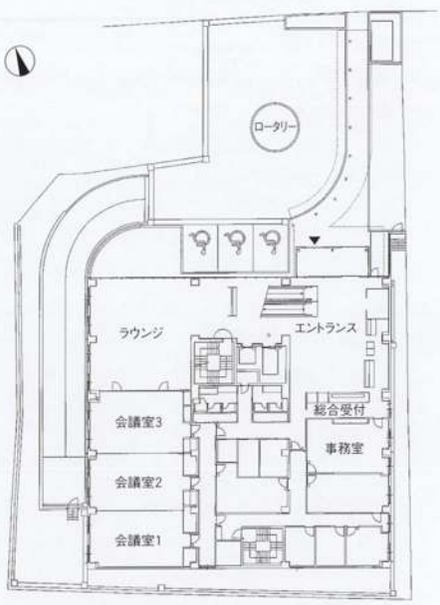
宇治市にある第二岡本総合病院の外来部門を分離独立させることを目的として計画された建物である。シックケアからヘルスケアへと医療施設の役割が変化しつつある中で、地域に開かれた新しいクリニックをコンセプトに建物全体の設計を行った。

今回のクリニックでは、北側正面のファサードを透明ガラスによるカーテンウォールで構成し、閉鎖的な空間になりがちな病院建築において、自然光を積極的に取り入れることで、アメニティの高い施設を目指している。このカーテンウォールから差し込む柔らかな光は、待合ホールの患者をやさしく包み込み、癒しの空間を提供することになる。

また、カーテンウォール越しに見える人の動きは、クリニックと周辺の街との新しい関係をつくり出し、地域住民と病院との距離を縮めることに貢献している。

地域医療の中心的役割を担われている第二岡本総合病院の更なる発展を願っている。

（松本辰也／大林組）



配置図　1：500

所 在 地 ——宇治市明神石塚54-18
敷地面積 ——1,951.93㎡
建築面積 ——　921.45㎡
延床面積 ——3,909.60㎡
構造規模 ——RC造、B1F、4F
工　　期 ——2005年4月～2006年2月
最 寄 駅 ——近鉄京都線・伊勢田駅
撮　　影 ——エスエス大阪（左海一郎）



▲正面外観夜景



▲3階待合ホール



▲2階受付



▼1階総合受付



駅正面外観


南西面外観


11階浴室前庭

作品
作風

建築主■
猪之津興業

設計・監理■
昭和設計

施工■
戸田建設
ダイダン
きんでん

MEITEN-GAI（徳島駅前名店街）

徳島で“名店街”といえば、徳島駅前の象徴として人々に広く認知されてきた商業ビルである。それは、JR徳島駅の正面という立地的なものだけでなく、高度成長時代の勢いのもと、ショッピングモールのはしりとして徳島で初めてのエスカレーターを備えるなど、その時代の最先端を行く刺激的な施設であったこともその理由であろう。だが、時代の流れと共にその印象は変わり、駅前地域の停滞感と相俟って“名店街”は前時代的なビルの代名詞となっていった。

当計画は、その“名店街”の建て替え。フランチャイズホテルを核とする複合商業施設として規模拡張、過去のマイナスイメージを払拭し収益性を高め、新たに人の流れを呼び込むことを目指して進められた。

構成は、1,2階を商業ゾーン、3階から10階がホテル、そして11階が展望浴場。

建て替えの方針として、関係者の間で統一した認識は、歴史の重みを大切にすること。長い時間かけて人々に認知されてきた旧ビルの歴史までも全て消し去り、真新しいものをつくることを正とはしないということである。

正面グラフィックのように、このビルの名称を“MEITEN-GAI”としたのはそういった歴史に敬意を表しつつ新しい時代の顔になっていきたいという意図である。

名称だけでなく、西側そごうと繋がる立体動線、エントランス正面の象徴的なエスカレーターなどところどころに、旧名店街の名残が感じられる計画とし、その上で、新鮮なメニューを盛込み人の流れを呼びこむための工夫を凝らした。

3月18日、大勢の人々を迎え新たに稼動し始めた新生名店街。店舗、ホテルはもとよりさまざまな機能が相乗的に作用し、活気ある施設でありつづけ、またそれが駅前地域の活性化に寄与するものであって欲しいと願う。

（鳥居久人／昭和設計）



1：1800

所 在 地 ——徳島市元町1-5-1 他
敷地面積 ——1,266.93㎡
建築面積 ——　949.67㎡
延床面積 ——8,058.39㎡
構造規模 ——SRC造、S造、B1F、11F
工　　期 ——2004年12月～2006年2月
最 寄 駅 ——JR徳島駅
撮　　影 ——エスエス大阪



商業ゾーン吹き抜け


3階ロビー


ギャラリーからロビーフロント正面を見る


ホテル客室

滋賀県立大学環境科学部環境計画科
環境・建築デザイン専攻
建築計画講座

山本　直彦　研究室



写真5　津波が引いた後のスリランカ・ゴールの城壁外

■スタート地点

建築計画の分野では、私が学生時代を過ごした1990年代には、日本の近代化や居住文化を相対的な目で見直す作業が行われてきました。経済成長とともに姿を変え続けてきた日本の住まいや都市に対して、もう少し長い時間の流れの中で培われ存在してきた（サスティナブルな）、原点に戻った住まいや環境のあり方を見直そうと、多くの研究者たちがアジアや第三世界に目を向けていたのが私の学生時代でした。そんな中で、恩師の布野修司先生に出会い、大学院時代には、インドネシアへ足かけ３年半ほど留学し研究を行ってきました。

最初に出会ったのは、インドネシア独特の集合住宅のかたちでした。赤い瓦屋根と白い壁のコントラストが印象的な低層の集合住宅です（写真１）。低所得者層の居住地の再開発プロジェクトなのですが、ともすれば当時すでに息が途絶えかけ始めていたかもしれない日本の団地に比べて、住宅の外にも内にも人があふれ活気に満ちていました。階段を上がって建物の中に入ると廊下がとても広く下町の路地のようでした（写真２）。集合住宅であるのに、現代の住まい方のオルタナティブという言葉をこれほど上手く表現しているものを未だかつて見たことがありません。

以上が出発点となって、学生時代は、低所得層の人たちが、都市や村でどのような住まいや住まい方の特性を持っているのかを追っていきました。最終的には、その成果の一部を、日本やインドネシアの他の研究者の方々と協力して、熱帯型の環境共生住宅として実現する機会に恵まれました（写真３）。

■初めての研究室配属、そして着任後２年目

大学院生時代が、幸か不幸か、とりわけ長かったために、現在やっと教員生活４年目に入りました。滋賀県立大学には、前任校に２年間勤めた後に、昨年の４月に着任しました。昨年の秋には、初めての卒業研究・卒業設計を行う学生の研究室の配属が決まりました。滋賀県立大学の卒研配属は、教員側は基本的には何もタッチせずに、学生同士が集まって、まる一日かけて話し合い所属研究室を決めるというスタイルです。そのため、必ずしも毎年、全ての研究室に学生が配属されるわけではないという、教員側にとってはなかなかシビアなシステムです。今まで、授業などを通じて学生の皆さんと顔を合わせてきたわけではなかったので、希望者がいれば程度の希望的観測くらいの気持ちでしたが、何人かの学生が配属を希望してくれました。まだ研究室には大学院生はおらず、４年生中心の５名から出発したばかりの駆け出し研究室です。

■自分でやる研究・一緒にやる研究

長く外国をフィールドにして研究をしてきたため、この間、学生と一緒に研究をしようと思うと、すぐにいくつかの問題に出くわしました。駆け出し研究室にとっては、調査旅費をどうやって捻出するかは大きな問題ですし、仮に行けたとしても英語さえ余り通じないところでどうやって調査をするか頭を悩ませます。なんとか調査に出発する段取りがついたと胸をなでおろしていると、そこは外国、インドネシアのバリ島の都市調査に行く直前には爆弾テロ事件が起きたり、タイで調査を行った前後の時期には鳥インフルエンザが猛威をふるっていたり、本当に毎年、何かが起こって学生にも周りの先生方にも、出発前から心配をかけてきました（写真４）。実は、私自身が留学していた当時も、東南アジアを襲った通貨危機がインドネシアにも及び、街中をデモが行進し政権が倒れるなど、いろいろありました。そこで学んだことは、危険が起きそうな状況と安全



写真1　インドネシアの集合住宅



写真2　同集合住宅の中廊下の様子



写真3　環境共生型の集合住宅



写真8　左官技術を使ったシェル型仮設住宅モデルの作成風景



写真9　同仮設住宅モデルの垂直荷重の載荷実験

な場所を見極める目をきちんと持つことでした。調査の際は学生諸君には、論文を書けるようにするだけではなく、きちんと周囲の状況を見極めて判断することも、なるだけ伝えるようにしています。

■スマトラ沖地震が起きて

一昨年の年末、スマトラ沖地震が起きたときには、実は、私自身が、スリランカの海岸沿いの町にいました。インドネシアが旧オランダの植民地だったことの繋がりで、スリランカのオランダ時代の町を見にいっていたところでした。幸いにして強固な城壁の中にいたため無事でしたが、数度に渡って押し寄せる津波や水面下に沈んだ城壁外を漂うバスや車を城壁の上から目の当たりにしたのは衝撃的でした（写真5）。帰国後、さまざまな報道によって甚大な被害状況が明らかになるにつれて、ことの重大さと自らの幸運が実感されました。一方で、大学院時代にいたインドネシアが最も大きな被害を受けたことを知り、半年後の昨年夏にはインドネシア・スマトラ島のバンダ・アチェ市に被災後の住宅供給状況を調べるために学生と一緒に行きました（写真6）。さまざまなドナーによって住宅が供給されつつありましたが、海風にさらされっぱなしのテントや、自力で壊れた屋根のトタンを集めて立てられた仮住まいを見て、そして何より建物が何もなくなってしまった場所に立ったことで、自らが行ってきたハウジングの問題をもう一度見つめ直すことを考えることになりました。

■そして現在の研究

津波後のインドネシアで何もなくなった居住地に立ったことは、災害とハウジングの問題を通して研究室の方向性を定める大きな要因になりました。現在の研究室の活動のひとつとして、阪神大震災以後の仮設住宅に住んだ方々を移り住んだ共同室を持つコレクティブ型の集合住宅である「ふれあい住宅」の居住者連絡会への参加、ふれあい住宅をその設立構想から一貫して世話してこられた石東直子さんの主宰する「くらし・住まい塾」への参加を始めています。これは研究の場としてだけでなく、学生、教員、研究者が共同で行う居住者の生活の便宜を向上するために考える実践の場を提供していただいています（写真7）。

一方、研究室自体のものづくりを支える活動として、本年度からは学外のメンバーとも協力して仮設住宅建設の技術開発実験にも取り組み始めました。伝統的な左官技術を利用して、軽く薄いシェル構造のドームをつくり、仮設住宅に応用できないかという試みです※1。湿式工法は、素人にも比較的安全な工事方法なので、学生、ボランティア、あるいは被災者が協力して自助建設可能なものを目ざしています。現在、材料の強度実験、実際のシェルを縮小スケールでつくり、垂直方向の長期荷重に対する実験、余震を想定しての振動台を用いた地震動に対する試験などを実施してきました。本年度中には実大のものを現在検討中の空気膜型枠により建設する予定です（写真8、9）。

まだまだ駆け出しの研究室は、こうした研究と実践の芽を育んでいる段階ですが、当面は災害を通してハウジングの問題をハード、ソフトの両面で着実に考えながら、近い将来、社会的な実践に繋がるようになることが、研究室の当面の大きな目標です。

※1 同研究は、住宅総合研究財団と立命館大学COEの研究費助成を受けている。研究メンバーは、筆者に加え、小澤雄樹、森田一弥、柳沢究、平尾和洋

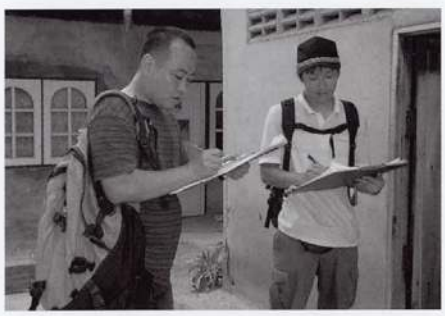


写真4　タイでの調査（左:筆者）



写真6　スマトラでの住宅供給調査



写真7　ふれあい住宅連絡会の風景

gallery









住宅地に面する工場建築

設計

高草大次郎+稲垣元宣

若い会社、経営者のためのカレー工場として、新しい感性の施設を目指す。
大阪湾と住宅地に挟まれた敷地に立地し、海からの塩害と海風への対処をしつつ、住宅地に面するにふさわしい工場建築のあり方を検討した。
住宅地から建物をできるだけ離し空地に植栽を設けること、工場建築にありがちなマッスな形態による威圧感を低減するため建物高さを抑え、深い庇により陰影のあるファサードとして住宅地に向かう。
大きな特徴である深い庇と、庇と一体となる袖壁は、搬入、搬出口の雨と風よけの機能をもち、意匠的にも機能的にも、工場内外のバッファーとなっている。
1階製造室、2階の事務所、食堂、見学通路は、大きな開口部から光を取り込み、明るい自然光あふれる工場として、ランニングコスト低減を図っている。

高草　大次郎
1972　滋賀県生まれ
1995　大阪大学工学部建築工学科卒業
1995　内藤廣建築設計事務所勤務
1999　東京工業大学環境理工学創造専攻
　　梅干野研究室研究生
2000　高草大次郎建築設計事務所設立

稲垣　元宣
1972　愛知県生まれ
1995　大阪大学工学部建築工学科卒業
1995　藤田宣紀建築設計事務所勤務
1997　エーアイアーキテクトスタジオ勤務
2002　イナガキケンチクケンキュウショ設立

企画編集　池上　明（作品作風小委員会）

特集

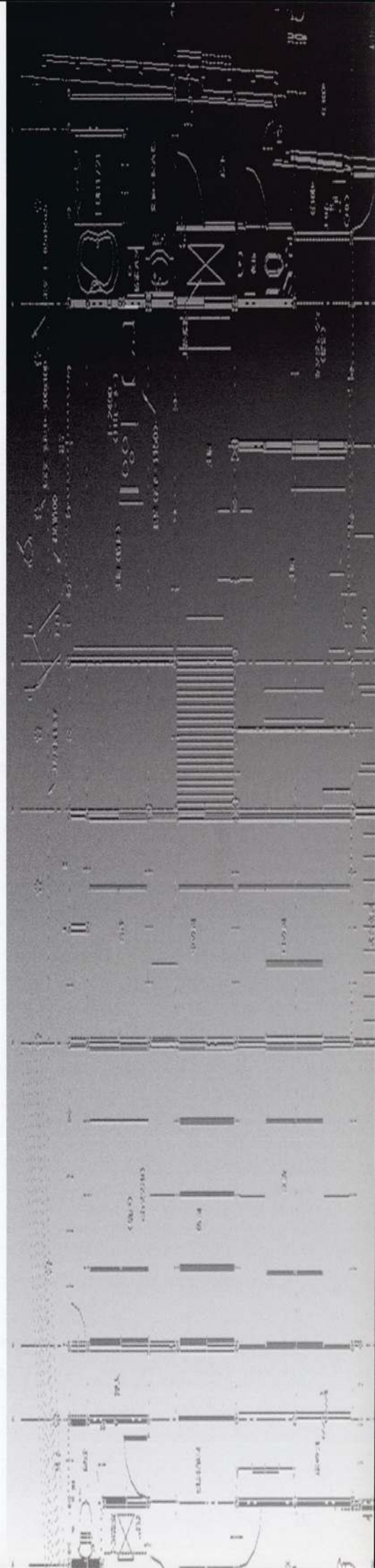
設計図が伝えるもの

建築は設計図によって建てられるー現在では自明のことであり、デザイン・機能・コストなど建築のすべてのベースとなるのが設計図です。そのため設計図には、その建築に関わる多くの人に建物の情報を伝えるという重要な役目があります。しかし、一口に「設計図」といってもその表現内容・方法は時代や設計者によって様々であり、その図面の持つ意味や価値も多様です。

一方で、名作といわれる建築や既に失われた建築にとっては、「設計図」そのものが文化的価値を持つこともあります。また、建築を学ぶ者にとって「設計図」に接することは教育的な意義があります。

今回は、「設計図」そのものをいろいろな角度から検証することにより、建築に携わる様々な立場から設計図への思いを引き出すと共に、その意味と価値について考える契機としたいと思います

編集委員　小林優子



総論

建築設計図の意味をめぐって／西村征一郎

各論

建築を知るとは何かー設計図を作図するに必要なことー／木下孝一

建築設計図が伝えるもの／庄野利博

手書き図面が持つ力／竹原義二

ものづくりの現場が求める設計図ー建設会社の設計施工における設計図の役割ー／松﨑健二

建築図面の役割について、日米の図面を比較しながら考える／光井　純

図面という思考の道具／竹山　聖

村野藤吾の設計図を巡る二三の事柄／竹内次男

企画　建築系分科会

建築設計図の意味をめぐって

西村征一郎

はじめに

1998年から2005年迄、毎年催されてきた村野藤吾建築設計図展をはじめ、近年アルヴァー・アールトの住宅展、前川國男建築展、吉阪隆正展等の開催が各地で続いている。いずれの展覧会でもその企画の意図には多くの共通点が見られるが、その背景には、現代の建築界における建築設計図のあり方に対する警鐘、あるいは近代建築のリーダーたちが描く高質な図面とそれに基づく作品に対する憧憬、さらには将来の建築界を担っていく若者に対する建築設計の啓蒙などが意識されているように思われる。

一方、マスコミに煽られているわけだが、数々の世界文化遺産等々の“不思議”の報道が続いている。多くの建築遺産から圧倒的な景観の自然遺産まで、TV映像ではあるが、何度見ても面白く一度は訪れてみたくなる。筆者はとりわけ、主題の「設計図」に関わる対象としてもナスカの地上絵（2006.4.21 新たな発見の報道）やアルジェリアをはじめとする岩絵や洞窟画に興味をもつ。両者には自然と一体化した壮大さと、描写の巧さという評価の視点に差はあるものの、平面に描かれた線画であり“図”といった方がよい。この図が意図するものは何であろうか。多くの推測がなされているが、人工衛星から送られる写真を分析してやっと判明できる図形、あるいは約6000年前とされ今は当地には存在しない動物の絵が、意図し伝達しようとする思い（エネルギー）は並はずれている。映像からの想像ではあるが、これらの絵が“何らかの対象を写す”ことから“何らかの意図を伝達する”ためのシンボルとしての絵になっているのではないかと考える。例えば、集団のテリトリーができるだけ巨大でありたいという夢のシンボルである図形、集団の生命の維持を祈り復活と再生を願うための動物たちの姿図ではないだろうか。

さらに、世界建築文化遺産は、現在（2006年5月）600点以上が選定されている。その選定の根拠のさらに底流に、ヨーロッパを中心とした建築に対する厳然とした理念があることが知られている。（例：1975 アムステルダム宣言）そこでは人間が建築をつくり、建築が人間をつくる、つまり人間は環境の影響を受けて育つとされる。その意味で建築は文化であり、建築に携わる者はそのような使命観をもって、将来文化遺産になるよう創造行為（設計、施工）に臨むべきであると明記されている。建築はある意図をもった設計図のもとに造られ、文化として存在し続けるべきなのである。よって設計図の評価においても、単なる伝達手段・方法を超え、時には自立して図面に内在するそのものの文化的価値も問われる。

本論では、建築設計図が建築を文化として認識する建築家によって作成され、結果としてその建築が遺産として継承されるものはもちろん、実現はしたが被災や経済的要因で現在は存在しないもの、さらには実現はしていないが、その設計図そのものがもつ文化的価値について述べるものである。アルヴァー・アールトの作品集のうちアールト自身が編集に関与したものは、実現した作品に混じって実現していない建築の図面が大きな比率で意図的に掲載されている。このことからも図面が単なる情報伝達の手段とはいえない。建築家がその場面で何を考え、何を伝えたいかを学びとることは可能だと思う。アーカイブと言われる図面資料保全は、考古学的に扱かい整理するということでなく、つまり建築の概要や形態、写真情報の伝達だけでなく、“文化として”どのように設計したかというプロセスを検証できることにある。

これらは建築以外の芸術分野その他でも同様の評価ができるかも知れない。音楽における作曲と演奏の関係、演劇における原作と脚本や演出等々。設計図はその意図・心を関係者に伝え、その人たちの能力を結集して1つの建築をつくり上げる。車や住宅産業などにみる商品づくりの図面の場合でも、その初期のスケッチ、アイデア段階では当然、社会文化的背景をふまえた意図に“純粋”な面白い図が存在することも推察できる。つまり結果としての図面ではなく“ものつくり”のプロセスを表現しているか否かに文化的重みを感じると言ってよい。

以上のことから本論では、多岐にわたる建築関係図書のうち、構造や設備等との統括や調整を主導するものとして、いわゆる意匠関係図を対象として論述していく。また、昨今の建築界の状況－偽装、改ざんをはじめ、設計入札が一因でもある未熟な設計図の横行、公開可能なのに思想・意図の伝わりにくい確認申請図のあり方なども視野に入れて考察を試みる。

伝達の意味

設計図の主たる意味は、設計意図の伝達にあることは言うまでもない。それもできるかぎり正確に伝える必要がある。しかし、特にデジタルな表現のみでは、建築イメージの伝達は容易ではない。建築に関連する図面の中でも、確認申請図等の図面表現の意味は法律に合致していることを表明することにあり、構造図や設備図も建築を機能的に成立させる内容を示すものである。しかし、例えば周辺環境との関係で、建築がいかにあるべきかというイメージの表現には、十分な説得力が必要で、建築主のみならず、その建築の成立に関与する関係者含め、社会に対しても合意を得なければならない。例えば、建築を1個の構築物とだけ考えるなら窓は単なる開口であるが、その窓が美しい風景に面しているか、騒音の著しい道路に面しているかにより、内部空間のイメージを含め、平面計画の妥当性

にまで伝達の意味は及ぶ。日常、多くのエスキースやスケッチを駆使し、その設計意図をより正確に伝達しようと努めるわけだが、所詮、立体や空間（３次元）を２次元の図で表現するのは無理がある。それは建築や内部空間が直方体からなることを前提にした図面表現の限界でもある。建築の初歩を学ぶ人たちにとって、あの階段表現は理解しがたく、天井をはずしたアングルのパースなど考えられないらしい。さらに、曲線を主体とした建築や空間の図法上の表現は困難であるし、いくら多くの図面やコンピュータグラフィックの図を付しても、そのイメージを他者に伝達するのは容易でない。

また、設計図は一般に縮尺をともなうが、同じ図形でも1/100と1/200の場合により、その空間イメージは大きく異なることはよく経験することである。これは図面の諸寸法が人間の尺度を基準に常に原寸の感覚で決定されるという了解が無くては理解できない。つまり日常の空間感覚を図面表現するとどんな寸法体系になるかを前提にしないと設計図の表現はできないし、できても単なる“思いつき”や未経験の“ハッタリ”のレベルでしかないと考える。だから筆者にとって、児童心理学上の直径12ｍの円と美術館の直径100ｍの平面を感覚的に比較する術（すべ）を知らない。

さらに設計思想（コンセプト）の表現と伝達の度合いが、その対象となる人々の建築経験（理解度）によって大きく異なることは、コンペ審査等でよく見かけ、多くの矛盾を発見することもある。例えば、バリアフリーを目指すことは、公共性が不可欠な現代建築にとって通常の設計意図の１つになる。しかし、ハートビル法によるとうたう緩勾配の階段は、平面や階高の十分な検討が無くては伝達は矛盾したものになり混乱を招く。また、最近のアイデアコンペにみる図面表現は、以外に画一的であり、一言で言えば、CG技術を駆使するものと諸々のケーススタディー（聞きとり調査の分析等）の細密な表現を含むものが目立つ。つまり、従来からの普通のどこにでもある四角い箱から、いかに脱却し新鮮で個性的な建築に見せるかという伝達にかける過剰なほどの表現と言ってよいが一般的にリアリティに欠ける。数多く残る寺社の姿をはじめ、伝統と言われる建築つくりの“文法”が歴史的に継承（伝達）されていることを現代はどのように評価するのか。つまり、長期にわたり改良、改善を重ねて様式化された建築がもつ表現のルールを学ぶことなく、新奇に拘わる設計図では、類例を欠き、設計意図を適切に伝達し難い。アールヌーボー、アールデコから、ミース調、ライト調に及ぶ“様式的”建築もあり、設計図が伝達する主たるものは“表現のルール”といえる。このルールには、常にその風土、時代の“伝統的素材や技術”が裏付けとして存在していることも同時に伝達されるのである。木造建築の棟梁と規矩術の関係、石造建築の石工と石を学んだ白井晟一の図面、コンクリート造とコルビュジエに学んだ吉阪隆正の図面。いずれにしても、設計図の意味は意図を伝達することにあるが、文学と同様、逆に相手が作者の意図をいかに読み取ることが可能かとする視点も、常に必要であろう。

コンペ図等の評価は、この読み取りにかかっているが、必ずしも実現したものの設計図が、その意図表現に優れているかどうかは別問題である。前述したが、アルヴァー・アールトの作品集には、多くの実現作品に肩をならべてコンペ等の優秀作を含め、実現しなかった住宅等の設計図書も数多い。これは、明らかにアールトのメッセージで「この図からアールトの純粋な設計意図を読み取って下さい」というものだと思う。筆者は数年前、このメッセージに応える意欲で、学生たちと共に、アールトの７つの実現しなかった住宅の分析を通じ、最終図と模型の想定を行なったことがある。アイデア図からアールトが伝達したかった“純粋な”設計意図を見つける作業と言ってよい。

要するに発信する側と受信側の双方の努力がなければ、設計意図の伝達は不完全極まりないものになる。アーカイブの価値は、これらのことを再確認できることとも言える。

設計プロセスの意味

設計図のもう一つの意味は設計プロセスそのものであると思う。それは設計意図の自己確認作業とも言えるし、図面を描くこと自体、自分自身に設計意図を伝達する行為とも言えよう。発信する側であり受信する側でもある。当然、伝達される（描かれる）べき意図はなかなか満足いくものにならない。試行錯誤の繰返しである。イメージはあっても表現できるとは限らない。プロセスが長時間に及ぶとき、元々の設計意図すら変化する場合もある。未熟なためだとは言え設計行為には時間の経過というファクターが必須なのだと思う。しかし、これは単に空白の時間ではなく、ずっと設計のままならない状況が脳裏から離れないが、製図板には向っていない「間」の状態ではないか。その後、ある確信をもてる時がやってくる。“腑に落ちる”と語られる事態である。設計行為の喜び（快感）は、挑戦し、悩みぬいた後、この時にピークを迎えるように感じる。

コピー機の性能が格段に良くなったことが主たる原因であろうが、最近トレーシングペーパー（トレペ）を見かけることが少なくなった。従来スケッチ、エスキースを含めて、図面はトレペに描かれることが大半であった。数階建ての建物の平面図は、トレペを重ねて作成するのが普通であり、当然、同じ箇所を何回も“写す”行為を繰返すことになる。その後、このムダ（？）を省くため、必要同一箇所をコピーした“第２原図”なるものが登場し、異なる箇所の

みを修正液により消去し、加筆する作業に変化、設計作業はより「伝達」本位になったと言える。さらにCAD化により、設計図は完全にデジタル化し、１本の線にこめる感情すら付与しがたくなっている。点から点へ線を描く時、これはまさに、設計のプロセスであり、思考の内にある。“写す”という行為は、その元の図の意図伝達の力を確認することでもあり、時に元の図の変更（改良）のきっかけにもなる。さらに、“写経”のように、写す対象を確信することが信仰の一端を担うことに例えることもできる。既述のアルヴァー・アールトの実現しなかった住宅展に出品した大小７つの住宅は、アールト直筆のスケッチを“写し”設計意図の読み取りを計り、想定される最終図をアールトのように淡黄色の和紙に鉛筆で表現した。模型はフィンランドで造られるよう木質の材で作成。アールトの隠された思考の痕跡をたどることが、少しでもできたのではないかと思っている。

村野藤吾の建築設計図研究が始まって10年近くなるが、現在約５万点以上の図面が京都工芸繊維大学に寄託されている。修士論文の絶好のテーマと学生諸君に図面の分析を奨めるが、“プロ”の図面はそんなに簡単に解明できるわけがない。現在建て替えられ見るべくもない村野の代表作「大阪そごう」には、心斎橋筋側の内部改修案が連続して４案存在する。村野事務所特有の１枚の図面に徹底して表現（意図）を凝縮したものである。これをテーマにした学生は、当初全く理解不明だった様子であり、筆者も４案の相違を解説するのにとまどった記憶がある。そこでとにかく図面を「写す」ことから始め、結果的に順調に分析が進行し、修士論文は完成した。頭（知性）で理解するより、身体（感性）で学ぶことの大切さを痛感した。このプロジェクトについて、さらに興味があるのは、その設計プロセスである。通常、絶対解のない建築の設計で、数案を作成するは、潔しとする、しないの感情は別にして、一般的である。しかし、この４案はいずれも、構造図、詳細図（恐らく設備図も）に及んでいることが異様に思える。時間をおいて変化する設計プロセス、その各時期における実施設計図に近い４案の設計図書の存在は、単に建築主の意向の変化と工期の制約のためなのか、村野にとっては“腑に落ちる”案が次々に出現したのか定かではない。因に実現したのはこれらの４案のいずれでもない。

村野の何重にも重なる修正の筆は有名である。特に残念ながら解体撤去された「松寿荘」の関係図書中、前面道路と屋根の形状の関係をめぐる図が印象に残っている。所員の描いた図を修正する落書きのようなスケッチが興味深い。この修正図を見るかぎり、何故に彼がこの屋根にこれ程迄、拘わりをもつかということが、私達にもよく理解できるし、当然所員への意図の伝達を兼ね、自身の設計プロセスでもある。単に図形的に建築の形を決めるためのプロセスでなく、近隣環境を十分認知した上での屋根形状であったわけであるが、不動産価値の高い近隣環境のために取り壊されたのは、いかにも皮肉である。

他に制約の少ない新築の場合でも、既存の近隣（モノ）との関係を設計プロセスの中で熟考することは不可欠である。現代建築での数字が１人歩きする設計態度は、組織でいうトップダウン的であり、頭（知性）で考えたことを、諸々の数値の制約のもと最終的に仕上素材（感性の対象）に至るという図式である。建築教育の不十分さも指摘できるが、人間の生活に密着する“モノ”からの発想がいかにも軽視されてきた観がある。増改築やコンバージョンの設計事例も多くみられるようになったが、既存建物の制約を、むしろ感性を動機づけるモノとして認識していく覚悟が必要である。村野の事例を含め、多くの先達のもつ“○○風”がおよそモノ的であり、モノに対する愛着や感情、知識や技術が設計プロセスの背景に見え隠れしている。

伝達を必要とする事柄

設計図の主たる意味は、設計意図の伝達にあると述べたが、さらに具体的な事例を追って伝達を必要とする事柄のいくつかについて述べる。本論は建築関係図書のうち概ね意匠図に絞って考察しているが、設計意図を伝達する上で、建築関係図書が意匠図により統括されている必要がある。しかし現代建築における大空間や超高層ビルなどにあっては、従来のように構造や設備が意匠の傘下にあるという関係は成立し難く、共通の目標を持つ専門家集団の協同作業（コラボレーション）と言ってよい。今後共、このような協同作業はより多くなり、それを統括する者が建築家（意匠担当）でなくなることも考えられる。昨年（2005年）以来のマンションやビジネスホテルの構造偽装等は、建築の社会性を無視した許されない行為であるが、利益最優先の商行為を主導する者が指揮をとれば、他業界含めて、このような事態の発生は今後共十分予想される。つまり、拡大、多様化する現代の建築を造り出していくには、キーマン、スーパーバイザー的立場をとる統括者が、チームの要として必要とされ、この統括者の資質・努力により建築の質が左右されることになる。加えて図面によって表現される設計意図が次第に見えにくくなっていることも事実である。設計行為の全過程において“木を見て森を見ず”的な事態に陥入らないよう、伝達を必要とする事柄を十分認識して意匠図の中で検討し、表現していく努力を続けていかなければならない。

建築空間を２次面の設計図で表現することの困難さは既に触れたが、筆者の経験上、伝達すべき事柄と設計プロセスの矛盾を強く感

参考資料
村野藤吾建築設計図展カタログ１～７　京都工芸繊維大学美術工芸資料館　1999－2005
DISCONT不連続統一体　吉阪隆生＋U研究室　アルキテクト丸善株式会社　平成10年
誕生100年前川國男建築展（カタログ）　誕生100年前川國男建築展実行委員会　2005－2006

じることがある。それは素材に関してであり、我国の建築設計教育のかかえる問題点であるかもしれない。現代のコスト最優先の考え方も加担して、建築の躯体と仕上の構成は原則的に分離されている。歴史的な、石造、煉瓦造、木造等の構造様式では概略一致している内外の素材が、現代では極めて表層的なものに特化している。木造大壁、石を貼る、レンガタイル、ビニールクロス等々がそれ等であり、コンクリート、ガラスと一部の金属以外、素材自体が仕上を兼ねているものは少ない。このことから、設計の初期の段階で仕上げ材のイメージが想定できない。建築空間のボリュームは確定できても、人間が利用する空間として、その空間を構成する素材を表現しないことは、設計意図の伝達が不十分であり、経済本位の設計プロセスの欠点を追認していることになる。素材を意識するのは、概ね“原寸”の世界であり、人間の身体と共にあるという当然なことが前提である。しかし、設計教育実習の場では、図面は1/200、1/100せいぜい1/50で描かれ、素材の意識が助長されることは稀である。実際、平面詳細図でも矩計図でも、仕上線と躯体線との強弱で、意匠か施工か、優先される順序が異なって伝達されていることがわかる。もっとも、展覧会でみる村野、前川、吉阪等々、我国の近代建築のリーダーたちの図面には当然素材の表現がなされている。

次に、光あるいは色についてであるが、共に“形”をもたないものの建築表現をいかに行なうか、いかに伝達できるか。素材と同様、建築空間にとって、開口部にともなう光、光により素材やテクスチャーをともなう色も、コルビュジエのロンシャンや村野の谷村美術館を例にとるまでもなく、この２つの建築的要素で建築空間、特に内部空間が決定的になることがある。光については、風土上、歴史的にもその位置付けが異なり現代に及んでいると考えられる。つまり日本の地理的条件と木造文化における光、ヨーロッパの風土と石造や煉瓦造による光の位置付けの差異を無視した形で現代建築はガラスカーテンウォールを素材としてグローバル化してしまっている。ガラスによる開口部の視覚上の効果は理解され易いが、風土上光がもたらす影響は小さくない。例えば、同じ間取り、開口条件の集合住宅（そのこと自体疑問であるが）で、南面住戸が最優先され他面と著しい価格差を生じていることは常識化している。さらに、伝統的な茶室は壁と開口の調整により光をコントロールして成立っているとも考えられるし、十分な開口部により室内外から一体となる和風建築では、光の方向により南庭より北庭が好まれることもある。このように我国の風土条件においては、光はコントロールされる側にあると思うが、その建築的表現と設計意図の伝達は易しいものではない。

色は建築を構成する素材そのものにより左右されるが、先の仕上材によるサンプルの色数は無限に近い。例え木材であっても、世界各地から輸入され内装材として利用される板材でも同様である。まして着色可能な金属からタイル、カーペット、壁紙まで、商品として色への拘わりはすさまじい。しかし、設計当初から細部にわたって建築の色が決定されていることはほとんど無い。特に仕上材自体、躯体完成時頃にしか決定をみないことからやむを得ないことかも知れないが、設計図書のうちパースでしか色のイメージを伝達することはできない。吉田五十八設計監修による「大阪ロイヤルホテル」の現場では所員の描いた線画に吉田が色鉛筆で着色している姿を覚えている。これは設計図のプロセスの意味に関する行為であるが、日本の色に拘わった吉田が色鉛筆で着色することで、その空間の具体的な全体像を模索し、伝達していたのだと想像している。素材自体の色だからと単純には決定できない。コンクリート打放しといえ、建築が大規模になると生コンの色合いの変化は避けられないし、大理石の色調や模様は施工時まで不明に近く調整を余儀なくされることも生じる。色はその空間と外光の関係、照明との関係、他の仕上面の素材・色との関係、さらには将来の退色や変色の可能性まで、本来設計意図として伝達される必要がある。

一方、多様化する建築の設計図において伝達を必要とする事柄が図面に慣じまない、図面の読み取りに差異を生じることもある。代表的な事例がガウディのサグラダファミリア大聖堂であることは有名であり、彼の作成した模型によってのみ施工が引き継がれていると聞く。これは設計行為が一元的に統合されたプロセスをもつ場合と異なり、部分の形・素材から自然発生的に工事が展開されていくという特徴ある過程にある。既述のアールトの実現しなかった住宅の想定プラン作成の事例との共通点もあるが、伝達内容の適確さでは図面より模型の方が優れているかも知れない。

建築の素材とは言えないが、地球環境の保全という与条件のもとで変化する建築の図面的表現も課題である。調光装置により外壁を覆ったり、太陽電池パネルの屋根や屋上緑化等、直接人間が利用する空間でないかぎり“機械”と同等と考えてよいのか。一方室内環境に直接影響のある空調機器等は、いつまでも意匠図に表現することはないのであろうか。さらに外部空間（外構）の意匠は、常に建築と一体化して風景となり、景観として成立つべきであるが、ランドスケープデザイン分野が確立した現在でも、長い歴史をもって成立している寺社等の事例の実測図（西沢文隆 他）以外、建築と庭の協調した設計図は少ない。これは外構、特に樹木がもつ時間的変化と建築がもつそれが相入れる接点をどのように位置づけるかに関わる。京町家の坪庭にみるような建築設計意図の表現が可能であろうか。

（にしむら　せいいちろう　京都工芸繊維大学名誉教授）

建築を知るとは何か
—設計図を作図するに必要なこと—

木下孝一

設計図を書くのに何が大事か。最近の設計者の設計図を見てみると、細かいところまで作図はしているが、材料や構造が分かってない図面が非常に多い。表層的なデザインばかりに偏って、建築がどうあるべきか分かっていない。逆に材料や構造がきちんと分かっていれば詳細設計図などなくても建物はできるのである。私は基本的には自分で設計したものしか施工はしないが、設計図として作図するのは間取図と姿図である。高さ関係や屋根勾配などは現寸で寸法を押さえていく。他人の設計の場合は基本設計図までしか受け取らないようにしている。いいかげんな詳細図で施工しろと言われても責任が持てないからである。では責任の持てる設計図を作図するのに必要なことは何なのか。それは図面の体裁や作図法ではなく、「建築を知る」ということである。ともかく、私が思っていることをここにあげてみる。

建築用途の把握

設計者は、施主の建てる真意が分からないようではいけない。施主はいったいどのような目的で建てるのか、何を考えているのかをしっかりと考えることが大切である。これが分かるということは、施主の意を汲んで仕事をするということである。これを一言でいうなら「おもてなしの心」で設計するということではないだろうか。

地形を知る

設計者は建てる場所の地形を十分知ることである。基礎を判定するにこれは必要なことであるが、それにはお金をかけて精密なデーターをとらなくても分かる方法がある。現場へ行ってまず周囲の木を見ることである。まず植物の根が上がっているかどうかを見る。これは水位が高いと根が上がっているのですぐに分かる。次に古い枝がどちらを向いているかを見る。これで台風や強い風がどちらから吹いてくるかが分かる。これで風向きを知ることが出来るのだ。熱海で家を設計したときは5年かかった。そこには大きな木が生えていなかったので地層がなかなか読めなかったからだ。ただ、竹があったので竹に何でも教えてもらった。例えばここの竹は伸びるのが遅いので、水位が低いことが分かったし、絶壁のところには千年以上の楠があったので、ここは崖崩れがないといことも分かった。大災害があると千年も持たないからだ。このように木や竹などの植物に教えてもらうことだ。

素材を知る

建築に携わる人たちの多くが研究を十分にせずに材料を使っている。その材料が、一体いつまで持つかということをよく知らずにいる。私の研究所では、何よりも先に素材の研究から入っていく。何事もそう、本質を見極めてやらないといけない。だから材料も徹底的に追求する。材料、素材の研究はとても奥深い。例えば、しっかりした構造の建物をつくるには、コンクリート基礎に鉄筋をしっかり入れて岩盤のようにかたくする必要があるが、砂や砂利が悪くてはセメントに泥が入ってしまう。泥は水分を吸収するから、そのため鉄筋を腐食させ、その腐食が原因でコンクリートが割れてくる。また、関東と関西では砂の粒子が違う。関東は粒子が細かい。この場合、建物の強度を上げるにはセメントの量を多くしないといけない。砂や砂利を見極める目を持たないとしっかりした基礎をつくれない。私はベタ基礎には水を吸うコンクリートは使わず花崗岩を使っているが、この花崗岩でも水を含むものと含まないものがある。

このように一つひとつ材料を十分に知り尽くすことが大切である。そのためにはどうするか、実際に体験することである。体験をしていくと「なるほどな」という実感が脳に少しずつたまっていく。脳の中に入ったものは、体験を重ねることで磨かれていき、それはけして消えない。どこへも行かない、他人もとらないし、紛失もしない。訂正する場合も徹底的に違いを比較しているから、書物だけの知識と違い簡単にできる。素直に悪いものを消していってくれるのである。

それから大事なことであるが、昔から言われていることや学者が本で書いているものをけっして鵜呑みにしてはいけない。自分で体験してみることだ。常に疑問を持って真実を求めることが大切である。そうするとその素材を知る目を養えるのだ

耐力のある構造

建築の原点は安全と長持ちである。建物は人の生命、財産、健康を守るところであるし、人が一番無防備になっているところでもある。私たちはそのようなものをつくるのであるが、いったい設計者のどれだけの人がそれを意識して取り組んでいるのだろうか。

私は自分に建てさせてもらうものには「永久に生き延びてくれよ」という思いをもって取り組んでいる。そのためにはしっかりした構造でなくてはならない。そこで、強くて寿命の長い構造材に適した木材を知り、選ばなくてはならない。ましてや細い柱に枘を貫き、何百年も持たせようと思ったらどこの木が強いか知ることが大切である。木材についての知識不足は建物自体の危険性を招くものだ。例えば茶室の柱には直径2寸7，8分のもので40〜45年の木を使うが、設計者は見た目の寸法と値段の安さだけから選ぶので20〜25年でその太さになった弱い木を注文する。それは構造材として欠陥を生じてしまうことになる。

私の場合、予算の少ない建物には、意匠は省き構造にお金をかけることにしている。まずは構造本位である。それは建物の耐久性を考えるからである。構造材にかけるお金は絶対に削らず、4世代先まで住めるような家の建築を目指している。耐力の落ちない家にする。これが大切なのである。

それからもうひとつ、私は家を建てる場合、先の先を読みながらつくっている。例えば水道管は壁の中には入れず外に付ける。そうすると故障しても壁を穿る必要がないから強度は落ちなくてすむ。それから修理しやすい工法、修理を簡単にさせる工法をとっている。また、建築用途が会社の場合はその会社が成長したときに増築することも考えて、しっかりとした構造にしている。

最悪を想定した設計

常に最悪を考えるということである。そんなことは何十年に1回しか起こらないということをいつも想定して設計をすることが大切である。普段はありえないことだが、たとえば屋根の裏に台風などが来て吹き上げたら水が伝わり、これが雨漏りをさせる。こういったことを考えて設計をすべきである。

「おもてなしの心」を持つ

私が設計者に望むことは「おもてなしの心」で家を建てて欲しいということである。それは優しさを持って相手をたてることであるが、たてる相手は人間だけではない。木も土も材料すべてが相手である。では、相手をたてるとはどういうことか。例えば、私は木と向き合った時、私が使わなければまだまだ300年400年生きたかもしれないその木に対して「使わせていただきます」の気持ちを持ち、「200年300年は倒れないような家を必ず建てるぞ」と心に決めて仕事に取り掛かる。できる限り木が腐らないように頭を使い、手を使い、工夫をするのである。これは自分を捨ててでも木を大切にするのだという思いから出てくるものである。

それから、実際に技術を身につけてから設計をして欲しい。どんな小さな家でもいい。やらないよりはやったほうがいい。前述と重なるが、木のことは実際に木に触ったら分かるし、セメントの配合も実際に自分でやってみたら分かる。数字合わせと図面だけで家を建てて欲しくない。人の命は図面では守れない。紙だけでは安全は守れない。そのためには、願わくば大工なり左官の技術を見につけて欲しい。経験したもので図面を書いて欲しい。台風が来た、地震が来た、ほら逃げろ！なんていう情けない家を建てるのではなく、外よりも家が安心なのだと言えるいい家を建てて欲しい。設計者は、人が一番無防備になっているところを任されるのだから、それなりの修行が必要である。

常々私が思っていることは、設計者は研究者であって労働者であってはならないということである。労働者は時間の切り売りをして仕事をしているが、研究者であれば時間が無制限にあるはずだ。とことん疑問に思うことを解決していく時間があるはずだ。使う材料を知り尽くすまで時間を使ってほしい。研究に根負けすることなく続けて欲しい。できれば中国故事に出てくる「爛柯物語」のように時を忘れるほどに熱中し愉しみながら研究をして欲しい。

近頃の設計者は何か不都合が生じた場合に、これは設備がやった、これは配管がやったという。現場の一番の責任者である棟梁にはそんな言い訳は許されない。これは弟子がやりましたでは通らないのだ。このあたりの感覚がないから、今の設計者は問題なのである。実際につくることに携わった人間と絵を描いた人間では責任の持ち方が違うということか。だが、これは大間違いである。設計図を書く人間はオーケストラの指揮者と同じでなければならない。指揮者は全部を把握してはじめてタクトを触れるが、もしこれが何も把握せずにタクトを振ったらバラバラの演奏になってしまう。いまの設計者は何も分からずにタクトを振っているから、現場がバラバラなのではないか。

何度も言うようだが、本物の棟梁は左官も板金もすべてを束ね、素材もすべて知って指示を与えるのと同じように、よい設計図はすべてを分かっている設計者が書けるのだと思う。（談）

〔参考文献〕
監修：有馬頼底、木下孝一、千 宗屋「金閣寺　平成の茶室」、新建新聞社

（きのした　こういち　数寄屋研究所・心傳庵棟梁）

建築設計図が伝えるもの

庄野利博

数千年前から人は、建築という３次元で造られる物体を図学という表現手法によって２次元で表現し、建築を造ってきた。後に、透視図の手法によって２次元図面では表現しづらい３次元の形状を分かりやすく伝えることができるようになった。

これらの手法はすべて手書きで行なってきたが、近年、CAD環境が発展しコンピュータを使って建築情報を作るようになり、製図時間や設計検討に掛かる時間は短くなった。しかし、設計のプロセスそのものは変らないまま社会情勢の変化にともなって、検証の回数は増加し、短期間での膨大な資料作成という厳しい状況を余儀なくされる時代となった感がある。

これらに因果関係があるかは不明であるが、設計図の不整合や伝達情報の欠落などが発生していることは否定できない状況である。

本稿では、我々が考えている設計図の意味と現在の設計図作成手法について説明した上で、我々が抱えている課題に対して新たな設計プロセスや手法への期待について述べる。

設計図の意味

設計図とは、「設計者が設計し実現させたい建築物を、意図したとおりに完成させるため、建設に携わる人たちにその情報を伝える目的で、平面図、断面図などの２次元情報もしくは仕様書などの文字情報として表現したもの」といえる。設計図に表現すべきものは明解に意図された空間・機能の情報である。

建築の最終の成果物はもちろんその建築空間を作り出すことであるが、その空間は３次元である。設計者は常に３次元で空間を認識しながら設計を行っている。模型を作成し、頭の中で３次元の模型を作り、内外のあらゆる角度から眺め回している。基本構想の段階から、実施設計までの各段階において、それぞれのステップで複数の案を検討し、絞り込んでいき、最終の形を決める。

つまり検討段階では、図面を書くことによって空間を確認し、空間のイメージを広げることを行っている。また、設計図を媒体として、エンジニアリングスタッフを含めた設計チームとの情報共有を行い、建物としてのトータルな整合性をとる作業が行われている。このように設計図は、伝達手段でもあり設計プロセスにおいては重要な設計手段ともいえる。

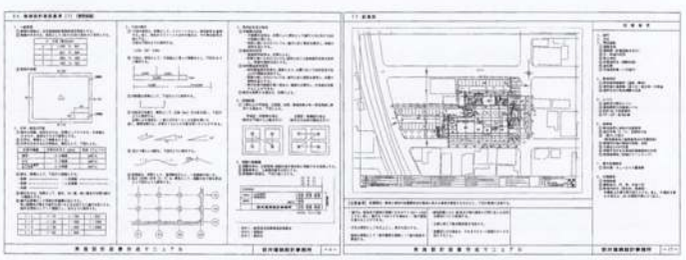
現在ほとんどの場合、設計者はこの決定した空間の３次元情報を、平面情報である平面図や、断面情報である断面図・立面図などの２次元情報に振り分けながら設計図を作成している。当然ながら、設計図を読みとる側にも、２次元情報から、３次元空間を組み立てる能力が要求される。顧客へのプレゼンテーションにおいても２次元情報だけでは、空間認識の共有化は難しく、解りやすいプレゼンテーションが必要である。図面だけでは完全に理解してもらうことは難しく、模型、CGなどで説明を図っているが、理解の不十分さにより後の設計変更につながる可能性をもっている。

ある意味、設計者は３次元を２次元でうまく伝えなければならないハンディを負っているといえるかもしれない。

設計図作成の手法

設計者には設計図を正確に効率よく作成する能力が要求される。次のような手法により、設計者の設計図作成の能力を上げることが出来ると考える。

まず、設計図作成の基準となるマニュアルを活用することである。われわれは、各図面に表現すべき内容・表現の基準などを表した設計図書作成マニュアルを策定している。このマニュアルは作図チェックリストを兼ねており、これを活用することにより、設計図の品質の確保を図っている。



設計図書作成マニュアル：設計製図基準　　設計図書作成マニュアル：配置図の作成基準

次に、若年の設計にとっては、良い図面をまねる事が大切である。設計図の作成はまねる事から始めると言っても過言ではない。その事によって、図面構成や、必要な表現内容、表現方法を体得できる。

３つ目は、上の２点と関連するが、図面作成に当たり、図面リストとレイアウト下図を作成することにより図面構成を確認することである。現代はCADの時代である。基本構成をコピーするだけで、同じような図面が何枚も出来てしまう。しかし図面を書くことが、最終目的ではない。同じような図面が多ければ、表現すべきものがぼやけかねないし、図面間の食い違いも発生しやすくなる。結果として図面を読み取る人たちに正確に意図が伝わらなくなる。レイアウト下図により簡潔に表現することができ、伝わりやすい正確な図面を効率的に作成出来ると考えている。

カルテとしての設計図（設計図保管の重要性）

伝達手段としての設計図について述べてきたが、少し視点を変えて、情報保管の手段としての図面の役割について考えてみる。

一般的には設計図は、建物が竣工した時点で、工事期間中に現場で起こった変更内容など、実際に完成した建物の情報を盛り込んだ

竣工図へと変更される。

竣工図は建物が生まれた時点での建物のカルテである。建物は時と共に増築・改修の要求が生まれそのための計画が立てられるが、その判断材料として施工図が利用される。さらにメンテナンスされた情報は竣工図としてのカルテに上書きされ、建築が存在する限りメンテナンスの拠り所、として活用される。

特に、昨今の耐震疑惑問題や石綿問題で、顧客の問い合わせ要望に対して、そのチェック手段として竣工図（及び竣工図書の一部としての構造計算書）が有効に活用された。竣工図が保管されていることの重要性が改めて確認されたといえる。

この保管方法について我々は、設計図を紙とマイクロフィルムで保管している。長期間の保管には最適なメディアではあるが、保管場所と検索に時間が掛かることに問題がある。検索を用意にするために、紙とマイクロフィルム以外に図面をスキャンによりデジタル化し、パソコンで検索・出力できるようにし、即時性を高めている。

現状の課題と今後の展開（3次元オブジェクトCAD）

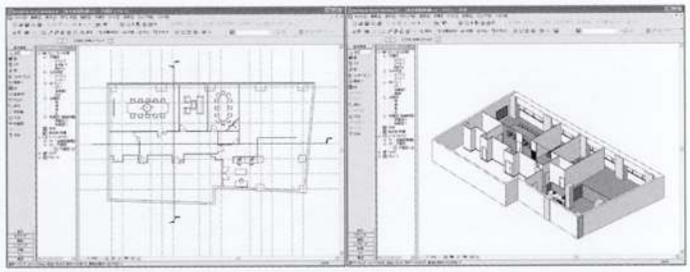
先にも述べたが、建築という3次元の情報を2次元図面で表現することが、情報の不整合や設計ミスにつながっている。1つの情報を多くの図面に振り分けて書くことで、3次元から2次元への変換時の食い違い、あるいは設計変更が発生した場合の図面間の食い違いが生ずる可能性が多くなることは否めない。また、現在のような設計期間が短縮される状況が、このことに拍車をかけているように感じている。

この問題を解決する新しい設計手段として、実用化されつつある3次元CADが期待される。

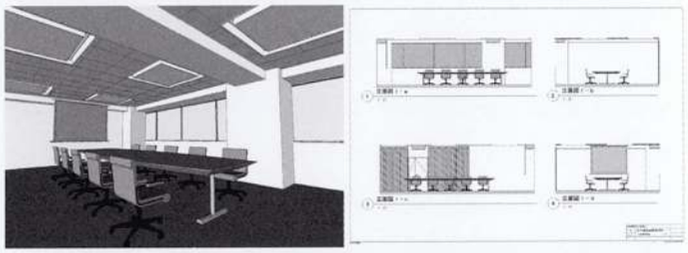
一般的にいわれている3次元CADには、建物を見せるためのCG作成用の3次元CADと、部材属性を持たせた建築オブジェクトを作成する3次元オブジェクトCADが挙げられる。前者は、単なる3次元図形の組合せによるモデルであるが、デザイン検討や美しい完成予想図作成を比較的短期間で行なうことができ、効果は大きい。ただし、建築の情報ではなく記号であり、それ以外に活用ができない。建築情報を伝えるためには別に2次元の図面や資料を作成しなければならない。

一方、後者の3次元オブジェクトCADは、壁や床、ドア、天井などそれぞれの部材に属性を持たせ、各部材としての振舞いを与えた仮想建物を構築するCADだといえる。

オブジェクトに振舞いを与えるとは、「梁は柱にしか取り付かないし、ドアは壁にしか付かない」などの常識で考えられる範囲での取り付きが自動的に制御できるということである。また、オブジェクトを移動すると、関連する部材も付随して移動し不整合がないように振舞うため、建築情報としての整合性は保たれる。



平面サンプル：モデル作成中の作業平面　3Dビューサンプル：フロアモデルをアクソメ表示



会議室内観：会議室のパース表示　会議室展開図：会議室の展開図として図面表示

3次元のオブジェクトモデルに部材属性を与えていることから、平面や立面、断面図といった従来の建物情報を伝達するための図面表現も切断面を表示するだけで済むため、新たに図面の作成を行なう必要がない。（現時点ではツールが未完成であり完全な情報を作れるわけではないが、今後の発展に期待する）

3次元である建物を人間が短期間での2次元に表現することを強いられてきたことが図面の不整合や情報の欠落に繋がる可能性は大きい。3次元オブジェクトCADでは、入力した情報を図面化することに関しては整合性が取れる。

しかしながら、これらの部材は3次元で作成する必要があり、全てのオブジェクトに部材属性が必要になる。現時点では部材の作成に時間がかかるが、今後は3次元部材のライブラリを蓄積・整備することによって、建物情報の構築に掛かる労力は軽減されるだろう。建築に関わる業界全体および国土交通省においてもライブラリ整備や製作推進に取り組む必要があると考える。

おわりに

設計図作成にかかわる、さまざまな課題と今後の展望について述べたつもりである。このような課題は建設業界全体の問題であり、業界全体で見直す時期に来ている。建築情報の伝達一つにしても全ての建設プロセスに関わる重要な要素であり、記号化された設計図から建築情報（Building Information）の作成、活用へ変えていく必要があると考えている。

3次元オブジェクトCADによる3次元建築情報の作成・活用により、2次元だけでなく3次元を含めた建築情報の表現と、さまざまな設計検証が可能になると期待しており、設計図＝2次元という概念を変えることになると考える。このことは設計プロセスを変えることにつながると共に、さまざまな問題を解決することができると考え、3次元オブジェクトCAD利用の検証を行なっている。

（しょうの　としひろ　㈱安井建築設計事務所設計部長）

手書き図面が持つ力

竹原義二

手書きにこだわる理由

当事務所では、ほとんどの図面を手で書いている。製図板とT定規、三角定規、三角スケールといったスタイルである。世の中の大半の事務所がCADに移行している中で、私が手書きにこだわっているのは、古いスタイルを愛するただのノスタルジーからきているのではない。実際に最近では、業者とのやりとりの問題などもあり、一部の図面ではCADも取り入れている。それでもほとんどの図面を手で書いているのには、それなりの理由がある。

まず、第一に手書きの図面では「逃げられるディテール」と「見せどころのディテール」の違いが表現できる。CADの図面は線が均質であり、全体の情報量も均質になりがちであるが、手書きの図面では自由に濃淡をつける事ができる。機能上・意匠上どうしても譲れない部分については、しっかりと寸法をおさえておくが、意匠や機能に影響しない部分については、少し曖昧に書いておいて、職人が仕事をしやすいように現場での打合せの上決定している。

また、手書きでは、当然ながらCADのようにデーターの再利用ができない。全ての図面を一から書いている。CADを使えば、ディテールを知らないスタッフでも、コピーアンドペーストで簡単に図面が書けてしまうが、手書きでは不可能である。その分時間はかかるが、その度にどうやって作るのかという事を考え、新しい発見がある。そして、ディテールは発展していく。

簡単に書いてしまわないということも大切であると私は考える。我々が書いた線の向こうには、それを実際につくる職人がいて、その作業は決して簡単なものではない。手書きでは一本の線を書くのも消すのも大変な気を使う。板張りの割付からフローリングまで、複製で簡単に書けてしまうCADと違って、全体を眺めながらじっくり書いていく。その過程で、本当に良いのか？という自問自答を繰り返していく。また、製図板の上に図面が広げられていることにより、通りすがりのスタッフが新しい意見を出していくこともある。部分の貼り合わせで図面ができてしまうCADと違って、常に全体を眺めながら詳細をつめていくところが手書きの良さであると思っている。

美しい図面とするために

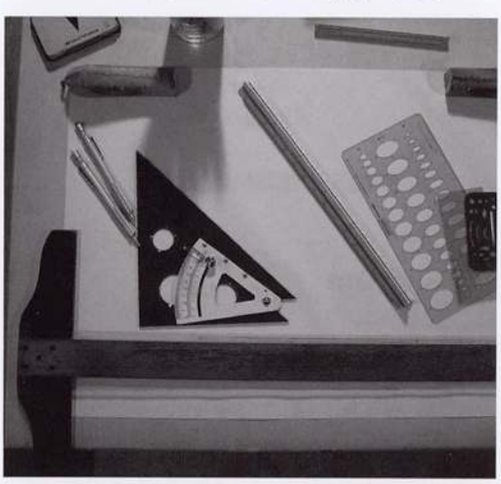
図面は美しくなければならないと私は考えている。一本一本の線はもちろんのこと、全体のレイアウトも大切である。建築のアウトラインだけでなく、通り芯や寸法線、引き出し線などをそれぞれの図面で揃えるようにしている。たとえば、断面図や立面図を現場で貼り並べると、GLのラインがきれいに連続して広がっていく。どんな図面を書くときも、いかに美しく仕上げていくかという事を意識している。手書きの図面というのは、レイアウトやスケールのやり直しができない。一発勝負である。どんな図面を書くときも、最初に伝わりやすいスケールとレイアウトを考えなくてはならず、新しい図面を書き出す時には、必ず緊張感が走る。そこでも、スタッフにはスケール感やバランス感が養われている。また、手書きの図面の原図というのは世界に一つしか存在しない。そのため、私の事務所では図面の大切さを最初に教え込んでいる。大切に扱われ、美しく書き上げた図面のもつ緊張感は、そのまま職人へと伝わっていく。そして、緊張感のある美しい建築ができると考えている。

伝わる図面とするために

美しくあると同時に、図面は現場に伝わりやすいものでなければならない。実施図面では見積もり段階で必要な寸法・納まり・仕様を開示しておくべきである。一般的な納まりをしている場合は問題ないが、特殊な納まりをしている場合などは、そのディテールに対する考え方を示す図面が必要になってくる。

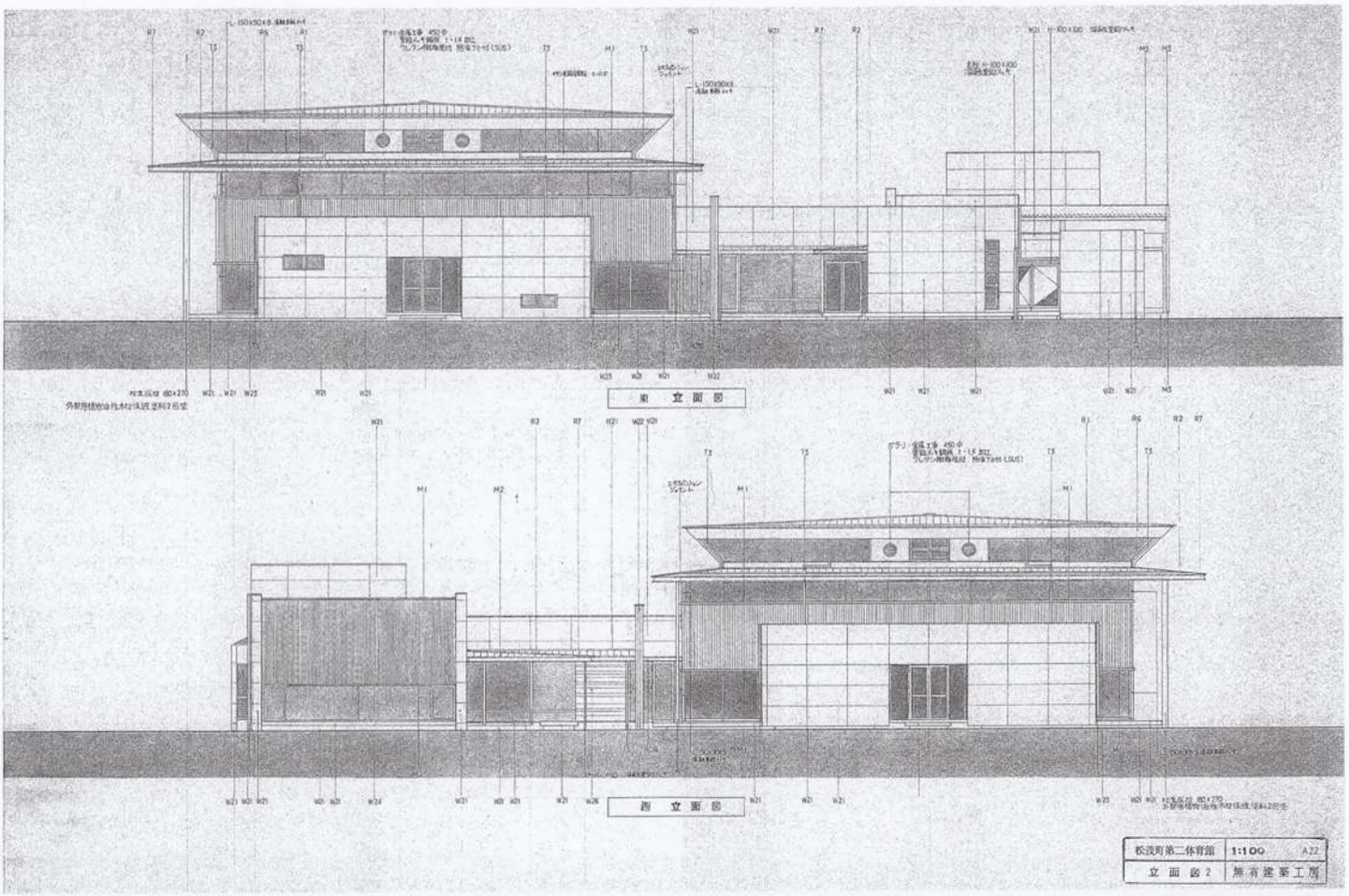
実は、一枚の1：50の平面図や立面図を美しく仕上げていく一方で、1：10や1：5のスケールで何枚ものスケッチを書きためている。見積もり時にはそのスケッチを工務店に見てもらうことで図面では足りない部分を補っている。また、実施図面や施工図面の中にはパースや簡略化したノンスケールのスケッチなど、いわゆる「マンガ」を書き込むことも多くある。これはイメージや考え方を相手に伝えるうえで非常に有効であり、ここにも手書きならではの良さがある。

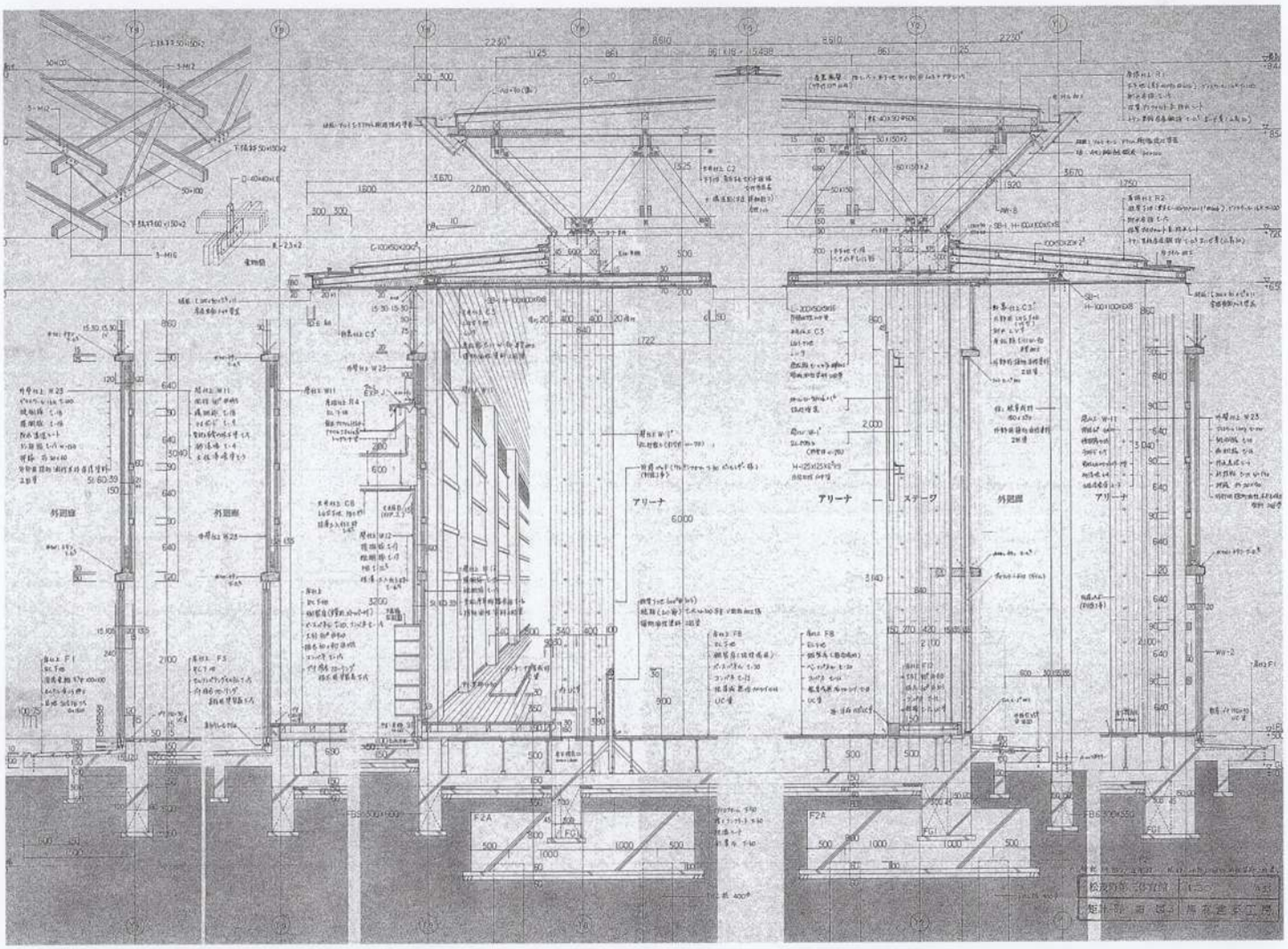
図面を書くことは絵本を書くようなものだと思っている。美しい図面を書き、そこに秘められているディテールを挿絵と言葉を使いながら、少しずつ解き明かしていくのである。こうして、工務店や職人にとってもどうなっているのか先が気になる、思わず仕事がしたくなる、つくってみたくなる図面となる。



撮影：無有建築工房

（たけはら　よしじ　大阪市立大学大学院 生活科学研究科 教授）


東 立 面 図
西 立 面 図
松茂町第二体育館
1:100
A22
立 面 図 2
無有建築工房


アリーナ
ステージ
外周廊

ものづくりの現場が求める設計図
—建設会社の設計施工における設計図の役割—

松﨑健二

「設計図」との出会い

私が「設計図」というものに対して、正確に向き合った最初の図面が「軽井沢の家」の平面詳細図と断面詳細図であった。大学の建築学科の設計課題としてトレースするようにとして渡された図面。これがまさに「設計図」との出会いであった。漠然と建築をこころざしている状況であったが、「これが建築の図面なのか」という思いでつくづく眺めた。ホルダーの芯を尖らせ、恐る恐る通り芯を書き込み、鉛筆で線を落としていく。そこには書道にも似た緊張感があった。今から思うと線を引くことの大事さを味わっていたのだと感じる。吉村順三の「軽井沢の家」の図面は、建築を志す学生へのトレースの題材として、実に的を得た図面であった。静かで、落ち着いたディテール、それはまさに「軽井沢の家」が春には若葉のきらめく光のなかで、冬には雪の中でひっそりとたたずみ静かに存在感を主張している建物の印象そのものであった。

「設計図」についてこの「建築と社会」の執筆の課題をお受けしたとき、最初にイメージしたのがこの吉村順三の「軽井沢の家」の詳細図であった。会社の図書室で何とかこの図面にもう一度出会えないものかと探しまわり、クラークからこれではないですかと吉村順三の図面集を差し出されたとき、30年来の知人と久々に出会ったような懐かしい気がして食い入るようにして図面を見つめた。改めて木造の建具詳細などを見ると隠し釘の打つ方向まで書いてある。施工方法や手順も知り尽くした上で書き込まれた内容であり、設計者が図面という手段を通してできる限り「造るということ」を伝えようとする心が感じられる図面であった。

現在のCAD作図環境が生み出すもの

30年前の鉛筆で書かれた設計図は、それぞれ書いた人の技量・個性が伝わる図面であった。太い線と細い線の微妙な表現が持つ図面の迫力、図面の中に書かれた文字、我々は先輩の図面を見ながら何とか早くこんな図面が書けるようにならぬものかと設計図を書く工夫をした。しかし、現在の設計図はCAD図面でなければ成り立たない。ディスク１枚で大量の情報がやり取りされ、次のステップに利用する。このCAD図面の情報伝達力は膨大なものがある。つい10数年くらい前までは手書きの図面が主流であったことを考えるととんでもないスピードで作図環境が変わってしまった。製図用紙を前にして居住まいを正し、通り芯を書きながら図面を書き上げていくというような精神性はもはやなく、今までの図面をコピー、ペーストしていきなり作図対象の部位に切り込んでいく、間違えば即座にdeleteする。そのスピード感は比べものにならない。しかしそこにものづくりに携わるものとしての心構えと、技術・知識が失われてはいないだろうか。CADによる図面はもはや当たり前のことだけに、このような作図環境での設計者の心構えが、より明確に必要となってくるのではないだろうか。建築界を揺るがす「姉歯問題」の事件の発端も、安易にコピーでき、作り変えられる作図環境が生み出した問題もあるのではないだろうか。建築界にとっても、改めてものづくりの大切さの中で「設計図」の果たす役割を考え、誠実にそれを果たしていくことが求められているのではないだろうか。ここに「建築と社会」でも「設計図」の課題を取り上げ、建築界に議論を起こしていくことの意義があるのではないかと思う。

ものづくりの現場から求められる設計図とは

施工に携わる現場から「設計図」に求めている役割はどのように変わってきているのであろうか。ここでは建設会社の設計部に所属している人間として、設計と施工にかかわる部分での設計図に求められている状況を述べる。JOBにより設計図の情報は大きく異なってくるが、大規模鉄骨造の建物ともなれば設計図は施工段階において、躯体図、鉄骨図面、階段図面、ALC等のパネル図面、カーテンウォール、建具、金物、各種設備製作図など、ほとんどのものは製作図といわれる施工図により確認されて施工へと進行していく。設計段階の製作への考え方、施工性の把握などが不十分であれば設計変更を余儀なくされることになる。

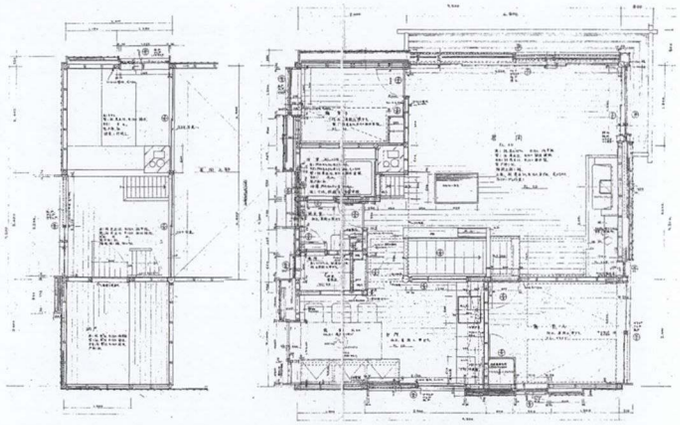
ここ数年設計確定工程ということが現場から強く叫ばれている。現場の厳しい工程、調達スケジュールにあわせいかに適切な時期に図面内容を確定し、その時点で要求される決定事項を定めていくかが現場にとって重要な要素となっている。現場では発注のタイミング、製作図作成のタイミング、承諾のタイミングを狂わせることはスケジュール管理に大きく影響し、ひいてはコスト管理にまで影響を与える。こうした求められる品質を確保し、施工性も十分に反映した確定度の高い図面をつくり出すことが今ものづくりの現場から強く求められている。特に近年、世の中のスピードアップにより建設に求められる期間も短縮を余儀なくされてきており、特にIT産業、半導体、デジタル機器生産関係施設などでは、いかに早く施設を立ち上げるかが、製品の命運を握ることさえ出てきている。そういう背景の中で、機能的に満足する、不具合のない建物をいかに早く提供できるかは施工にとって喫緊の課題となっている。

施工におけるこれからの設計図の役割

果たして今後設計図が現場での品質と生産性を上げる役割をより強く担う状況を生み出すことができるのであろうか。設計図が施工

軽井沢　森の家　1962年

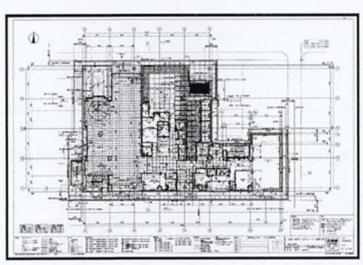




左２階、屋根裏・右１階平面図

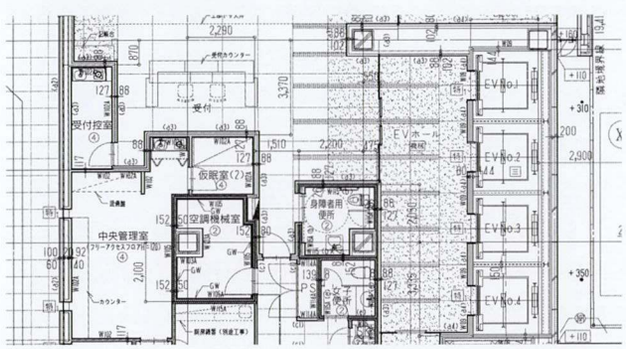
に関連する主要な情報を記載し、施工に当たってはそれを読み取っていくだけでQ（Qualty）C（Cost）D（delivery）S（Safety）E（Environment）すべてをスムースに進めていける情報伝達が可能なのであろうか。ますます製作ものが多くなる現場の作業の中で、設計段階で製作ものをいかに確定していくかが今後の設計図を左右することにもなろう。またその製作技術への深い知識が製作物をその機能を明確に発揮する形での図面が描けることに繋がる。またその施工方法に熟知していなければ、製品と製品の業際分野と言われるところに不具合の目は出てくるものであるから、トータルに優れた建物を作り上げることにならないであろう。こうしてみてくると設計者の責任が大きく叫ばれていることとともに、その検討内容はいよいよ増大化してくる傾向にある。

現在ではこうした設計上の観点から、可能性を秘めているのは各種の技術コンサルとのパートナーシップであろう。ファサードエンジニアリング、環境配慮技術、省エネ技術、建築、構造、設備、優れた専門的技術を持ったプロ集団が生まれている。こうした組織とパートナーシップを組んでトータルに進めていくことが今後の設計行為の中でも重要な位置づけとなってくるのではないか。ゼネコン設計部は、社外のそのような能力を持った組織との連携を深めようとするとともに、このようなプロ集団を自らの組織の中に位置づけ、スペシャリストの育成も視野において人材育成を行っている。設計には今後企画、実施、監理といったさまざまなスペシャリストが設計のすべての工程にかかわってきて、それらをトータルに統括するマスターアーキテクトのような存在が必要になってくるのではないだろうか。そのように考えると、設計図のあり方も、コンピュータ上でレイヤー管理やフォント管理など作図上のルールを定めながら、いくつもの組織がそのルールの下で図面を作成し、これらを基本図面の上に関連付け、部分を参照していけば非常に詳細な内容までたどり着けるといった、いわば図面のインターネット組織のようなものが出来上がってくるのではないか。そこにはGoogleといったような検索エンジンソフトがいわゆる仕上表、平面図、断面図、立面図といった一般図に組み込まれ、様々な情報が即座に関連付けて呼び出せる。こうして出来上がったネットワーク総体を設計図と呼ぶような形になるのではないかと思われる。そこでは軽井沢の家にあったような手書きの図面が建物イメージを想起させるようなことはなくなるであろう。しかし将来は図面参照として、デザイナーの初期スケッチが貼り付けられるかもしれない。末端の製作者までがそのようなスケッチを見て設計図にこめられたイメージを再現していく。そういう情報伝達手段として図面のネットワーク総体である設計図がその役割を果たしていくのではないかと思われる。もうここでは「設計図」という言葉に意味があるのではなく、様々につながった設計情報が意味を持った世界となってくるであろう。このような図面がものづくりの現場で求めるものに強く答える図面になるのではないかと思われる。



一般平面図

間仕切壁・室内仕上リストとリンクし、1/50詳細図情報を盛り込んだ最新の一般平面図
部分拡大図
一般平面図



部分拡大図

将来の設計図

近年の３次元CADが設計に対して果たす役割は非常に大きなものとなっている。製品生産のさまざまな段階をすべて３次元画像のCGの中でシミュレーションすることが可能になってきている。建築設計にあっても３次元への道を確実に歩み始めており、そこには今までにない建築空間を生み出す可能性が３次元CADにはあると思われる。しかし、生産段階との関連で考えると、３次元CADは詳細すべてが決定されていないと、意味を持たない。まさに機械メーカーの設計者が詳細まで考えつくして作成するCAD図面と同様な情報を持たなければ、設計情報としての価値を持たない。設計と施工、特に施工図を作成する技術者たちとの一体的な作業がなければこのような３次元CADでしか表せないような新たな建築空間作りは可能にならないのではないだろうか。こうした設計が求めていく先には新たな設計組織が必要とされる世界が待ち受けているように思えてならない。

（まつざき　けんじ　鹿島建設株式会社建築設計本部
生産設計統括グループ統括グループリーダー）

建築図面の役割について、日米の図面を比較しながら考える

光井　純

出来上がった建築物を見る時に、我々は身体の五感をすべて駆使しながら、まさに体験として空間全体を感じとっている。自分の大きさと建築の大きさの関係や空間のプロポーション、色、材料などが絡み合いながら生み出す建築の表情は非常に複合的で、こうしたことすべてを建築図面に表現することはできないと思われることがしばしばである。しかしながら、我々建築家は最終成果物である建築物を最良の形で実現するために、設計の意図ができるだけ正確に伝わる設計図の作成を目指して、努力し続けるしかないのである。たとえすべての建築情報が組み込まれた3次元データをつくり上げたとしても、情報を相手にわかりやすく伝えるという機能が伴っていない限り建築図面としては役に立たない。

建築図面はわかりやすく整理整頓され、参照しやすく構成されていないと、図面に基づいて建設を行なう側はどの情報をどの順番で読み取ってゆけばよいのかがさっぱりわからないのである。建築図面の重要なポイントは必要な情報をわかりやすく表現すること、これに尽きる。したがって建築設計の段階ごとに必要とされる情報、すなわち図面が表現するべき内容が明快になっている必要があるし、必要とされる情報をわかりやすく表現する効果的で効率的な方法が求められることになる。こうした図面表現の考え方は日米で共通のことであるが、建設生産システム全体の仕組みの違いによって、建築設計の段階ごとに求められる情報や、図面に表現される情報の内容はいろいろと違ってくる。具体的に日米の図面表現の違いを設計の段階ごとに比較してみたいと思う。

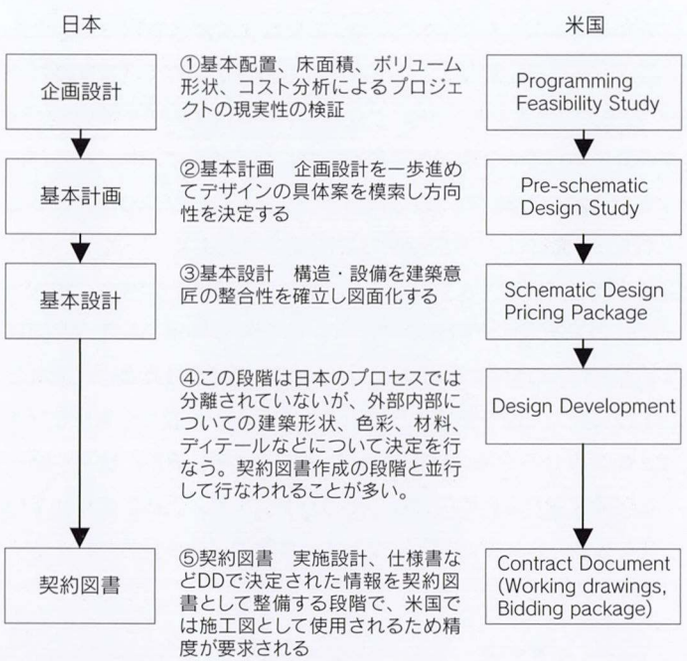


図1

米国にみる設計プロセスの特徴

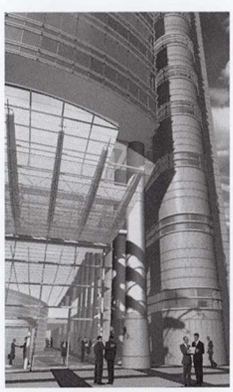
大きくは図1のように設計段階を分けてみることができるが、段階ごとの業務内容は微妙に異なっている。米国の設計プロセスの特徴は設計賠償責任の所在を明確にする必要性が高いことに起因している。設計契約では設計段階ごとの契約が多く、それぞれの設計の段階での成果物の内容が明確にされていることが普通である。したがって設計図面の方も設計段階ごとに要求される情報をきちんと表現していることが必要であり、仮に以降の業務が他者に移ったとしてもスムーズに仕事が継続できるように図面がわかりやすく構成されている必要がある。設計者側としては段階ごとの契約がベースとなれば、途中で切られてしまう可能性はより高くなるが業務内容と報酬の関係はわかりやすくなる。設計は図表のように企画設計、基本計画、基本設計、Design Development（DD）設計、実施設計と進んでゆくが、成果品の内容がより明快になっていることを除いては、DD設計以前のフェーズで行なっている業務内容に大差はないし、図面内容もさほど違いがあるわけではない。

日米の建築図面の大きな違いはDD設計と契約図書の内容にみられる。DD設計は実際的には実施設計業務の初期の段階で日本でも行なわれている業務であるが、米国では建築意匠設計を行なう建築家と意匠設計を建築技術の面から実施設計としてまとめ上げ、様々の仕様書を作成して契約図書として完成されたものにしてゆく業務とが分離され確立されたものである。特に大型のプロジェクトでは業務量が多いと同時にスケジュール的にもかなり厳しいものが多く、効率的に建築家の才能を引き出しながら、迅速に設計業務を進めるためにこの2つの業務が分化したのではないかと考えている。たとえば日本の設計事務所が中国で仕事をする場合を考えれば、かなり参考になるかもしれない。日本の設計事務所は設備・構造との整合性をとりながら、建築意匠設計をおこない、設計図面をまとめるわけであるが、図面内の様々の表記や仕様書などは中国語で記載しなくてはならないから、現実的に契約図書を作成するには中国の協力事務所が担当することになる。中国の場合には海外の事務所が国内で仕事をするときには政策的に、中国事務所との協働を義務付けているが、海外の事務所にとって見れば、賠償リスクの高い契約図書を作成するよりは、意匠デザインに特化したほうが得策であると判断した結果でもある。したがってDD図書はかなりの整合性と精度を持って表現されていないと、この図書をベースにして作成される実施図はかなり精度の悪いものになりかねないし、結果的には建設されたものが似て非なるものになりかねない。DD図書は材料の色や素材感、ディテールの表現を含めてかなり踏み込んだものに

なっており、建築意匠という側面からは実施設計図書以上に細かく記述されたものになっている。この段階で建築の外観や内部空間の仕上げ材料はほとんど決定されることになるので、クライアントにとっても出来上がりの姿をかなり正確に把握することができる。DD図書の立面図や立面詳細図、平面図そしてデザイン検討模型などはかなりリアルに彩色されており、出来上がってくる建築の表情という意味では多くの視覚情報を含んでいる。

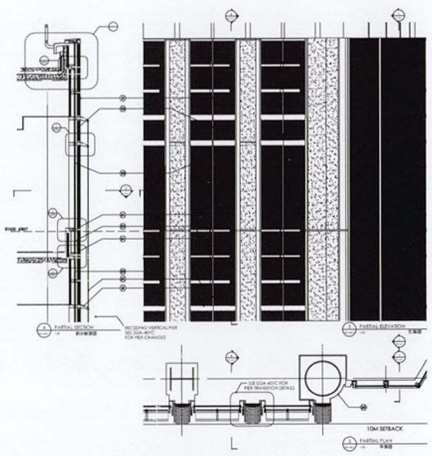
DD（Design Development）図書の意義

図面は合理化しようと努力すればするほど味わいを失いかねない。キープランやキーファサードとしての案内図的な全体像の図面とパーツごとの製作図的な図面の集積があれば最終的にどのようなものが出来上がるかは知らなくても建築は出来上がるかもしれないが、建築の全体像を理解し、やりがいを感じて取り組む仕事の品質のほうがはるかに優れているに違いない。建設者も設計者の思いを十分に理解し、使命感を共有しなくては皆が誇りに思える建設は実現しがたい。かつて設計図が表情を持っていた時代の施工者は「もの」が出来上がってゆく喜びを設計者と共有し、出来上がってゆく建築の中に自分の仕事の意味を見出してゆくことが容易であったかもしれない。われわれはフルサービスの仕事においてもDD図書を作成するようにしている。色彩と陰影のついた大型の立面図を用意して現場事務所に張っておくと職人方が全体像を見ながら、自分たちの仕事が全体のどこに位置し、どういった意味を持っているかを簡単に理解できるからである。記号化された実施図からは全体像をつかむことは難しい。DD図書を作成することは建築意匠を色や素材、詳細の形態まで含めて、設計段階でクライアントとが全体像を正確に理解できると同時に、施工段階においても非常に強力な設計意図伝達のツールとして役立つのである。DD図の段階でほとんどの建築意匠に関する決定は行なわれるといって過言ではない。契約図書作成の段階は、DD段階によって決定された詳細にわたる様々のデザインを契約書として間違いのないように正確に記述することである。



中之島三井ビルディング
北エントランス北西コーナー
外観パース（DD図面より抜粋）

契約図書は膨大な量になるので、現場段階でのデザイン変更は大変な労力とコストとを伴うことになり、十分に検討されたDD図を作成することは精度の高い契約図書を作成することに繋がり、結果的に現場段階で設計変更や図面の食い違いを最小限に食い止める、スムーズな建設スケジュールを実現することになってゆく。特に米国では契約図書に含まれる実施設計図がそのまま施工図の一部として使用されてゆくことになるので、リスクの少ない正確な契約図書を作成することは、起こりうる損害賠償や訴訟を考えると設計事務所としては死活に関わる最重要事項である。CADが米国で確立し早期から設計業務の中に組み込まれていったことの一つの理由は図面の精度を高め、人的な間違いを防いで、よりトラブルの少ない図面を作成しなくてはならない米国の設計事情を良く表している。そしてDD図という設計フェーズが米国で確立している理由は、DD段階を持つことで意匠・構造・設備の取り合いをしっかりと調整した上でデザインを生み出すことを可能とし、契約図書作成の段階では完成度の高い契約図書を作成することに集中できる仕組みをつくり上げることができるからに他ならない。DD段階はリスクを最小化しながら、同時にデザインの質を高めてゆくための設計プロセスの工夫であると見ることができる。



中之島三井ビルディング
外観部分詳細図（DD図面より抜粋）

日本ではDD図書で検討されるべき項目のかなりの部分が監理段階で検討されることになる。したがって実施設計も現場での色決めや材料決めを前提としているために、色彩や陰影のない、表情の少ないドライなものになっている。これでは設計者のデザイン意図が全体像としてなかなか伝わらないのではないかと心配である。現場で具体的な材料について最終決断を行なうにしても、DD図書によって色彩や素材についてかなりの絞込みをしておくことはクライアントにとっても設計者にとっても相互の認識違いを最小化してゆく上でメリットのあることである。少なくともデザインの方向性は設計段階でいったん決定した上で、現場段階で実際の形や空間をみながら、一段の洗練を加えることができるからである。

建築図面はデザイン情報を正確に伝えるための重要なツールである。建築図面によって設計の諸段階それぞれで必要とされる情報を的確に過不足なく表現するためには、この図面が何を表現しなくてはならないかを十分に理解しておくことが非常に重要である。

（みつい　じゅん　建築家）

図面という思考の道具

竹山　聖

プレゼンテーション

設計教育においては演習課題ごとに講評会が開かれる。これはどこの学校でも同じだろう。しかし京都大学では最近の習慣である。在学していたころから着任まで、つまり私の知る限りでは、ごく一握りの先生のみが講評会を行っていたにすぎない。何より締め切り自体が守られていなかったから、講評会も開きようがなかったのである。締め切りを守ること、そして講評会を開くこと。これが京都大学の設計教育にとっては大きな改革だった。1992年のことだ。

それまでの京都大学の設計演習は、締め切りが過ぎてからおっとりとはじめたり、締め切りを気にせずに納得いくまで図面を仕上げたりで、それはそれで牧歌的なよさがあった。マイペース。これがよくも悪くも京都大学の学生気質だった。自主性にまかせる、これもひとつの教育方針だろう。私の場合も、おかげでじっくり納得いくまで考える姿勢を会得したように思う。

しかしながら、やはり講評会を行うことは何よりの教育だと思う。批評にさらされ衆目にさらされる。他者の目にさらされてはじめて自らの案を客観的に眺めることができる。そこで締め切りはきっちり守っていただくことにした。そして必ず講評会を開いてもらうのである。学生たちにも緊張が漲るようになった。なにより、同級生がどんな図面を描いているのか、その最終的な成果をみんなで確認できるのだ。衆目にさらされることがわかれば、人間背伸びをする。よりよい姿を見せようとする。そんな背伸びは悪いことではない。

講評会にはもちろん、全員参加である。学生たちははじめて、プレゼンテーションの場に身をさらし、その優劣を思い知るのである。競争が人を鍛えるというのは本当だ。のほほんとした自己満足に支えられた牧歌的熟考の季節は過ぎ、他者の目にさらされる競争の時代がはじまった。そしておそらく、いまや京都大学の学生のプレゼンテーションは、トップレベルに達している。

さて本題である。そのプレゼンテーションにとって図面とは。実はここに近年とみに顕著となった問題が潜んでいるのである。トップレベルのプレゼンテーションにとって、図面は、とりわけいわゆる平面、立面、断面といったオーソドックスな図面は、いまや二義的な役割しか果たさない。今日的プレゼンテーションの主役たちは、美しく加工された模型写真であり、コンピュータグラフィック処理されたパースたちなのである。学生たちは模型の製作とその写真撮影、そしてCG制作に余念がなく、平面図、立面図、断面図などはほとんどダイヤグラムか、ひどい場合はプレゼンテーション全体の中の、単なる図式的な模様に過ぎない。平面図のモチーフも、均質化されたお決まりのパターンが反復されている。小物や家具、点景なども優秀な先輩たちからのお下がりで、それが代々洗練を重ねられながら受け継がれていく。図面の内容はほとんど借り物だらけであって、これがインターネットを引き写すレポートと同様、建築図面を犯しつつ蔓延している。ここに至って設計教育の現場では、ただ見栄えのよいプレゼンテーションの中から本当の冴え、独創を秘めた才能を見出す眼力こそが問われるということになった。問われているのは教師であって学生ではない。気の利いた盗作品を並べて教師が引っ掛かるのを学生たちはこっそり笑っている。この青空はどこの青空か、そこの芝生はどこの芝生か、この柱はどこの柱か、このキッチンユニットはいったい誰の考案か、階段が各階で位置が異なったり回転したりしているのはなぜなのか、そもそもこのプランの一単位はいったいどこから紛れ込んできたものなのか。一枚一枚図面を仕上げていくという世界が失われて、われわれは鏡の国の迷路に迷い込んでしまった。建築もはじめはコピーからでよい、とかつては教わった。しかしそのコピーとは模倣のことだった。模倣にも時間がかかったのである。いまやコピーとは、フラッシュメモリーを介して流通するコピー＋ペーストという操作だ。一本一本の線に思いをこめる「時間」、ときにインキングの手を休め線の意味を再考もする、そんな「時間」が失われたのは、もうとうの昔のことだ。

建築的思考に果たす図面の役割

コンピュータによる図面表現の在りようは、T定規と三角定規、あるいはドラフターによる図面制作とまるで位相を異にする。何よりそれは紙に直接触れることがない。手や体全体を動かして直に図面に立ち向かうことがない。つまり身体の運動が図面に投影されることはない。連動するのは指の微妙な運動である。しかも図面は電子ミストの彼方に想定されている。もちろん図面を紙媒体にプリントアウトされたもののみと限る必要はないから、メモリーやディスクや液晶画面の上のものも「図面」である。ただそうした「図面」にかつてのためらいや迷いなどが読み取れる線の表情などは、ない。正確で明快で、あっけらかんとしている。ここに建築的思考の変容を見て取ることができるだろう。ニュアンスの失われたのっぺらぼうの空間。その自由さととりとめのなさ。

そもそも建築的思考は言語的思考と異なり、おそらくは脳の別の領野を働かせておこなわれる認識と創造の活動だが、これが図面と関わることにさほど異議はあるまい。音楽の譜面よりもよっぽど密接に、それは記譜法と関わっている。音と音符の視覚的距離はほとんど無限だが（なにしろ音は視覚ではないから。ただ稀に音に形や色が見える人もいるらしく、これも想像できない話ではない）、建築図面は建築が形を持ち、視覚的世界に存在することとそうかけ離

れてはいない。図面と建築空間とは、感覚的に同じ相に属している。つまり視覚に属している。字が読めなくて言葉がしゃべれる人はいっぱいいるが、図面が読めなくて建築を構想できる人はほとんどいない。ちなみに、譜面が読めなくて音楽を構想できる人は、これまた山ほどいる。図面なしで建築を構想する人の比ではない。

図面必ずしも建築空間にあらず、は当然だが、建築空間の在り方と図面の在り方は、あるいはさらに正確に言うなら、建築的思考の在り方と図面を描くという行為の在り方には、かなり密接な相関関係が認められる。これは私の経験的な物言いではあるけれども、おそらくは多くの建築を構想する人間がともに認める感覚なのではないだろうか。つまり建築的思考とは、図面を描くという行為をとおして空間を思考することだ。

建築的思考の在り方は確かにそれだけではない。たとえば言葉による建築もありうるだろう。しかし建築的思考の独自性は図面を描くことにある。少なくとも人類が図面というものを発明し、建築空間を抽象しこれを表現する方法として磨き上げてきて以来、建築的思考の可能性は大きく広がってきたはずだ。図を描きつつ、つねに途上にあり道を拓く思考。これは文字の発明にも匹敵する思考の大変革であった。そしておそらくは文字に先行する。抽象化という人類の持つもっとも大きな世界把握の方法が、建築においては図面に結実したのである。したがって建築教育にとって図面を描くという技術の習得は、建築的思考のベースを築くことに等しい。文字を覚えたからといって哲学や文学が可能なわけではないが、文字なしで哲学や文学が可能だとは思われない。もちろん詩は朗読が基本であった。しかしながら、文字なしではマラルメの「骰子一擲」も不可能であったわけで、詩の開く世界はずいぶん貧弱であったことだろう。

この比喩を建築に当てはめてみるなら、図面は文字であるから、思考表現の手段である。しかし手段であると同時に方法であるから、これは建築的思考そのものを導く。図面が描けるからといって建築的思考が可能であるわけではない。しかし図面が描けなければ、建築的思考はかなり貧相なものになる。これは文字のない言葉の開きうる豊かな世界とも比べ物にならない。ここは比喩がきかない。先に音楽の例でも触れたように、言葉と文字との対応は、聴覚と視覚であって、各々が自律的だ。建築空間と図面は各々が視覚と視覚であるから、より同調性が高い。もちろん建築空間が視覚のみでない、ということをここであらためて言挙げする必要もないだろう。よき設計者は図面から空間の響きを聴き、香りを嗅ぐことができる。

空間加工のイメージ

建築的思考の中心には空間加工のイメージがある。図面はこれを描き出す。あるいはこれが投影される。

設計教育では建築空間を伝える手段としての図面から、建築的思考の方法としての図面、その表現の手段としての図面へと、学生を導いていく必要がある。学生が自ら抱く空間のイメージを、さらにはその加工のイメージを、確認し表現する行為としての図面を肉体化してやらなければならない。この点で、建築教育はスポーツのトレーニングに似ている。繰り返し同じプレイをおこなうこと。少しずつ自分なりの工夫をこめること。ついには独創にいたること。それには個性が反映されること。頭脳のみならず、空間を構想する身体全体がこめられること。

ここに、はじめに述べたコンピュータの導入による図面の変貌への危惧が関与しているのである。つまりコンピュータによる身体の喪失、ということだ。どういうことか。

空間加工のイメージとはひとえに身体的な運動のイメージだ。建築空間は古来人間の身体的行為と関わってその形態を整えてきた。あるいは建築空間によって人間の身体性が変容を遂げてきた。設計段階では建築空間自体が身体的運動の比喩で語られ認識される。立つ、横たわる、覆う、敷く、重ねる、透かす、束ねる、穿つ、撓める、折る、浮く、貫く、掘る、林立する、断ち切る、切り取る、捲る、磨く、etc.etc.....。この身体性がコンピュータによって文字通り断ち切られる。空間の持つスケールやプロポーション、気配といった身体的な了解が、コンピュータによってとりあえず括弧に入れられてしまうのである。図面から身体が疎外される。もちろんコンピュータによって開かれる新たな空間の可能性を決して否定するものではない。むしろ積極的に肯定しつつ、可能性をさらに試みていくべきだと考える。しかし設計教育の現場での、いまだスケール感を持たない学生に、コンピュータの縮尺伸縮自在さは諸刃の剣かとも感じている。巨大なスケールを苦もなく乗り越えるコンピュータの描写力と楽天的な想像力に快哉を叫びながら、そこで抜け落ちてゆく生身の人間のスケールと緻密な建築的思考が気掛かりなのである。

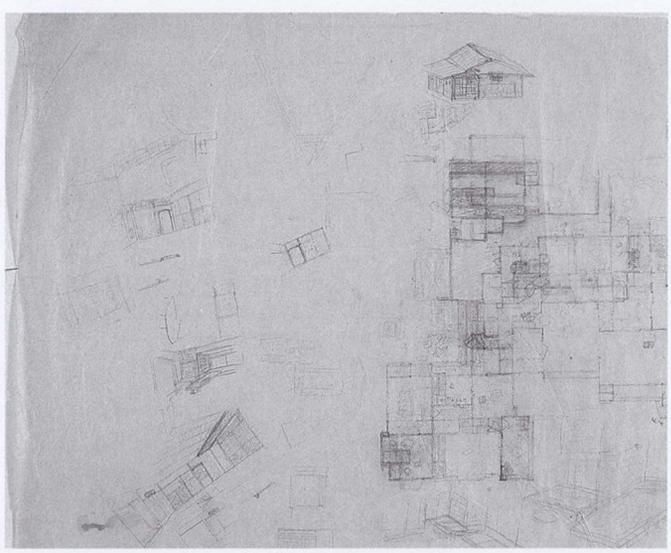
イメージが、身体を外れて肥大する。鮮やかに飛翔する。それはよいとしよう。しかしこれを建築的思考の可能性へとしっかりつなぎ止めるのがやはり図面であり、図を描くという人間の原初的な行為であろう。そしてそれは頭脳と手とによって身体がそこに住み込む空間の可能性であるにちがいない。なぜならそこに描かれるのが、新しい建築的思考の確かな可能性でありたいし、具体的な建築空間への確かな道程でありたいからである。そのための思考の道具として、人類はいまだ図面を超える情報の<圧縮・保存・輸送>の装置を持っていない。

（たけやま　せい　建築家・京都大学助教授）

村野藤吾の設計図面を巡る二三の事柄

竹内次男

昨年９月に、近代建築、と言うよりも1930年代の建築がはじめて国指定の重要文化財に登録される事が報じられた。勿論山口県宇部市に現存する渡辺翁記念館の名で知られる宇部市民会館である。大規模な修復が過去になされ、原状に聊かの変更が加えられたとは言え我々にとっては実に愉快なことであった。村野藤吾の出世作とでも言うべき記念的建造物である。この拙稿を依頼され、扨、何を書けばよいのか思い倦ねている折り、極めて個人的な意味で時宜に適った報道がまたも舞い込んできた。今度は世界平和記念聖堂が、丹下健三の原爆資料館の名で広く親しまれている広島平和記念資料館と共に戦後の建造物としてははじめての国の重要文化財に指定される事になった。「廃墟から立ち上がり、平和への思いを伝える両者は国の指定にふさわしい象徴的存在（４月26日、朝日新聞夕刊）」であり、誠に同慶の至りである。指定の理由は、聖堂の場合「戦後の復興建築の先駆的存在。日本的な雰囲気をにじませた宗教建築（４月22日、産経新聞）」、「約六十メートルの奥行きと脇にそびえる鐘塔とのバランスの美しさが特徴（同、日本経済新聞）」、「世界平和の実現を祈念する先駆的建築。慎ましさと威厳を備えている（同、朝日新聞）」事が評価されたのだと伝えられた。国民の宝である事を衆人が一致して認めたのであれば、自然界の摂理でもあるそれらが朽ち果て落ちてゆくことから可能な限り護らなければならないのである。



村野邸、平面図・スケッチ
1/100, PJ/CR, CCR(R), s.a. 435×562 m/m.(Ⅱ-019A-01)

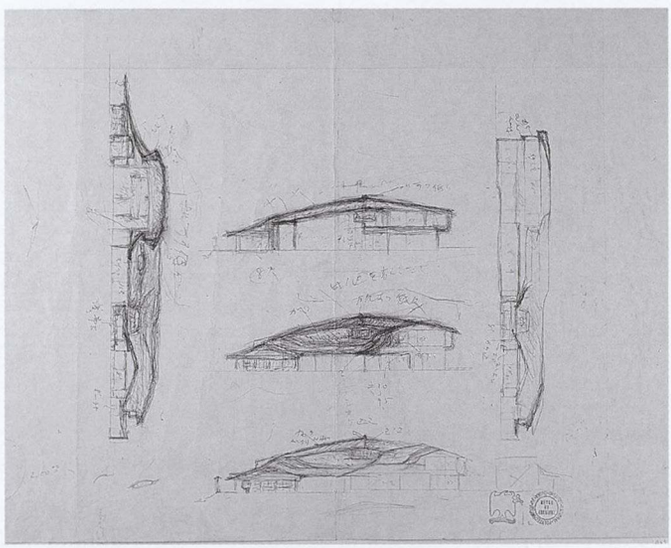
とは言え、形あるものは姿を変えつつ、遂には消えてゆく！石でも木でも布でも紙でも何でもそうなるのである。鋼でさえそうである。固よりそれら素材を人智を集めて創造された建造物ではあっても、その軌から逃れる術は無いのである。建築物は現実の風景から消え、そして人々の記憶からも褪せてゆく。物理的存在としての建築物がそうであるのなら、矢張り物理的存在としての図面も消滅するとするのが話の筋いうものであろうが、そうであってはならぬのである。我々にとっては現実に存在した建築物を思い起こす縁でなければならないのである。加えて研究の第一次資料としての紙の上に残された図面と言う形式でなければならないのである。近年「アーカイブ」なる語が活用されている。辞書を繙くまでもなく、「家、団体、機関、団体や国家などに関する古文書類。広く史料となる公文書の意であり、public records or documents」をアーカイブと言うのである。縁あって、村野家と村野、森建築事務所から調査並びに保存を託された村野図面を我々がアーカイブとして遇しているのは、それらが日本近代建築の史料、資料として、村野事務所の記録としての意義をそこに認めているからに他ならない。

振り出しに戻ろう。渡辺翁記念館の場合、村野藤吾とそのアソシエイツが作成した図面で我々の手許に残っているものは実に僅かである。それも計画段階でのプレゼンテイション用の案でしかない。設計から建設にかけての時期を斟酌・忖度すれば仕方のない事かもしれないが、今から見れば、大略同時期と捉えてもよい頃に実現された記念碑的商業建築「そごう百貨店」に関しては約千枚或は葉も残されているのに、仕方のない事だと打遣っておく訳にもゆくまい。この数が建築の規模に較べて多いのか少ないのかは措くとしても、資料の残り方若しくは遺し方を巡っては渡辺翁記念館とそごう百貨店の出来方、実現の仕方、仕事として成立した経緯の相違など、実はあれこれ考えられ、これまた図面を離れての研究の対象となるものではあろう。

少なくとも我々は手許にある図面に即して村野藤吾の建築を思考するものであるから、資料に見る作品を思いつくまま挙げてみる事にしよう。戦前では既述した二件をはじめ森五ビルで通っている近三ビル、大阪パンション、紙卸商中島商店、独逸文化研究所、大庄村役場、大型客船用艤装、宇部の工場群。宗教建築として名高い世界平和記念聖堂、西宮トラピスチヌ修道院、宝塚教会堂。学校建築では関西大学の一連の学舎をはじめ早稲田大学文学部、甲南女子大学、日本ルーテル神学校。迎賓館も挙げなくてはならない。新大阪ビル、日本生命日比谷ビルに旧日本興行銀行本社、旧千代田生命本社ビル。小山敬三美術館、谷村美術館。庁舎建築としては横浜市庁舎、尼崎市庁舎、宝塚市庁舎。北九州の八幡、小倉そして米子の市民会館。中山邸二件に中林邸、中橋邸、中川邸、佐伯邸はじめ数多の住宅作品に加えて数寄屋建築の名品群。近鉄関係の諸施設。この辺りで止めよう。我々の手許にある約57,000葉の村野図面は大凡設計過程で作成されたものである。

従って竣工時のそれとは聊か異なる。単に計画案というのでもない。発想から順次展開される建築の構想を窺い知ることを可能にする痕跡とでも言いうる。少なくとも村野藤吾が後進に親切にも自ら投げかけた建築観を検証せよと迫ってくるものも多いのである。これらの図面類を巡って二三のことを書き留めておくのもあながち無駄にはなるまい。

例えば村野と親交があった工藤友恵、この関係から新大阪ビルや八重洲大阪ビルに紀尾井町大阪ビルを解くのも興味深かろう。長く親交を保ったと仄聞する出光佐三である。懼らく細部にわたって容喙することは無いまでも、出光佐三の発意であろうと思われる出光関係の建物は多い。大阪谷町給油所1960（16fols）や宇都宮給油所1960（34fols）、奈良給油所1962-64（62fols）、川崎給油所1961（43fols）、立川給油所1961-62（52fols）、千葉給油所1961-62（102fols）、福岡万町給油所1961-62（148fols）等の一連の給油所。個人的な話であるが、作品集（1931-62）に所収の大阪谷町四丁目の給油所は筆者が幼い頃に学校の行き帰りに毎日その前を通っていたので一際印象に強いが今は無い。高松営業所1960（34fols）、北海道支社1961（23fols）、東北支社1962（40fols）、そして限りなく繊細な表情の京都支社 1965（118fols）といった各地の支社。戦後村野の数寄屋の新境地を拓いたとされる指月亭の名で知られる北川邸 1957-58（240fols）、出光朴の木別荘1964, 77（43fols）、出光興産麻布邸として建設された松寿荘 1978-79（343fols）がすぐに思い起こされる。取り壊しが取り沙汰される前に一度少人数で見学させてもらった松寿荘も、終に見学すらも実現しえなかった指月亭も、建築物としては既に無い。福岡市萬町の給油所の上部に構えられていた美術館も姿を消したと聞いている。惜しい限りではあるが仕方ない。だからこそ、残された図面や写真家が収めた写真類が貴重で、重要な意味を持ってくるのは言うを俟たないのである。1995年の阪神淡路大震災の記憶はもまだまだ鮮烈である。ここで是非とも触れておかなければならないのは、村野作品の中で西宮市商工会議所が姿を消した。現在は「原田の森ギャラリー」として運営されている旧兵庫県立近代美術館もあの震災に甚大な被害を受けたことはよく知られる処である。また、多くがその空間を体験したいと秘かな願望を抱いていた宝塚清荒神の村野邸も同様に地震により倒壊した。御子息村野漾氏によりその一部が復元されたものの、全貌は想像においてでしか再現し得ないのである。村野邸に就てはスケッチが数枚残されている程度ではあるが、夫々から建築家村野藤吾の意図が強く放射されている。これは有難いことではあるが、矢張り惜しいと言わざるを得ない。



松寿荘、断面検討図
1/200. BP/CR, MQ(R) s.a. 425×595 m/m.(AN.4898-11)

蹴上の都ホテルでは経営陣が変わり、プリンス・ホテル系列でもホテルのリニューアルが進められ、箱根、高輪、新高輪、そして宝ケ池の夫々に対して、村野藤吾の色相が変えられようとしている昨今である。手許には高輪プリンス・ホテル関係の図面は皆無であるが、箱根や新高輪、エピトームとなった宝ケ池の図面は多い。夫々に対して込めた村野の建築的意欲が、それら図面やその他の関係資料で偲ぶ事が辛うじて許される処となってしまっているのである。

ところで、最近未整理の図面ホルダー「應急建設」と題したものを繙く機会があった。表題から施工業者の本社ビル程度のものと早合点していたから、手を付けずに置いたままに10年も経ってしまったのである。成る程それは作図年月日を欠いた「應急建設木造物参考図全葉のうち第１号技術院ページ１」等、そのような表題を記した図面類76葉から成るホルダーであって、大半が戦時末期頃に「應急に」建築する必要のあった建物に就いての図面ならびに関連資料である事が判った。

このホルダーには、工場関係、兵舎、病院、海軍施設等の図面が認められるが、何故か改装案と推し測る事のできる「そごう地下１階キャバレー平面図」４葉、そして同定不能の「小林邸」１葉が言わば紛れ込んでいるのである。紛れ込んだ理由を詮索する積もりは目下の処無いが、戦時期慥かに仕事の機会に巡り合う事が極めて少なかったのは承知の上で、その中で手足を捥がれるが如く所員が相次いで事務所を離れ、それでも事務所の維持を図らなければならなかった建築家村野藤吾の職業的意地が如何ばかりであったかに思いを馳せると涙も出てこようというものである。

（たけうち　つぐお　京都工藝繊維大学 美術工藝資料館 教授、工学博士）

エネルギーの使用の合理化に関する法律（省エネ法）の改正

笠原　茂
大阪市住宅局建築指導部指導課担当係長

1992年６月にブラジルで開催された「環境と開発に関する国際会議（地球サミット）」で気候変動に関する枠組みづくりの条約を採択した。この条約の実効性を担保するために1997年12月、京都において「気候変動枠組条約第３回締約国会議」が開催され、京都議定書が採択された。この中で、先進国全体の温室効果ガス排出量削減の数量目標等が定められ、わが国は、2008年から2012年までの５年間の温室ガスの平均排出量を1990年比でマイナス６％とすることが義務付けられている。しかしながら、2002年度における我が国の温室効果ガスの総排出量は1990年比で7.6％の増加となっており、京都議定書における目標を達成するためには、従来実施している対策・施策に加え、さらなる取り組みが必要とされている。

省エネ法とは

「エネルギーの使用の合理化に関する法律」（「省エネ法」）は、1979年に制定され、「内外におけるエネルギーをめぐる経済的社会的環境に応じた燃料資源の有効な確保に資するため、工場、輸送、建築物及び機械器具についてのエネルギーの使用の合理化に関する所要の措置その他エネルギーの使用の合理化を総合的に進めるために必要な措置等を講ずることとし、もって国民経済の健全な発展に寄与すること」を目的に、「建築物の建築主」に対し、使用するエネルギーの合理化に努めること等の義務付けがなされたものである。

こうした省エネルギーの現状等を踏まえ、2002年６月に法改正（2003年４月施行）がなされ、一定規模以上の非住宅建築物を新築、増改築する際に省エネルギー措置の届出が義務付けられるとともに、新たに省エネルギー性能を定量的に算定することを必要としない仕様基準が設けられた。さらに、指導及び助言等に関する権限が国土交通大臣から所管行政庁に移譲されたところである。

今回の改正内容

2005年８月に行われた法改正（2006年４月１日施行）では、一定規模以上の非住宅建築物について大規模修繕等を行う場合にも届出が義務付けられるとともに、一定規模以上の住宅についても、非住宅建築物と同様に届出等が義務付けられることとなった。加えて、届出された住宅・建築物について省エネ措置の維持保全の状況を定期的に所管行政庁に報告することが義務付けられることとなった。

新たに届出や報告対象となる建築物、大規模修繕等の範囲など、建築物に係る部分の主な改正概要は、次のとおりである。

●特定建築物の規模は、床面積の合計が2,000㎡以上

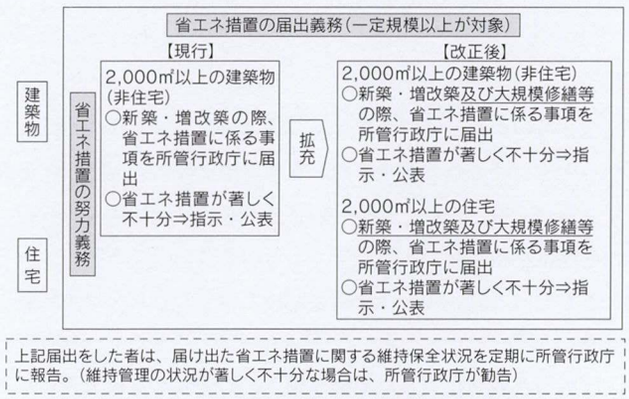
●省エネ措置の届出を要する特定建築物の改築の規模、建築物の増築の規模は、改築・増築に係る部分の床面積の合計が2,000㎡以上

●省エネ措置の届出を要する特定建築物の屋根、壁又は床の修繕・模様替の規模は、修繕又は模様替に係る部分の面積の合計が2,000㎡以上。ただし、2,000㎡未満のものであっても、以下のいずれかに該当すれば、届出対象とする。

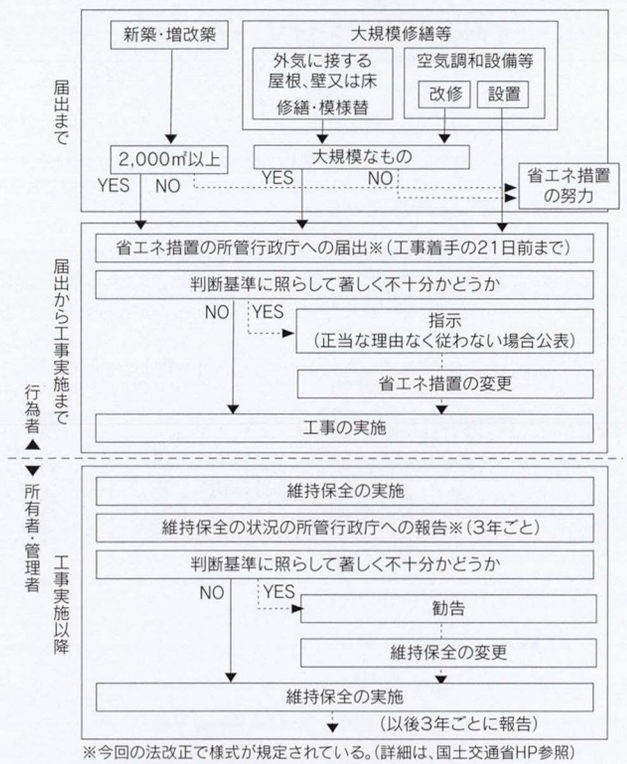
・屋根の修繕又は模様替の面積が屋根全体の面積の１/２以上
・床の修繕又は模様替の面積が床全体の面積の１/２以上
・壁の修繕又は模様替の面積が壁全体の面積の１/２以上

●省エネ措置の届出を要する空気調和設備等の改修は以下のとおり。

・空気調和設備／熱源機器、ポンプ、空気調和機の取替えで一定のもの



省エネ法改正の概要



※今回の法改正で様式が規定されている。（詳細は、国土交通省HP参照）

省エネ措置の届出・維持管理保全に係るフロー

・機械換気設備／送風機の取替えで一定のもの
・照明設備／設備の取替えで一定のもの
・給湯設備／熱源機器、配管の取替えで一定のもの
・昇降機／昇降機の取替えで一定のもの

●省エネ措置の届出、維持保全状況の報告を要しない建築物の範囲

・文化財保護法により国宝・重要文化財、重要有形民族文化財、特別史跡名勝天然記念物・史跡名勝天然記念物として指定されたもの、等
・建築基準法第85条に規定する応急・仮設建築物

●報告及び立入検査に関する規定の整備

特定建築物の設計及び施工又は維持保全に係る事項に関する報告等について定める。

今回の法改正は、新築時点における省エネルギー対策を引き続き進めるとともに、既存建築物の省エネルギー性能の向上を図る省エネルギー改修を促進するものであるが、環境問題が国際的課題である現状を踏まえると、建築主による積極的な取り組みが、より一層重要であると思われる。

（かさはら　しげる）

露出型固定柱脚工法

越智敏夫
㈱大林組本店建築設計第６部

鉄骨造建築物の柱脚工法は、「露出柱脚」「埋込み柱脚」「根巻き柱脚」の３つに大別される。後者ふたつの工法は、柱脚の固定度が非常に高く、「完全固定柱脚」として構造計算上取り扱われる。阪神・淡路大震災を契機に、いわゆる「ピン柱脚」と呼ばれるものは存在しなくなり、「露出柱脚」は柱脚の固定度を回転バネとして評価し、「半固定柱脚」として構造計算に組み込まれるようになった。柱脚の固定度が高いほど、「完全固定柱脚」に近いほど、経済的な設計が可能となることは言うまでもない。

本工法は、「露出柱脚」の中でも固定度が高く、経済性と施工性、性能と品質を高めた「露出型固定柱脚」工法である。

工法の概要と特徴

本工法の外観イメージを図１に示す。

①アンカーボルトに高強度ねじ節鉄筋を使用し、柱型部の主筋と兼用。

②既製品「露出柱脚」工法に用いられるような鋳鋼といった特殊材料を要さず、鋼板や鉄筋といった一般的な材料で構成。

③簡易な固定金物でアンカーボルトの建て方を行い、従来のような大がかりなアンカーフレームは不要。

④柱型部主筋やアンカーフレームがなく、簡易な納まりで配筋施工が容易であり、省力化とローコスト化が図れる。

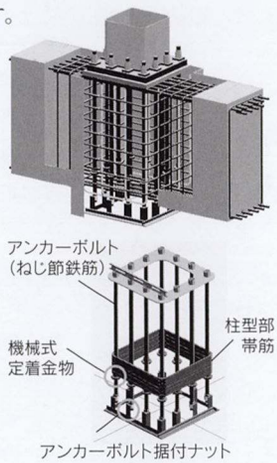


図１　外観イメージ

⑤アンカーボルトに高強度ねじ節鉄筋を、アンカーボルト定着部に機械式定着金物を使用し、高性能と信頼性を確保。

「スマートベース工法」と「マイティスマートベース工法」の主な相違点は、アンカーボルトに使用する高強度ねじ節鉄筋が異なる点にあり、前者はSD490、後者は前者より高強度のUSD685を使用する。ちなみに「マイティ」とは、「力のある」「強い」という意味を持つ。

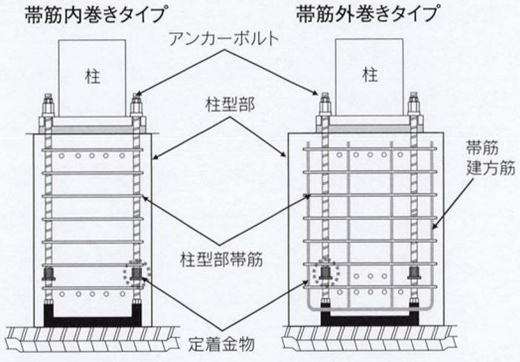


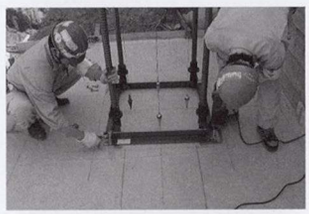
図２
柱型部の
配筋方法

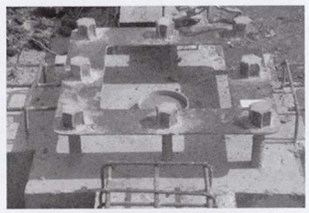
柱型部の配筋方法には、バリエーションがある。ひとつは、柱型部の帯筋（フープ筋）を主筋であるアンカーボルトに直接巻きつけ固定する「帯筋内巻きタイプ」。もうひとつは、帯筋をアンカーボルトに接することなく、柱型部の外部側に広く配置する「帯筋外巻きタイプ」（図２）。おのおのの配筋方法を適用するには制約条件があり、「帯筋内巻きタイプ」は「スマートベース工法」の内柱（基礎梁が両側に取り付く）のみに適用できる。

工法の施工手順

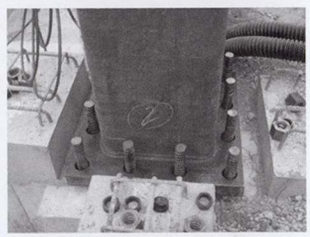
概略施工手順は、「柱芯墨出し＆アンカーボルト固定用金物の設置」→「アンカーボルト設置」→「柱型及び基礎梁の配筋」→「型枠設置」→「コンクリート打設」→「レベル調整モルタル設置」→「鉄骨建て方及びナット本締め」→「ベースプレート下ベースモルタルの注入」である。

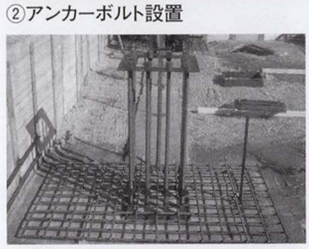
以下の写真で、これら施工工程のうち主な工程の施工状況を示す。


①アンカーボルト固定金物の設置

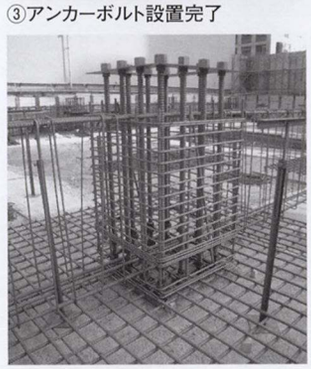

⑤レベル調整モルタル設置


②アンカーボルト設置

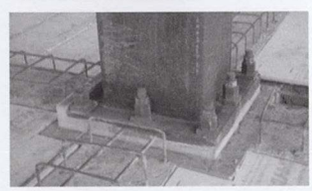

⑥鉄骨建て方状況


③アンカーボルト設置完了


⑦ベースプレート下ベースモルタル注入状況


④柱型等配筋状況


⑧注入完了


⑨施工完了

適用用途と評価

本工法は事務所ビル、商業施設、生産施設や倉庫など中低層鉄骨造建築物に幅広く適用できる工法で、既に27物件（約1600柱）の実績を持つ。

また、本工法は、構造性能確認実験を実施し、日本建築総合試験所の建築技術性能証明を取得している。なお「スマートベース工法」は東京鐵鋼㈱との共同開発である。

「スマートベース工法」　　：GBRC　性能証明　第04-07号改
「マイティスマートベース工法」：GBRC　性能証明　第05-09号

（おち　としお）

洋上で浄瑠璃を語って…



●大正時代の建築と建築人

インド洋をひた走る

石田潤一郎

大正2年2月23日（日曜日）

正午マルセール港解纜。二ヶ月間厄介になりたる欧州を今や御暇申すに当たり、良く吾等を歓待されたる事を感謝して仏蘭西に別れて外海に出たり。

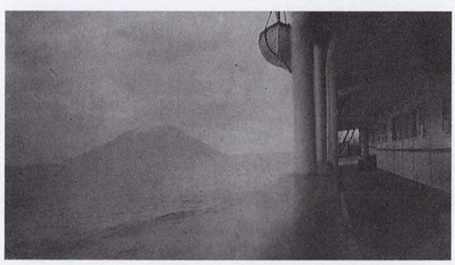
波静に砥の如し。流石の柴田君も酔はぬらしい。一等船客は五十何人。内日本人十二人。

細野陸軍大佐／丹野海軍少佐／長岡春一君法学博士／今西正金店長／河合鎮〇技師／柴田駒三郎君(内務省参事官)／大木／高羽／植村

大正2年2月25日（火曜日）

午頃シシリー島と伊太利本土との間を通過す。メッシナ港は咫尺（しせき）の間にあり、昨年の地震の為に崩壊せる家屋の跡歴々、指點し得べし。エトナの火山知らぬ顔して烟を輪に吹く。

午後七時ストロンボリの火山を左舷見る。



2月25日に通過したストロンボリ島

午後一時頃陸地より信号あり暫く停船。オーストリア及希蝋沿岸の燈台を消火す注意すべしとあり其理由を詳にせず。オーストリアとロシヤと愈開戦せるものなるべしと云ふ。

大正2年3月1日（土曜日）

スエズ運河は長さ九十哩、巾弐百尺。八千噸以上の船は行違ふ事能はず。一時間五哩の速力を以て船をやる。



スエズ運河

大正2年3月8日（土曜日）

終日波静。晴天片雲を見ず。今夜はコンサートの催しありとて西洋人側より勧誘し来る。出演者は皆乗客の有志者なり。西洋人の出演者十五人。日本人三人。午後七時開演。段々番数も演じ尽して十七番には拙者の番が来た。生れて初めての藝当である。六七十人のお客を眼下に見卸して壇上に立て時鳥に浄瑠璃を高々と演じ終った。喝采涌が如し。印度洋の船の上では兎に角名人の内に数えられたのは何とえらい者ではあるまいか。

扨種々様々の素人藝も終わりて船長は最後に閉会を宣告した。或る英国人は立て英国国歌の譜を奏し初めた。一同起立英国国歌を合唱した。次に日本国歌と来る筈と思ひの外船長は何とも云わぬ。外人は動き初めた。吾々日本人は憤慨した。植村君がポケットからハモニカを取出して君が代を吹出した。日本人起立して君が代を合唱して漸くお茶を濁したけれども、日本人の心中甚だ平らかでない。

大正2年3月9日（日曜日）

午前ソシアルホールに集まった日本人は細野、丹野、柴田、僕の四人。昨夜の演藝会の国歌問題が中々八釜敷。一体平野丸は日本の船籍にある船なり。船長は英国人なれども郵船会社の船長なれば取も直さず日本人も同様なり。此船にて開演せるコンサートに英国国歌を歌ひて日本国歌を奏せざるは何たる失態ぞや。宜しく其責任を問うべし。直に問責書を送りて其答弁を求むべしと云ふ騒ぎが持ち上がった。僕は成程御尤も千万にして一言の異議を挟む余地はないけれども只其方法に注文あり。余の考えにては先昨夜の失態の件を告したる書面を以て船長に注告し反省を催し、前には日本人一同の名を以て郵船会社に向て、凡ての船舶をしてかかる場合必ず君が代を奏せしむる様訓令せしめ、且つ必ず君が代の譜を船中に備付けしむべしとの提義を出した。彼是の議論はあったが、終に僕の説に賛成者が多く夫れに決定した。

大正2年3月30日（日曜日）

午前一時佐多岬の燈台を見る。午后三時左舷に四国を雲〇〇漂の間に見る。明日は午前九時には神戸に着く可し。色々荷造を初める。

〈完〉

1913年（大正2）2月23日、設楽貞雄を乗せた平野丸はマルセイユ港を離れる。以後、インド洋回りで日本に向かい、3月31日神戸に帰着する。一カ月余りを要する船旅であった。

「一等船客は五十何人。内日本人十二人」というのは日本人の海外進出ぶりを物語っていて興味深い。

挙げてある人名のうち、飛びぬけて有名なのは長岡春一だ。法学博士と書いてあるが、学者ではなく外交官である。フランス駐在の折、パリ大学で博士号を取り、日本でも学位を授与された。まだ36歳だったので、設楽は君づけで呼んでいるが、やがてチェコ、フランス、ドイツの各大使、本省条約局長を歴任し、最後は国際連盟の国際司法裁判所判事を務めるにいたる。

柴田駒三郎は明治29年入省の内務官僚で、のち宗教局長になる。あとの人々はよく分からない。軍人は欧州各地の駐在武官に該当者がいないので、短期的な出張だったのだろうか。2月25日の項にあるように、バルカン戦争から第一次大戦へなだれ込んでいく前夜であったから、軍務での往来も激しかったはずである。

設楽は当初シベリア鉄道で帰還するつもりだったので夏服を一枚しか持っておらず、暑さに閉口している。そのせいか、日記の記述は簡略なものが多い。ニューヨークで米国観をしたためたように、見聞した西洋全体を論じてくれればよかったのだが、身辺雑記に終始する。結局、一番熱を入れて書き留めているのは3月8日の君が代の不演奏事件である。船中コンサートの終了時に、英国国歌だけを奏して散会したというので、日本人は憤慨する。船長に猛省を促すことになり、苦労して英文を仕上げる。船長は素直に反省して、以後、日本人船客は特段のサービスを受けることとなる。

日記は、掲出したように、神戸入港の前日、3月30日の「色々荷造を初［始］める」の一文で素っ気なく終わる。帰国後の設楽事務所の作風は、それ以前の破綻含みの奔放なものから、新しさを追求しつつも折り目正しさを加えていくように見える。そこにこの世界一周の影響を見たい気もするが、しかし、歴史はそれほど単純なものではないかもしれない。

洋風建築に人生を捧げることになった一明治人が、その生涯でただ一度の西洋体験にどんな意味を与えたか。日記を閉じたあとの時間を想像するのは、また次の楽しみである。

（京都工芸繊維大学教授）

「設楽貞雄外遊日記 90年前、建築家が見た欧米」シリーズ最終回を迎えて

鼎談

大正初期の欧米と日本を追体験する

設楽　「設楽貞雄外遊日記　90年前、建築家が見た欧米」は、「建築と社会」1000号発行を記念して1年間連載しました。石田先生、お世話になりまして、ありがとうございました。この7月号で一段落しますので、石田先生と、日記の原文を読み解くというご尽力をいただいた元・安井建築設計事務所の山本さんと、そして私、設楽とで、鼎談でシリーズをしめくくりたいと思います。

■大正元年の洋行記が日の目を見る■

設楽　もう三十数年前、父である設楽貞三が一これも建築家ですが一、こういう日記があるよという話を私にしました。私はまだ20代で、そんな古いものに興味はなかったんです。

実は、おばが設楽貞雄の直系の娘で、東京に住んでおり、それをぜひ見たいので貸してほしいという話があって、おやじは貸すつもりをしていたんです。でも、私は一応控えだけはとっておこうと思って、出入りの青写真屋さんにコピーをとってもらってから送ったんです。そのおばが亡くなり、その原本はどこかへ行ってしまったんです。ところが、11年前の震災で家の中の本とか資料とかがむちゃくちゃになりまして、整理をしていて、三十数年前にコピーをとったことすら忘れていたこの日記が出てきたんです。

その頃には古いものに少し興味を覚える年代にもなっていて、まだ安井事務所におられた山本さんがこういうのに興味をお持ちだということを知っておりましたので、ぜひこれを読みたいんだけれどと相談したら、これはおもしろいじゃないかと。それで、2人してと言えば聞こえはいいんですが、それこそ9対1ぐらいの比率で山本さんに随分お骨折りをいただいて、読み解いていただいたというのが事の経緯です。

山本　石田先生の『関西の近代建築』が出版されたのが平成8年、ちょうどその1年前にこの日記が出てきて、先生のご本に資料として使えないかということでした。

石田　設楽貞雄さんについては、坂本勝比古先生がお書きになっていること以外にこれといった材料がなくて、何か新しい資料をお持ちなら、ということでお探しいただいている中で、こういうのがあると。

山本　それで先生に持ちかけて、先生だったら解読できるでしょうと申し上げたのですが…。(笑い)

石田　いやいや、最初から読み下したものをいただきました。

山本　その時点では達筆の文字が判読できず、空欄がいっぱいあって、ストーリーにはなっていなかったんです。一番難しかったのは人の名前で、これは、いまだにわからない。

設楽　おばが健在であれば、結構わかったと思うんですが、震災の前に亡くなってしまいましたので、残念ながら…。

■大正初期にタイムスリップをして■

山本　今回、連載という形でさわりだけでも世に出たことは非常にうれしい限りです。

特に最初の先生の解説文がすばらしくて、これを読んだだけで、全貌が浮かび上がってくるような感じで。

設楽　私、前から「建築と社会」に出そうかなと考えてはいたんです。編集委員長の立場でプライベートな記録を残すということに若干遠慮があったんですが、1000号の記念企画として思い切って提案したら、皆さんの賛同をいただき、いい機会だからぜひやったらと、少し背中を押していただいたこともあって…。それで、お声がけするなら石田先生にと思って大学までお邪魔して、お引き受けいただけませんでしょうかというお話をして、本当に快くお引き受けいただきました。

石田　最初にこの日記を拝見したときは、『関西の近代建築』を執筆する上で建築家・設楽貞雄を説明する材料として何か使えるところはないかという見方をしていたというのが正直なところでした。今回は、書かれていることを今の目で見たときにどういう意味を見つけるかというのが主眼でしたから、初めてちゃんと一字一句読んだという感じなんです。


石田潤一郎氏

そうすると、わからないことばかりなんですね。彼が非常に重視して訪ねたビルというのが、今はもう全然知られていないものであったりする場合が結構多いし、会った建築家もどうも大立者らしいけれども、現在の歴史書にはそんな名前はないといったことの連続です。要するに100年近く前の建築界がどんなふうに一人の日本人に見えていたかというのを追体験しないといけないのですが、それは、大変です。彼は何でこれをおもしろがったんだろうとか、そういうありとあらゆる局面がなぞ解きの連続みたいな感じですね。

正直な話、1段だけの短い文章で、書き出すとあっという間に書けるんですけれども、書き出すまでは毎回いささか苦労しています。でも、本当に勉強になりました。

解説の中で時々触れているんですけれども、1920年代、30年代まで時代が下がると、日本にもヨーロッパやアメリカの情報がかなりリアルタイムで入ってきています。一方、明治時代だと、日本人がヨーロッパ文明を必死で吸収しなければいけないというので、ちょっとした海外旅行でも見聞を報告することが多い。ところが、第1次世界大戦直前の古きよきヨーロッパの最後の姿、それから覇権を握る前のアメリカの姿というのは、意外と伝えられていないのです。日記を読んでいくと、それはこういうことだったのかという発見が、常にあります。

設楽　設楽貞雄の視点というのは、文明批評的なこともいろんなところに散りばめられていまして、先生の原稿にもありますけれども、アメリカの専横というか、それこそ90年前に今のアメリカを予見するようなこともありますね。

山本　明治時代の人というのは、そういう視点が今よりもっともっと厳しかったのと違いますか。特に、維新の戦乱にもまれた地方の人は大分違うと思います。

設楽　既成の権力に逆らっているような気質が脈々としてあるのかもしれませんね。

山本　だから、いわゆるエリートコースの建築家の視察録とは全

然違いますね。

設楽　見方が何となく庶民の目というか。

石田　素朴に物事をおもしろがるところがありますよね。気持ちの余裕がすばらしいですよね。私などは3週間も向こうにいると、くたびれてきて、何を見ても特に感動しないですけれども、それにくらべて設楽貞雄さんは精神的にタフだなと思う。

■旅行の目的は？■


山本純孝氏

山本　私は、今度日記を読み返して、いろいろ気づいたところがあるんです。今だったらツアーの旅行社に頼むところを、行く前に非常に準備をされているんじゃないか。それが手帳の最初のところにいろいろ書き込んであるんですよね。日程の計算やら、お金のことやら、持っていくいろんな携行品やら、英会話の手引きなど…。文章を見ると割に大ざっぱなようだけれども、準備は緻密にやっておられたような感じがしますね。

石田　特にアメリカですと、いろんなところを訪ねますから、多分事前にアポイントメントをとっていたでしょうね。また現地の高田商会とか、大林組とかのネットワークをきちっと使いこなしていますね。

設楽　いろいろなところへあらかじめ手紙を出して準備はしていたと思います。随分前から準備をしないと、向こうで受け入れてくれるかどうかもわからないでしょうしね。

石田　文章でも一、二度書いたことがあるんですけれども、旅行の目的がどうも釈然としないところがあって、現地に駐在する商社や向こうの企業との打ち合わせに随分時間をとっている。ですから、何かバイヤー的な任務を担っていたのかなとも思うんですけれども。ジーメンス社に何度も何度も打ち合わせに行きますし、絶対に何か物を買おうとしていたんだと思います。

設楽　聚楽館の準備だったのかもしれない。

石田　新式の劇場設備とか映写設備を買おうということだったのかなとも思うんです。

山本　そこが日記にはぼかしてあるのかもしれませんね。

設楽　だけど、いろんなところに行って、遊園地はよく見ていますね。

石田　大名旅行とまではいかないですけれども、お金も割合ふんだんにかけている。

設楽　余りお金に糸目はつけていない感じですね。ただ、倹約家ではあったようですから、余りむだには使っていないと思います。

石田　旅費は全部で6100円だと、自分に言い聞かせるように最初に書いていますね。このときに買い込まれた本とかそういうものは。

設楽　それは見つからないですね。

山本　絵はがきなんかは持って帰っていますか。

設楽　絵はがきはたくさんあります。このアルバムと、あと4冊ぐらいありますから、ほとんど絵はがきのコレクションと言ってもいいぐらいです。

山本　この日記をもし本にするなら、絵はがきなんかをいっぱいイラストに入れると、当時設楽さんが見た街なり建物なりが鮮やかに浮かび上がってくるかもしれませんね。

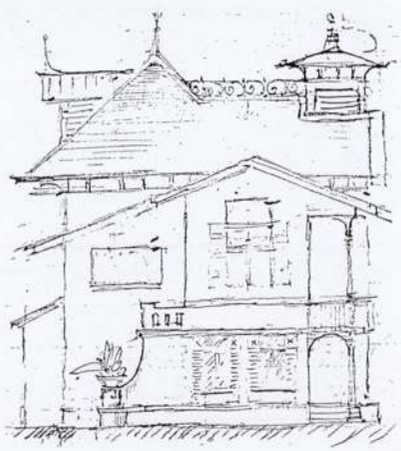
石田　アルバムの写真はこの時代の都市風景として見てもおもしろいですよね。どこはどこの何と、もう少しきちんと同定できるといいんですけれども。

■日露戦争後の日本と欧米の交流■

山本　当時、これと前後して行った日本の建築家の旅行記、旅行の資料というのは、ほかに何かないですか、ヨーロッパでなくても。例えば、伊東忠太とか、曾禰達蔵とか。

石田　帰朝報告みたいな文章はあるんです。伊東忠太は日記や野帳が残っていますが、彼の場合は、遺跡調査報告みたいになっている。設楽日記ほどの欧米建築ルポは、これまでには知られていませんね。武田五一なんかは、スケッチブックという形ではよく残っていますけれども、言葉としては全然書いてないですし。

設楽　逆に、設楽貞雄のスケッチは余りないですね。もうちょっと書いてほしかったなと思うんですけどね。


カリフォルニア州バークレイにある
大沢信郷邸スケッチ

石田　プランニングの骨子などは非常にうまくつかまえてますよね。

設楽　非常に資料価値も高いとは思うんですけれども、これを次に生かそうと思うと…。

山本　近代建築の歴史をやっている方で、この時代の欧米と日本の関係を研究している方はいらっしゃいませんか。

石田　近代の西洋建築史をやる研究者はふえているんですが、どうしてもその国のことを調べることに主眼があって、その国と日本との関係ということでは、ジャポニスムとかの特定の問題についてに限られているところがあります。でも今後、相互交流史的な視点は拡がると思いますね。だから、こういう資料はどんどん紹介する必要があります。

設楽　本当にたくさんの人が向こうに行っていますので、日本の旅館があったり、日本料理店もあったり…。

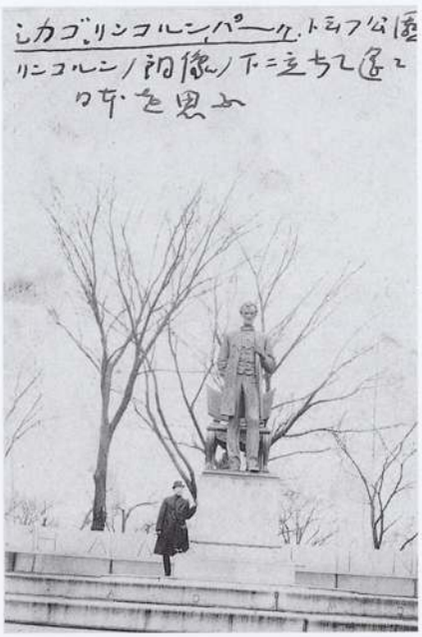
石田　日本語新聞を出している人が出てきましたね。

設楽　果ては日本人専用の娼婦も出てきたり。

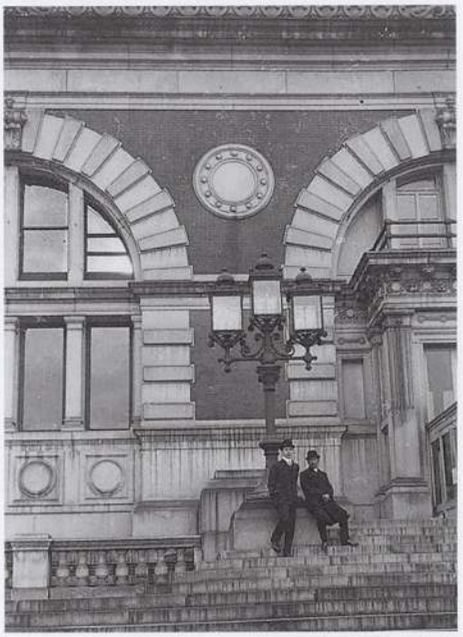
石田　設楽さんの場合、日露戦争の後というようなこともあるんでしょうか、ヨーロッパ人に対しても余り引け目のようなものを感じていないところがうかがえますね。それから明治の頃の人に比べると、情報がきちんと整理された形で入っていて、十分学習した後に、選択的に自分が見たいものを見ているという気がしますよね。だから、物心両面で余裕がある、いい時代なのかもしれませんね。

第1次世界大戦の後は、特に円が高くなるので、苦労せずに行っておられるかもしれません。渡辺節さんとか安井武雄さん、村野藤吾さん、みんな行ってますよね。学習だけじゃなくて、もう少し楽しむ要素の多い旅行というのが、設楽さんの頃から芽生えていたんだなと思いました。

それにしても、設楽貞雄さんは、旅行経路を変更したからとクッ



シカゴ、リンコルンパークにて


メトロポリタン美術館南ウィングにて（設計／ウェストン）


アラビア風の建物（名称・所在不明）
――おわかりになる方はご教示ください

ク社に乗り込んで、憶せず交渉をして、金を取り返してきたりしていますね。

設楽　そういうのは本当に物おじしないですね。やっぱり日本人のアイデンティティーがしっかり示せた時代なんですね。プライドを持って歩いていますよね。ただ、向こうの婦人方の服装とか、そういうものには実に辛らつなことを書いていますけれども。毛皮を着て歩いているのはまるで熊が歩いているようだと。（笑い）

石田　ネックレスやイヤリングがピカピカして観音様のご来迎のようだとか‥。（笑い）ふだんからそういう表現をされる方だったんでしょうか。

設楽　私は直接は知りませんが、しゃれとかそういうのはお得意だったんじゃないでしょうか。

■設楽貞雄と設楽建築工務所■

山本　外遊当時は、所員というのは何人ぐらいいらしたんですかね。伊達陶二郎とか森山伊望とかいう方は、帰ってこられてから後ですね。

石田　萩一郎さんと篠田進さんが前に来ています。

山本　そうすると、萩一郎が留守番をしていたのかもしれませんね。それで、旅行先から自宅とか事務所あてには通信は行ったんですか。

石田　家族に手紙を書いたという記載がときどきあります。

山本　それは残っていますか。

設楽　残っていません。

山本　それが残っていると、またおもしろいんですけどね。だれか持っていないかな。

設楽　また探してみます。

ところで、坂本勝比古先生がうちの父に聞いたんだと思いますけれども、大正６年当時のスタッフとして設楽貞三の名がありますが、貞三は大正12年京大卒ですから、まだ入っていないです。

山本　宮飼克二さんというのは。

設楽　宮飼さんには生前にお会いしました。逆に言うと、私は長じて宮飼さんにしかお会いできていません。このほかにもいろいろスタッフの方はいたと思います。

■設楽貞雄と設楽貞三■

石田　貞三さんは、もともとはご一族だったんですか。

設楽　貞三は養子なんです。設楽貞雄は福島県二本松の出身ですけれども、貞三は同じ福島県須賀川の出なんです。優秀だったので京都大学に行くということで、同県人だったから、そういうつてがあったんだと思います。設楽貞雄のもとに養子に行って、それで大学を出してもらって、卒業して長女の美音子と結婚しています。

須磨子は次女、三女が千鳥です。美音子は須磨とは直結しないかもしれませんけれども、何かいい音がしたんでしょうね。須磨子は須磨そのままでしょう。それから通う千鳥の千鳥。その設楽の３姉妹がつとに有名だったようです。

設楽貞雄は、須磨で道楽のようにしょっちゅう自邸を設計して移り住んだのよと言ってました。3軒か4軒ぐらいでしょうけれども、須磨子が娘時代に、また引っ越しするよと。ええっ、またという話があったと聞きました。貞雄が亡くなったのは、私が生まれた離宮公園の前だと思います。医者の往診を頼んで、医者が着いたよとうちのおやじが言ったら、ああ、あのやぶかと、大きな声で言ったので、（笑い）聞こえたのと違うかなと思いながら案内したとおやじが言っていました。

そういう江戸時代生まれの人間ですが、設楽貞雄はまだいい時代に生きていますけれども、うちのおやじは随分不遇な時代もあって、終戦前後、特に苦労したと思います。身一つで満州から帰ってきましたから。

石田　貞三さんからは、一度お手紙をいただいたことがありまして、ちゃんとお会いすればよかったんですけれども。

設楽　では、晩年だったんですね。

石田　実はかなり失礼なことをしでかしたんです。1976年頃に書いた文章で、武田五一と設楽貞雄を比べて、設楽さんはデザインがやや生煮えだというようなことを書いたら、貞三さんからしかられましてね。（笑い）

設楽　何ということを書くんだ、あの若造はと。

設楽貞雄の場合は、デザインが、いろんなものがないまぜになっている。それがまたおもしろいといえばおもしろいんでしょうが…。

石田　貞三さんにしかられた頃はまだ勉強不足で、そうした闊達



解体直前の大興ビル（旧 内田汽船ビル）

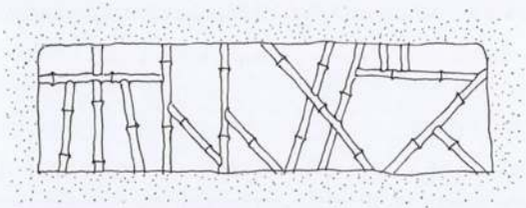
さの魅力が分からなかったんですね。

設楽　そういうところは魅力でもあったんでしょうけれども、見る人が見るとばらばらじゃないか、いろんなものをひっつけているだけじゃないかという批判もあるかもしれませんね。しかし、割とかっちりつくっているものもありますよね。例えばこの間つぶれましたけれども、大興ビル（旧 内田汽船）。京都電灯の建物なんか、初期の赤レンガのものですけれども、大変きちんとつくってある。硬軟というか、割合新し目のものとスタイリッシュなものと…。

山本　アーチが好きだったんですよね。

設楽　それと、日本間では網代天井が好きなんです。須磨の家も網代天井の部屋が１つありまして、そこでストーブをたきますと、ミシミシミシミシッていうんですよ、暖かい空気が上がりますから。どうってことない家だと私は思っていたんですけれども、今にして思えば随分凝った家で、惜しいなと思ったんですが、うちのおやじは余り気にしていなくて、今の住吉に移ってきたんです。

竹も結構好きだったんです。竹の柱があって、欄間が塗り壁でくり抜いてあって、ここにホ、ト、ト、ギ、スと。このギが難しくて、小さい頃、読めなかったんです。



須磨の設楽宅にあった欄間細工
書画をこなす粋人であった設楽貞雄の遊び心が偲ばれる（設楽貞樹画）

結構楽しんでいましたね、何しろ設計を楽しむと書きますからね。

■明治の終わり、大正の初め■

設楽　今後この外遊記をどうしようかと、先ほどからお話が出ていますけれども。

山本　何かいい企画を考えないといけないな。

これから、近代化のスタート時点に近いこの時代を再検討というか、再研究することがだんだん出てくるんじゃないかと思いますね。日本の20世紀の文学のスタートは森鴎外と漱石で、漱石は英国留学で、その時代の国内外のいろんな事情を研究する動きはすごいですね。大体、漱石は、高等中学に入るときに、建築科を志望したんですよね。若山滋さんが『漱石まちをゆく』という本に書いていますね。そういう時代の一つの動きに、日の目を当てないといけないと思いますね。

石田　広く読者に呼びかけて、同じような手記や写真をお持ちの方を掘り起こしていくことをしてみたいですよね。

設楽　これは設楽貞雄の孫としてはではなくて、編集委員長として、「建築と社会」の方で呼びかけてみましょう。



設楽貞樹氏

山本　建築協会として、建設業とか、その他設備、材料などの当時の先達の動きを探っていったら、貴重な資料が出てくるかもしれない。

石田　財閥系の商社が出てくる直前ですよね。大倉組はじめ山中商会とか、高田紹介とかがどれほど活発に活動していたか、よくわかります。

山本　設楽さんが外遊した時代にできた建物で、向こうの材料を使ったとか、そういう記録があれば、その辺から探っていったら、何か出てくるかもしれない。

石田　商社任せにせずに、自分の目で情報を集めて、いいものがあったらどんどん使おうという知的な貪欲さが、日記の至るところにうかがえます。

山本　あの時代にできた建物に関係した資材調達とか情報入手とかをもうちょっと探ったら、おもしろい話が出てくると思うんです。

石田　社会的分業体制ができる前だからこそ、行って自分で買いつけてくる。錠前一つでも、仕様書に１行書くための裏付けをとろうという姿勢ですよね。その成果を具体的に調べないといけませんね。

設楽　社会のシステムができていなかったんですね。そういうのは大阪ガスビルの頃にはできているんですか。

山本　ガスビルの頃は、三井物産など大手商社が海外の資材や機械を調達する時代になっています。

設楽　でも、この時代はガスビルの時代の20年ぐらい前でしょう。

山本　この20年間というのが大きいんですよ。だから貴重なんですよ。大正の初めというのは、まだ明治の終わりだから、５年過ぎぐらいから急に…。

設楽　大正時代というのは、日本が急上昇する直前なんですね。

山本　近代建築のあけぼのですよね。だから、もう一回そこに光を当てることが必要でしょうね。

設楽　ぜひそういうのを呼びかけて…。

ということで、そろそろ終えたいと思います。

と　き　2006年５月22日（月）　18時～20時
ところ　日本建築協会
出席者　石田潤一郎（京都工芸繊維大学大学院教授）
　　山本　純孝（元・安井建築設計事務所）
　　設楽　貞樹（安井建築設計事務所常務取締役）

◀明治から大正へ“海外建築事情”の情報を求める！

鼎談にも出てきますが、読者のみなさまの中で、この外遊記の時代もしくはその前後の時代の海外建築事情に関する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、当協会事務局（TEL 06-6946-6981）までご一報いただければありがたく存じます。

「建築と社会」誌上で、何らかの形で紹介させていただきます。

（編集委員長：設楽貞樹）

第5回 読者と選ぶ「建築と社会」賞入賞発表

二〇〇四年、二〇〇五年の24冊を対象に

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■第5回選考委員
井上　豊（財団法人日本建築総合試験所試験研究センター長／本会副会長）
徳矢典子（弁護士、徳矢法律事務所）
柏木浩一（兵庫県立大学大学院教授）
鈴木克彦（京都工芸繊維大学大学院助教授／本誌編集委員）

第5回読者と選ぶ「建築と社会」賞

総評

選考委員長　井上　豊

第5回「建築と社会」賞は、本誌2004年1～12月号および2005年1～12月号に掲載された建築作品および記事について、読者からの投票（2006年1月締切）を反映させながら、編集委員会によって第1次選考（2006年2月8日）が行われた。その結果を受けて、審査委員会は、2006年3月31日に開催され、別掲のように受賞建築作品4点、受賞記事2点を選考した。

まず、建築作品部門について、本誌「建築と社会」の趣旨に相応しい社会性、公共性や環境への配慮などについて意見を交わし、選考に入った。その結果、標記の4作品が選ばれた。掲載号の順に簡単な評を述べる。

「**国分寺文書センター**」（2004年11月号）は、景観と調和するそのデザインとともに、積極的な換気・断熱の技術の導入が評価された。「**国立病院機構　長崎医療センター**」（2005年2月号）は、複合する多種の機能をうまくまとめたレイアウト、自然環境にマッチする外観、免震化された医療施設などの点が考慮された。「**田原本青垣生涯学習センター**」（2005年9月号）は、住民の集う四つの機能を一つの建物にまとめ上げ、その親しみやすく、自然環境とうまくマッチさせたデザインなどが認められた。「**高島市立静里なのはな園**」（2005年12月号）は、自然景観と調和したデザインとともに、取り入れられた多くの省エネルギー・環境配慮技術が評価を受けた。

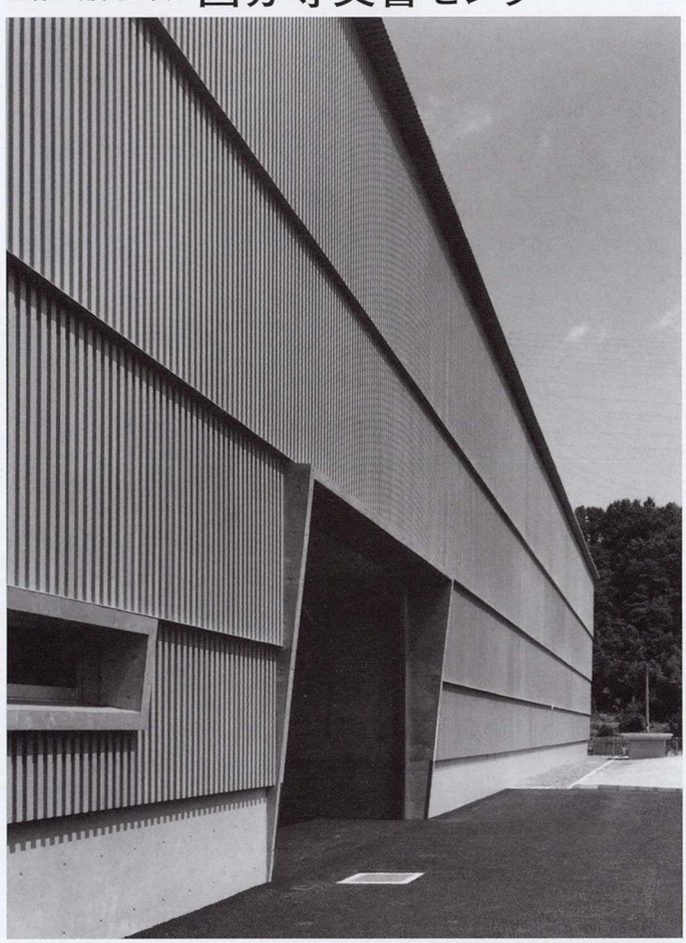
つぎに、記事部門についても、同じように審査の視点は本誌の趣旨によるものとし、選考を行った。結果として、2点を受賞作と決めた。

掲載順に、「**21世紀の社会と建築家**」（2004年9月号）は、これからの建築家に問われるものについて、明確に、かつ具体的に論を進める説得力のある一文として選ばれた。「**『建築と社会』創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷**」（2005年7月号）は、暮らしに密着する住宅に焦点を当て、膨大な資料を丹念に分析し、生活の視点から簡潔にまとめ上げており、充実した論考として評価された。

以上の建築作品、記事のほかに、両部門とも今回は2年間の出版から選んだこともあり、選外となった中に多くの優れたものがあった。選出点数の関係から入賞に至らなかったことは心残りであり、さらに、次の機会に期待したい。

最後に、受賞者の皆様にお祝いを申し上げるとともに、この企画を進めるに当たり、いろいろとご協力、ご尽力下さった、会員の皆様、編集委員会はじめ関係者の皆様に感謝申し上げます。

■作品部門入賞　国分寺文書センター



2004年11月号掲載　　撮影／古川泰造

高松市郊外に立地する、銀行の文書センター。

シルバー人材や女性でも無理なく働ける倉庫環境を、冷暖房をなしで実現すべく、クール＆ホットチューブによる涼風・暖風換気システムを採用している。これは、年間を通じて摂氏15℃前後に保たれた地下3.5m近辺に熱交換パイプを敷設し、外気をこの熱交換パイプを通じて屋内に送り込み、夏季は涼風、冬季は暖風を供給するシステムである。

また、伝統的な土蔵の断熱性能に着目し、外壁と屋根の高断熱化、開口部を極力小さくし庇を設けるなど、自然エネルギーの恩恵を最大限に活かすための周辺技術とデザインを採用している。

■作品部門入賞

独立行政法人 国立病院機構

長崎医療センター

約10年の歳月をかけて、650床という急性期大規模病院を現地建て替えしたプロジェクトである。長崎県の基幹災害医療センターとして、高度の先進医療・救急医療を提供するだけでなく、患者にとっての療養環境の向上やスタッフにとってリラックスできる環境提供、また地域の癒しの環境構築を試みている。

広大な敷地に当初から点在するかしの大木を中心として、四季の自然を感じられる緑豊かな環境や回遊路を設けている。病院内でも様々なスケールの屋上庭園を整備することで、患者や地域の人々が気軽に利用できるリハビリや散策の場として、また安らぎを感じられる治癒力向上の場となることを意図している。



2005年２月号掲載

■作品部門入賞

田原本青垣生涯学習センター

800席のホール、開架12万冊収容の図書館、唐子・鍵考古学ミュージアム、公民館の四つの機能をもつ複合施設である。それぞれの部門に人々が集うありようを「市（いち）」と見たて、一枚の大きな屋根の下、人々が交歓する界隈性が一つの「コミュニティ市」をつくり出すことを期待している。

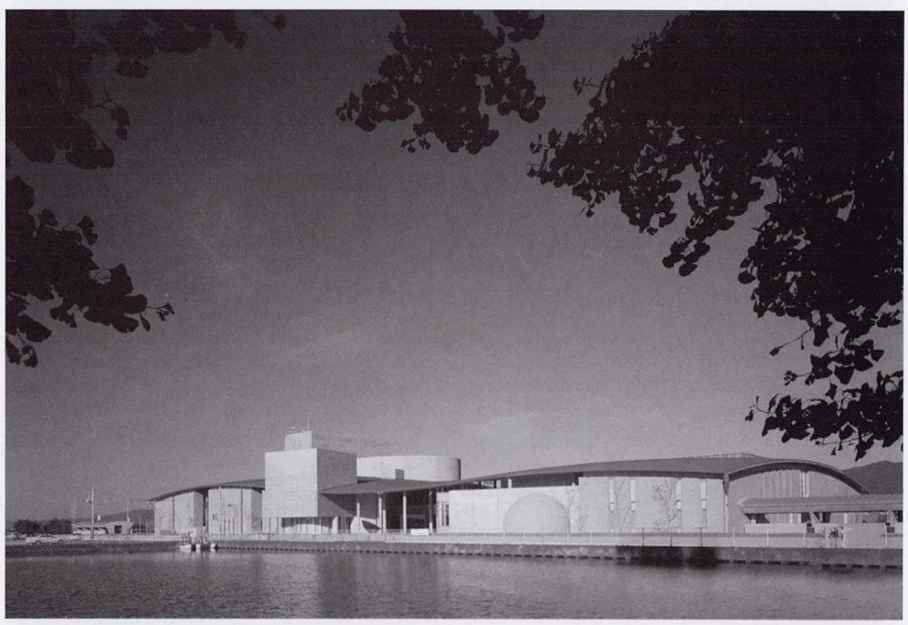
奈良の風景はゆったりとしておおらかである。

屋根の稜線もまた背景の山並みに沿ったゆるやかな曲面に決められた。

大屋根に降った雨水は地下ピットに集められ、外部の散水に利用している。

屋根の四隅、アプローチ広場のオブジェは雨を受ける機能をもつ。

これらのアートは「土のしずく」と名付けられた。



2005年９月号掲載

■作品部門入賞

高島市立静里なのはな園

湖西の山並みは豊かな水と緑の平野を形成しつつ、琵琶湖へ至ります。その平野部に位置し、良好な日照、北西の風、豊かな地下水をもつ敷地において、環境にやさしい施設づくりを心がけました。

温水パネル、太陽光発電、二重屋根によるパッシブソーラー、光ダクトによる下階への自然光導入、風通しの良い諸室配置、トイレの洗浄と園庭の散水やせせらぎへの地下水利用といった手法と地中熱利用の循環換気システムによる地熱と地下水を利用した空調は、冬には暖かい床、夏には心地よい涼しさが感じられ、季節感とともに子どもたちが自然の恵みに触れられる優しい環境を創出しています。

撮影／松村芳治



2005年12月号掲載

■論考部門入賞

21世紀の社会と建築家

2004年9月号掲載

馬場璋造

建築情報システム研究所



1935年川越生まれ。1957年早大建築卒。1959年早大経済卒・新建築社入社。1972年新建築取締役編集長。1985年・1998年日本建築学会業績賞選考委員。1990年建築情報システム研究所代表取締役。1992年日本建築学会理事。1993年～さいたま景観賞選考委員長。1994年日本文化デザイン会議福岡会議議長。1998年BCS選考委員。2002年日本建築学会賞業績賞受賞。奈良市民館・横浜港国際客船施設・札幌ドーム・西梅田サンケイビル等コンペ・プロフェッショナル・アドバイザー。
著書『生残る建築家像』『日本の建築スクール』『策あり！都市再生』『建築がまちを変える』『こんな建築家になれるか』

■論考部門入賞

「建築と社会」創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷

2005年7月号掲載

北浦かほる

帝塚山大学教授



大阪市立大学住居学科卒業後、倉敷建築研究所勤務。その後大阪市立大学助手、講師、助教授を経て、大阪市立大学大学院生活科学研究科教授。2004年から大阪市立大学名誉教授。日本インテリア学会副会長。
現在、帝塚山大学居住空間デザイン学科教授。学術博士。
専門分野は居住空間デザイン学および環境心理学。
主著書に、
『世界の子ども部屋ー子どもの自立と空間の役割』井上書院
『台所空間学事典ー女性たちが手にしてきた台所とそのゆくえ』彰国社
『インテリアの地震対策ー家具と家電製品から人をまもる』リバティ書房
『インテリアの発想ー住み手の心をかたちにする』彰国社
『インテリアデザイン教科書』彰国社（編著）
『住まいの事典』朝倉書店（編著）

選考委員講評

弁護士

徳矢典子

【作品部門】

国分寺文書センター

銀行の文書倉庫として建てられたとのこと。この作品は、単に文書の保管・保存の目的を達するためにとどまらず、建物の中で常時作業する人の立場も考慮して、健康や環境条件の視点を活かしているところが賞の目的にかなうものとして評価された。

具体的には、地下3.5m近辺に熱交換パイプを敷設し、このパイプを通して外気を屋内に送るシステムを採り、また、外壁に自然エネルギーを活かす工夫を施すなどしており、スッキリとした外観デザインとともに建物周辺の良好な自然環境条件をフルに活用した社会性・環境への配慮にあふれる作品である。

田原本青垣生涯学習センター

一枚の大きな屋根の下にホール、図書館、考古学ミュージアム、公民館の四つの施設があるというユニークな作品である。

様々な学習意欲を持った人々が一枚の大屋根の下に集うことによって、社会的なつながりが生まれるきっかけになることが期待できる。とはいえ、この施設を住民がどのように活用して一枚の大屋根に込められた思いを実現し活力あるまちづくりに貢献する施設にするかが、今後の大きな課題ではないだろうか。

高島市立静里なのはな園

豊かな水と緑に恵まれた自然環境に溶け込んだ外観であり、また、建物内部は明るくぬくもりのあるゆったりとした空間が演出されており、そのような雰囲気が情感豊かな人間を育てるのに役立つのではないかと期待される作品である。

そして、恵まれた太陽光は、温水パネルによる温水供給、太陽光発電、トップライトの自然光を建物全体に採り入れるなどして省エネ対策に効果を発揮し、豊かな地下水は、トイレの洗浄、園庭の散水、ビオトープのせせらぎに活用し、空調は地熱利用の循環換気システムを採用するなど、多方面にわたり社会性・環境への配慮がなされていて、心温まる作品である。

国立病院機構 長崎医療センター

大村湾を望むなだらかな丘陵地に立地し、自然豊かな環境を守りつつ、最先端の高度の医療を目指して7年8ヵ月の歳月を経て建てられたこの作品には、21世紀のモデル病院としての輝きを感じる。

特に、社会性・環境への配慮の点について、美しい屋上庭園や展望レストラン、コンビニ、喫茶店、郵便局、ATMなど生活に密接に関係する様々な設備が調えられていて、利用者にとり便利かつ安心であること、更に、インテリアの素晴らしいセンスで楽しい空間が演出されていること、また、クリーンエネルギー、雨水利用のほか様々な省エネ対策、耐久性への配慮などにすぐれていることなど、まことに賞の趣旨にふさわしい作品である。

【論考部門】

「建築と社会」創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷

創刊号から1000号の中から住まいと暮らしをとりあげ、大正6年から現在までの88年間を10区画に分けて、その変遷を簡潔に表現した力作である。

それぞれの時代を代表する建物の外観や間取りの図面や写真を随所にちりばめ、住まいと暮らしの関係を明らかにしていて説得力がある。

ところで、この1年の間に多数の超高層マン

ションが出現する一方で少子高齢化が一層進んでいるとのことであり、今後の住まいと暮らしのあり方についても北浦先生のご教示をいただきたいと思う次第である。

21世紀の社会と建築家

これからの建築家の社会的役割を考察したすぐれた論考である。

21世紀の建築家の社会的役割は「コミュニティと建築主の志向性を反映した豊かな個性を持ちながら、まちの環境構成に寄与する」こととし、建築主が「提示した条件に答えるだけではなく、求めた以上のものを建築家が提案」し、「トータルでの創造的解決をすぐれたデザインとともに示すことがこれからの建築家にはより強く求められる」としている。

論旨は専門的知識を持たない一市民の立場からみても重要な指摘であり、まことに同感である。

選考委員講評

兵庫県立大学大学院教授

柏木浩一

講評に際し、今日の多様な価値を容認する「広義のポストモダニズム」下では、評価のモノサシを明確にすることから始めなければならない。だが、それは超人の技。建築の歴史を通観すると「人の多様な思いが織り成す社会」と「自然から文明までを含めた人の生活環境」が大きく変わるとき、それに追従するように建築のあり様までが変容し建築歴史に刻印されている。ここから、建築家が「社会」と「環境」の変化にどう取り組んだかをみれば、その情熱の度合いをみれば、評価のモノサシとしても機能するのではないかと考えてみた。

前置きが長くなったが、この前提で、私の印象に残った作品について講評させていただく。まず作品「**国分寺文書センター**」。銀行の、普通の書類倉庫であるが、少人数のシルバー、女性従業員のために、地熱利用の送風システム、外壁ダブルウォールの断熱仕様、今後に備えた自然エネルギー利用量計測システムの装備など、考えられるあらゆる労働環境向上への方策が採られている。この種の建物に対し少し過剰だとも思える「環境」配慮だが、モノサシを変えれば、少数弱者が構成する小さな「社会」に対する建築家の愛が痛いほど感じられる作品といえる。

作品「**高島市立静里なのはな園**」は、基本に忠実に、手堅く、実に愚鈍なまでに建築家としてのやるべきことをやっているように見受けられる。建築地の自然特性を慎重に読み取り、そこから導かれる二重構造屋根（さや屋根）、地下水利用などの「環境」最適解をこつこつと具現化していく。この地味な作業を支える情熱は、やはり、将来を担う小さな弱者「社会」に対する建築家の愛ではなかろうか。

論考「**『建築と社会』創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷**」は、まれに見る力作。1000号分に掲載された膨大な「住まいと暮らしの記事」を通読し、次世代の住宅と暮らしのゆくえを模索する。その淡々とした88年間の、「社会」と「環境」の動向羅列に最初は戸惑うが、読後、関西を中心とする住まいと暮らしの変遷を通観した満足感に、思う存分浸らせてくれる。

論考「**21世紀の社会と建築家**」を野球にたとえると、この賞に対する直球勝負。明快な論理でぐいぐいと、20世紀の拡大主義、グローバリズム、抽象主義の終焉がひき起こした「社会」と「環境」の考察から始まり、21世紀建築家の役割までもを、勇気をもって具体的に提示してくる。建築界の構造不況に常日頃不安を抱くわれわれにとって、実に示唆に富む論文といえる。

選考委員講評

京都工芸繊維大学大学院助教授

鈴木克彦

本年度は、選考対象となった建築作品に話題作が少なかったこともあり、本賞の趣旨である「社会性・環境などへの配慮」を最大限優先して選考することができた。こうした中で受賞対象として選ばれた作品が、保育園において環境に配慮した省エネルギーシステムを採用した「**高島市立静里なのはな園**」である。様々な自然の形との触れ合いを演出した巧みなデザインも、子供たちの環境教育にとって好ましいと高く評価したい。今後は、この施設の特徴を活かすことで、環境や人々に思いやりをもった子供たちに健やかに成長していけるような施設運営を願いたい。「**国分寺文書センター**」も一見地味な印象を受ける作品であるが、施設内で働く人々の立場にも考慮しながら、冷暖房設備に頼らずに温熱環境に配慮している点に好感が持てた。

一方、他の受賞作品は地域社会とのかかわりという点で評価できる点があった。「**田原本青垣生涯学習センター**」は、とかく威圧感が生じがちな大規模な複合施設を、のどかな周囲の田園風景に溶け込むかのように造形されており、誰もが訪れてみたいという気持ちを抱くような施設となっている。また、「**長崎医療センター**」では、長期にわたる建て替え施工計画からデザインのディテールにいたるまで、患者の立場を重視した姿勢が一貫してうかがわれた。モデルルールによる検証や施工中の現場イベントの実施などには、特に興味が引かれた。これらの取り組みの成果が活かされ、長く地域住民に愛され続ける施設となってほしいものである。

論考部門で受賞となった「**『建築と社会』創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷**」は、大正６年からの88年間にわたる住宅と暮らしの変遷を振り返ったものであるが、その内容はライフスタイルやまちづくりの領域まで展開している。これだけの充実した内容をわかりやすく端的にまとめた本論文は十分に受賞に値するものである。また、関西の話題を中心に、長期間にわたり建築を通じて社会問題を敏感に受け止めてきた「建築と社会」誌の役割にもたいへん大きいものがあると、改めて認識させていただいた。もうひとつの受賞論文「**21世紀の社会と建築家**」は、社会性が問われている建築家に価値観の転換をせまる内容で、たいへん興味深いものがあった。最近の様々な事件を契機に、建築家の社会的立場が厳しく問われるようになっているが、コミュニティを含め広く社会環境のデザインを求める新しい建築家像の提言には、共感する面が多々あった。建築家＝デザイナーと思い込んでいる学生たちには、ぜひとも一読させたい論文である。

入賞作品データ

■国分寺文書センター
所在地－香川県綾歌郡国分寺町
設計者－竹中工務店
監理者－竹中工務店
施工者－竹中・合田　共同企業体

■独立行政法人 国立病院機構 長崎医療センター
所在地－長崎県大村市久原２丁目1001－１
建築主－国立病院機構 長崎医療センター
設計者－国立病院機構本部財務部施設課施設整備室
＋安井建築設計事務所
監理者－国立病院機構本部九州ブロック事務所
ブロック統括部施設整備課
施工者－建築：大林・戸田・三井特定建設工事共同企業体
電気：九電工・川北特定建設工事共同企業体
空調：三建・菱和・協和特定建設工事共同企業体
衛生：日立プラント・菱熱・大橋特定建設工事
共同企業体

■田原本青垣生涯学習センター
所在地－奈良県磯城郡田原本町
大字阪手233－１
建築主－田原本町
設計者－株式会社　東畑建築事務所
（担当：北村潤・中川千裕）
監理者－株式会社　東畑建築事務所
（担当：大野修）
施工者－鴻池・淺沼・村本共同企業体

■高島市立静里なのはな園
所在地－滋賀県高島市新旭町藁園
2305番地
建築主－高島市
設計・監理－株式会社 徳岡昌克建築
設計事務所
施工者－建築・機械／株式会社 澤村
電気／株式会社 澤井デンキ

ドミニク・ペロー講演会を大阪市中央公会堂で

大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻は、2006年4月より1年間、フランスの国際的建築家ドミニク・ペロー氏を招へい教授として迎えている。

大阪大学では、7月下旬に工学研究科S1棟9階製図室においてペロー教授によるデザインワークショップを実施し、その記録と成果はまとめて出版する予定をしている。

一方、中之島の中央公会堂では、「Would you like to wrap it?—ドミニク・ペロー最新作を語る」をテーマに講演会を開催する。

講　師　Dominique Perrault
—1953年フランス生まれ。パリ国立美術高等学院、パリ高等土木大学を卒業。高等社会科学大学大学院（歴史学）を修了後、1981年にドミニク・ペロー事務所を開設。フランス国立図書館（パリ）等の作品で多くの賞を受賞。

日　時　2006年7月19日（水）19：00〜21：00
会　場　大阪市中央公会堂・大集会室
大阪市北区中之島1-1-27
定　員　800人（e-mailによる事前申し込み要、先着順受付）
資料代　学生500円、一般1,000円
申込み　「ドミニク・ペロー講演会参加申込」とし、氏名・所属・e-mailアドレス・電話番号を明記の上、lecture@arch.eng.osaka-u.ac.jpへ。
主　催　大阪大学大学院工学研究科
協　賛　日本建築協会ほか建築4団体

TAKENAKAデザイン展2006・大阪—御堂筋から—

近年、1920〜1960年代の「モダニズム建築」を文化財として再評価する動きが見られるなか、日本のモダニズム建築史の一角をなしてきた竹中工務店設計部の16人の作品を社会へ紹介する。入場無料。

■TAKENAKAデザイン展2006・大阪—御堂筋から—
会　期　2006年7月3日〜8月11日（金）
10：00〜18：00　日曜日・祝日は休み
会　場　竹中工務店大阪本店・御堂ビル1階
大阪市営地下鉄御堂筋線「本町駅」④⑤出口
展　示　・モダニズム16人展—竹中工務店設計部の源流—藤井厚二、鷲尾九郎、石川純一郎、岩本博行、石本喜久治、山口文象ら16人の人となり。
・現代16作品展—竹中工務店のいまとみらい—西日本を中心に作品16点をピックアップし、支える人とチーム、そして方法論を展示する。

■若手建築家講演会
会　場　いずれも竹中工務店大阪本店・御堂ビル1階
定　員　200名（いずれの講演会も）
申込み　先着順。申込用紙は竹中工務店（http://www.takenaka.co.jp/）から取り出し、FAXか郵送で申し込む。
申込先　竹中工務店TAKENAKAデザイン展2006・大阪実行委員会（FAX 06-6263-9761）
〒541-0053　大阪市中央区本町4-1-13

●藤本壮介（ふじもと・そうすけ）講演会
…1971年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、2000年藤本壮介建築設計事務所設立。現在、東京理科大学非常勤講師。「SDレビューSD賞」「槇賞」など入選5回。「青森県立美術館設計競技優秀賞」「群馬県巴楽町役場設計競技佳作」。
日　時　2006年7月21日（金）18：00〜20：00

●三分一博志（さんぶいち・ひろし）講演会
…1968年生まれ。東京理科大学理工学部建築学科卒業。小川晋一アトリエを経て、三分一博志建築設計事務所設立。現在、山口大学工学部非常勤講師。
日　時　2006年8月4日（金）18：00〜20：00

小規模多機能サービス拠点の計画に関するシンポジウム

「施設から地域へ・住宅へ」とのトレンドに対応するサービス「小規模多機能型居宅介護」が今年4月に制度化されたのを受けて企画された。参加費無料。

日時　2006年7月19日（水）10：00〜16：30
会場　建築会館ホール（東京都港区芝5-26-20）
定員　180名（先着順）
申込　e-mailかFAXで、①参加者名②勤務先③連絡先TEL/FAX/e-mailを、㈳日本医療福祉建築協会小規模シンポ係（jiha@mars.dti.ne.jpかFAX 03-3453-7573）へ。

銀座・京橋・日本橋／中央通り照明デザイン国際競技

東京・中央通りの道路照明灯は設置以来38年が経過し、現行の耐風基準に適応できておらず、国土交通省東京国道事務所では道路照明灯のリニューアルを計画している。このため国際コンペにより、国内外の照明デザイン、都市・建築・土木デザイン、プロダクトデザイン、アートなどの分野で活動する個人やチームからの提案を公募している。審査発表は2006年11月20日。

このコンペは、選ばれた道路照明灯のデザインが、実施案として採用されることを前提としている。

応募登録　2006年7月20日（木）まで
応募期限　2006年8月25日（金）17：00必着
賞　最優秀賞1点—副賞500万円—ほか
応募方法、審査メンバーその他詳細は、主催者ホームページhttp://www.tokyolights.jp/に掲載中。

SDゼミ「木を知る」

全4回、第1・第3水曜日、19：00〜21：20開催のSDゼミでは、「木（材）」を、木を知り尽くした建築家が様々な建築様式の見地から語る。定員30名（先着順）

①2006年8月2日（水）「素材について」
②8月16日（水）「数奇屋建築から学ぶ」
③9月6日（水）「古民家住宅から学ぶ」
④9月23日（土・祝）—現場見学—

講　師　梅田宗春（梅田工務店社長）
——奈良市内で木造建築を中心に手がける地場工務店。自社工場を持ち、建築物にあった木材を選ぶことから始める。
神家昭雄（神家建築研究室）
——作品に「明石の家」（日本建築学会作品選奨、BELCA賞）など。古民家再生工房の継続的な活動に対して日本建築学会業績賞受賞。
場　所　大阪ガスインテリアデザインスクール教室
大阪市中央区備後町3-6-14
アーバネックス備後町ビル6階
受講料　一般31,500円、学生・JIA会員26,250円
申込み　大阪ガスインテリアデザインスクール
TEL 06-6262-4089
http://www.og-school.com/

インテリアプランナー試験実施

平成18年度のインテリアプランナー試験は、次のように実施される。詳しくは、http://www.jaeic.jp/へ。

受験資格　平成18年4月1日現在満20歳以上の者
試験日　学科試験／2006年11月19日（日）9:30〜11:00
設計製図／〃12：00〜18：00（6時間）
試験地　札幌・仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡
受験申込　頒布／2006年7月31日〜9月22日
頒布価格／1セット1,050円（消費税込み）
受付／2006年8月1日〜9月22日
受付場所／建築技術教育普及センター本部
受験料　「学科試験」のみ22,050円
「学科試験＋設計製図試験」26,250円
「設計製図試験」のみ22,050円
必要書類　①所定の受験申込書②写真2枚③受験手数料払込受付証明書

オープンネットワーク見本市

「オープンネットワークオートメーションシステム展」を㈳東京都設備設計事務所協会の主催で開催。

会場にはLONWORKS®ネットワーク、BACnet™、IPv6などのオープンネットワークシステムの機器、関連ソフトウェア、その他関連サービスを展示する。

日　時　2006年7月12日（水）〜13日（木）10:00〜17:00
会　場　科学技術館（東京・北の丸公園）
東京メトロ東西線／半蔵門線・都営地下鉄新宿線「九段下駅」下車7分

「人間サイズのまちづくり賞」募集

兵庫県は、「第８回人間サイズのまちづくり賞」で、兵庫県下にある優れたまちなみ・景観や建築物、まちづくり活動に功績のあった個人や団体を顕彰するため、自薦・他薦を募っている。

推薦受付　2006年６月15日～７月14日(金)―消印有効

賞の部門　まちなみ・景観部門／建築部門／福祉部門／まちづくり活動部門
ただし、建築部門、福祉部門及び屋外広告物については、おおむね完成後５年以内のものを募集対象とする。また、個人住宅も募集対象に含まれる。

推薦方法　推薦用紙に必要事項を記入。写真等を貼付のうえ下記へ郵送、メールまたは持参。
【まちなみ・景観・建築・まちづくり活動】
兵庫県県土整備部都市政策課
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5-10-1
e-mail　kendo_toshi@pref.hyogo.jp
【福祉部門】
兵庫県県土整備部まちづくり課
e-mail　machidukurika@pref.hyogo.jp

推薦用紙は、兵庫県都市政策課URL（http://web.pref.hyogo.jp/tosisei/machishou/）からダウンロードできる。

「大阪まちなみ百景」投票

古くは箕面市の萱野三平旧邸周辺、岸和田市の本町周辺、貝塚市の水間寺周辺。大阪市内に残された野田界隈、口縄坂界隈、住吉大社周辺、平野郷。そしてハービス大阪界隈やなんばパークス。

大阪府下のピックアップされた候補地200景の中から、府民らの投票結果をもとに「大阪まちなみ百景選考委員会」で「大阪まちなみ百景」を選定し、大阪府は今秋、その結果を発表する。

候補地200景は、大阪府のホームページhttp://www.pref.osaka.jp/kenshi/または大阪府発行のパンフレット「あなたが選ぶ大阪まちなみ百景」に掲載中。

投票期間　2006年６月１日～７月31日（月）

投票方法　府庁や各市町村に備え付けの投票用ハガキに好きな候補地番号を10カ所以内記入して、
〒540-8570　大阪市中央区大手前２丁目
大阪府住宅まちづくり部建築指導室建築企画課景観推進グループ・TEL06-6941-0351へ。
投票は１人１通限り。

選考委員　鳴海邦碩（大阪大学大学院教授）―委員長―
下村泰彦（大阪府立大学大学院助教授）
高橋毅子（川崎医療福祉大学客員教授）
久　隆浩（近畿大学教授）
藤田治彦（大阪大学大学院教授）
藤本英子（京都市立芸術大学助教授）ほか

タイシンけんちく展

高橋靚一氏の設計になる大阪芸術大学建築学科棟（15号館）を長く使っていくために、耐震改修を含む保存的活用法について学生と教員が協動で取りまとめた具体的なアイデアを、図面、模型、CGを駆使して一般の人々にも分かりやすくプレゼンテーションする。

■展覧会（入場無料）

会　期　2006年７月４日～７月17日(月・祝)
10：00～17：30、7/13～15：00、7/14休館

会　場　•7/4～7/13：大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール
•7/15～7/17：大阪芸術大学21号館製図室

■フォーラム（入場無料）

テーマ　大学モダニズム建築の保存活用術

パネラ　佐々木睦朗（構造設計家）、古山正雄（建築史家・京都工芸繊維大学）、狩野忠正（建築家・大阪芸術大学）、田口雅一（構造設計家・大阪芸術大学）、宮本佳明（建築家・大阪芸術大学）

日　時　2006年７月17日(月・祝) 13：00～15：30

会　場　大阪芸術大学・芸術情報センターAVホール

定　員　200名（当日先着順）

プラド美術館展



ベラスケス《道化師ディエゴ・デ・アセド、"エル・プリモ"》1635～44年頃
Archivo Fotográfico, Museo Nacional del Prado, Madrid

マドリードにあるプラド美術館は7000点を超える絵画を蒐集している。このコレクションの中から52作家81点の名画が、大阪市立美術館で紹介される。これは大阪市立美術館開館70周年記念として企画されたもの。

ティツィアーノの《ヴィーナスとオルガン奏者》を含む４点、ベラスケスの５点、ルーベンスの３点、ゴヤの７点などが本展のハイライトとなる。

会　期　2006年７月15日(土)～10月15日(日)
9：30～17：00　月曜日休館

会　場　大阪市立美術館（天王寺公園内）
大阪市天王寺区茶臼山町1-82

観覧料　一般1,500円、高大生1,100円
大阪市内在住の65歳以上は無料〔要証明〕

出　品　エル・グレコ《十字架を抱くキリスト》、ムリーリョ《エル・エスコリアルの無原罪の御宿り》、ゴヤ《魔女の飛翔》、ティツィアーノ《皇帝カール５世と猟犬》、ルーベンス《フォルトゥーナ（運命）》など。

招待券希望者は、日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。

松伯美術館「華麗なる日本画の美」



上村松園「わか葉」
昭和15年名都美術館蔵

名都美術館は愛知県長久手町で、その美しい庭園を生かして、実業家・故林軍一氏が蒐集した美人画のコレクションにとどまらず、幅広い視野を持った展覧会を開催している。

松伯美術館では、名都美術館のコレクションを借り、上村松園や鏑木清方の美人画をはじめ、横山大観、小林古径、山口華楊、加山又造らの作品を展示している。

会　期　2006年６月13日～2006年７月30日(日)
10：00～17：00　月曜日休館
７/17(月)は開館・翌７/18(火)は休館

会　場　松伯美術館　TEL 0742-41-6666
奈良市登美ヶ丘2-1-4
近鉄奈良線「学園前」駅下車

入館料　大人1,000円、小中生500円

出　品　横山大観「夜」、前田青邨「紅白梅」、小倉遊亀「初夏の花」、安田靫彦「紅梅」ほか。

北斎と広重展

日本財界の重鎮だった原安三郎（1884～1982）の浮世絵コレクションには、葛飾北斎、歌川広重、さらにかつてはボストン美術館のビゲロー・コレクションに含まれていた歌川派の肉筆画も含まれている。

この原コレクションの中から約240点を初公開する。



歌川広重「東海道五拾三次之内 庄野 白雨」

会　期　2006年７月26日(水)～８月17日(木)
10：00～18：00　月曜日休館

会　場　京都文化博物館・４階特別室
京都市中京区三条高倉　TEL 075-222-0888

入場料　一般1,000円、大高生700円、中小生400円

出　品　•版画―北斎「冨嶽三十六景」「諸国瀧廻り」「諸国名橋奇覧」「千絵の海」、広重「東海道五拾三次之内」「近江八景之内」「京都名所之内」
•肉筆画―北斎「鮑と細魚」、広重「雪月花」、歌川豊国「雪中の花魁」ほか

招待券希望者は、日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。

日本建築協会

月間の動き

【平成18年 5 月分】

理事会

第２回常任理事会
５月24日（水）15：30～17：30
出席者　佐野会長ほか８名
議　事（１）平成17年度事業報告について
（２）平成17年度収支決算について
（３）後援・協賛名義の使用について
（４）評議員の委嘱について
（５）その他

編集委員会

第２回編集委員会
５月10日（水）18：30～20：20
出席者　設楽委員長ほか６名、表紙デザイナー
議　事（１）６月号以降の表紙題材の検討
（２）６月号「身近な省エネルギー」特集報告
（３）７月号「設計図が伝えるもの」特集報告
（４）８月号「建築物の安全・安心」特集の企画
（５）９月号「第53回青年技術者」特集
（６）10月号 施工材料特集の企画
（７）11月以降の特集報告
（８）作品作風の報告
（９）広告企画の報告
（10）収支状況報告
（11）その他
第２回構造分科会
５月12日（金）18：00～20：00
出席者　中塚幹事ほか４名
議　事（１）「構造の頁」の企画
（２）11月号構造特集の企画
第２回施工材料分科会
５月９日（火）17：00～18：30
出席者　平野幹事ほか２名
議　事（１）10月号特集について
（２）今後の予定
第２回法令分科会
５月10日（水）16：00～17：00
出席者　野村幹事ほか５名
議　事（１）委員の交代と補充
（２）「法令コーナー」の企画
（３）８月号法令特集の企画
（４）情報交換
第２回作品作風小委員会
５月27日（木）19：00～20：00
出席者　井上副委員長ほか７名
議　事（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（３）「gallery」掲載報告・予定
（４）前回の編集委員会の報告
（５）その他
第２回広告企画小委員会
５月10日（木）17：00～18：20
出席者　設楽委員長ほか６名
議　事（１）６月号「身近な省エネルギー」特集報告
（２）７月号「設計図が伝えるもの」特集の企画
（３）８月号法令特集の企画
（４）９月号「第53回青年技術者」特集
（５）10月号施工材料特集の企画
（６）広告企画の報告
（７）広告の経過報告
（８）ゼネコン各社の「建築と社会」誌広告収集のための動き
（９）収支状況報告
（10）委員の交代

座談会

「設楽貞雄外遊日記 90年前、建築家が見た欧米」鼎談
５月22日（月）18：00～20：00
出席者　山本純孝／石田潤一郎／設楽貞樹
内　容　７月号連載最終回を迎えての鼎談

事業委員会

第２回情報見学小委員会
５月11日（木）18：00～19：00
出席者　瀬戸川委員長ほか７名
議　事（１）シティプラザ大阪 見学会の結果報告
（２）本年度の事業について
（３）その他

出版委員会

第２回出版委員会
５月18日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか７名
議　事（１）＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告
（２）進行中のテーマについて
（３）その他

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕

梅村　俊輔 ㈱日建設計	中川　英治 広島県都市部	中島　上 ㈱日建設計

〔団体正会員〕
㈱エスエス名古屋

●訃報
山根正次郎　５月26日逝去　享年93歳

ピント君アートプロジェクト

ピントゥーラは、阪神大震災で被災した子どもと「絵を描く」ことを通じて楽しい時間を過ごすことから活動が始まった。震災以来手がけてきたピント君アートプロジェクトは、モンゴル、インドネシア、ブルガリア、日本の子ども、そして障害者が自分の分身のピント君（ピントゥーラに由来）を描いたもの。
いろんな顔のいろんな国のピント君が手をつないで、ギャラリーに登場する。
会　期　2006年８月１日(火)～６日(日) 11：00～19：00　月曜日休廊
会　場　アートスペース虹　TEL 075-761-9238
京都市東山区三条通神宮道東入３丁目　ウエスティン都ホテル西隣

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.,
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

www.naniwa.com
We have hope
■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作、
株式会社NPGコーポレーション
本　社 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル 〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-2
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

暑中お見舞申し上げます

平成18年盛夏

淺沼誠夫
株式会社 淺沼組
会長
〒543-8688 大阪市天王寺区東高津町12－6 TEL(06)6768-5222

設楽貞樹
株式会社 安井建築設計事務所
常務取締役大阪事務所副所長
〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7 TEL(06)6943-1371代

内藤正克
株式会社 内藤建築設計事務所
相談役会長
〒675-1379 兵庫県小野市上本町240 小野ビル TEL(0794)62-4757代
〒675-1362 自宅・兵庫県小野市久保木町1063 TEL(0794)62-4668

名誉会長
市川宏
株式会社 東畑建築事務所
取締役会長
〒541-0044 大阪市中央区伏見町4－4－10 TEL(06)6202-0391

錢高一善
錢高組
社長
〒550-0005 大阪市西区西本町2－2－11
なにわ筋ツインズ ウエスト
TEL(06)6531-6431

中村光男
日建設計
代表取締役社長
〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4－6－2 TEL(06)6203-2361

奥村正樹
株式会社 オクジュー
取締役会長
〒530-0047 大阪市北区西天満5－3－7 TEL(06)6312-4131

髙木嗣郎
株式会社 大林組
専務取締役
〒540-8584 大阪市中央区北浜東4－33 TEL(06)6946-4701

沼田亘
株式会社 昭和設計
代表取締役社長
〒552-0007 大阪市港区弁天1－2－1－800 TEL(06)6575-5555

佐々木徹
西日本建設業保証 株式会社
取締役社長
〒550-0012 大阪市西区立売堀2－1－2 TEL(06)6543-2553

立成良三
財団法人 大阪住宅センター
理事長
〒542-0081 大阪市中央区南船場4－4－3
御堂筋アーバンライフビル4F
TEL(06)6253-0071 FAX(06)6253-0145

原眞一
コーナン建設 株式会社
代表取締役
〒531-0075 大阪市北区大淀南1－9－10 TEL(06)6456-4311

名誉会長
佐野正一
株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役相談役
〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7 TEL(06)6943-1371代

谷淳之介
株式会社 東畑建築事務所
取締役社長
〒541-0044 大阪市中央区伏見町4－4－10 TEL(06)6202-0391

人見尤浩
社団法人 日本建築協会
常務理事兼事務局長
〒540-6591 大阪市中央区大手前1－7－31 TEL(06)6946-6981

佐野吉彦
株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長
〒540-0034 大阪市中央区島町2－4－7 TEL(06)6943-1371代

月城則男
新東洋合成 株式会社
代表取締役
〒550-0004 大阪市西区靭本町2－9－11 TEL(06)6446-6121

松本壮一郎
愛知工業大学工学部都市環境学科建築学専攻
助教授
〒470-0392 豊田市八草町八千草1247 TEL(0565)48-8121
〒465-0083 自宅・名古屋市名東区神丘町2－17
三旺マンション神丘公園303 TEL(052)703-2610

名誉顧問
薬袋公明
日建設計
顧問

〒541-8528　大阪市中央区高麗橋4－6－2　TEL(06)6203-2361

森田司郎
財団法人 日本建築総合試験所
理事長

〒565-0873　吹田市藤白台5－8－1　TEL(06)6872-0391
http://www.gbrc.or.jp

與謝野久
日建設計
都市建築研究所所長

〒102-0072　東京都千代田区飯田橋2－18－3　TEL(03)5226-3030

宮本博司
株式会社 宮本工務設計事務所
代表取締役
ISO9001認証取得（創立61年）
〒665-0022 宝塚市野上1－2－34（宮本ビル）
TEL(0797)71-0431大代表　FAX(0797)71-5139 受信専
E-mail : mto@gold. ocn. ne. jp URL : http : //宮本設計. jp. io
神戸支店　TEL & FAX（078）997-0371

山本貴士
朝陽電気 株式会社
代表取締役

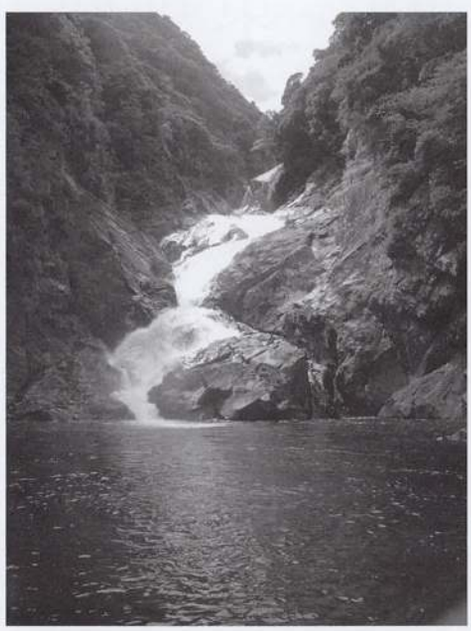
〒530-0005　大阪市北区中之島3－2－4 朝日ビルディング内
TEL(06)6385-1361代表
〒565-0873　自宅・吹田市藤白台4－23－8　TEL(06)6871-0851

和中勝
株式会社 和中商店
取締役相談役

〒531-0072　大阪市北区豊崎5－8－11　TEL(06)6371-0731～5
〒150-0031　東京都渋谷区桜丘町11－5　TEL(03)3464-9723
〒453-0804　名古屋市中村区黄金通3－34　TEL(052)481-7338
〒662-0836　自宅・西宮市大畑町10-22　TEL(0798)67-0386

村石全
株式会社 クトクコーポレーション
代表取締役社長

〒556-0021　大阪市浪速区幸町2－5－3　TEL(06)6568-3671
〒596-0011　工場・岸和田市木材町9－3　TEL(0724)37-2524
〒649-7167　工場・和歌山県伊都郡かつらぎ町移430番地
TEL(0736)22-7880





左／夏の屋久島　右／冬の縄文杉
写真／岡村　昌子

暑中お見舞申し上げます　設計事務所有志

平成18年盛夏

株式会社 伊東建築設計事務所

代表取締役　岡　本　清　彦

〒556-0016 大阪市浪速区元町1－5－7　TEL 大阪 (06) 6646-0161(代)

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長　織　田　愈　史
代表取締役社長　森　口　雅　文

本社・名古屋事務所　〒460-0002 名古屋市中区丸の内1－15－15（桜通ビル）TEL（052）222-8611
東京事務所　〒101-0021 東京都千代田区外神田3－5－12（聖公会神田ビル）TEL（03）5294-6211

株式会社 瀬戸本淳建築研究室　ISO9001

代表取締役　瀬　戸　本　淳

〒650－0024 神戸市中央区海岸通1－1－1 神戸郵船ビル　TEL（078）333－0138

株式会社　東畑建築事務所

取締役会長　市　川　　宏
取締役社長　谷　　淳　之　介

本社・大阪事務所　〒541-0044　大阪市中央区伏見町4-4-10　TEL（06）6202-0391
http://www.tohata.co.jp
大阪・東京・名古屋・九州

日建設計

代表取締役社長　中　村　光　男

東　京	102-8117	東京都千代田区飯田橋2－18－3	TEL（03）5226-3030
大　阪	541-8528	大阪市中央区高麗橋4－6－2	TEL（06）6203-2361
名古屋	460-0008	名古屋市中区栄4－15－32	TEL（052）261-6131

安井建築設計事務所

代表取締役社長　佐　野　吉　彦

本　社　〒540−0034　大阪市中央区島町2−4−7　TEL（06）6943−1371（代表）
支　社　大阪・東京・名古屋・広島・九州　　http://www.yasui-archi.co.jp/

暑中お見舞申し上げます　建設業有志

平成18年盛夏

人・都市・自然のシンフォニー
Asanuma　株式会社 浅沼組

代表取締役社長　浅　沼　健　一

本社・大阪本店　大阪市天王寺区東高津町12－6　TEL（06）6768-5222
東京本店　東京都新宿区荒木町5　TEL（03）5269-3111
名古屋支店　名古屋市中村区名駅南3－3－44　TEL（052）571-5571
支店　北海道・東北・北関東・横浜・神戸・広島・九州

OBAYASHI

株式会社 大林組

取締役会長　大　林　剛　郎
取締役社長　脇　村　典　夫

東京本社　東京都港区港南2－15－2　TEL（03）5769-1111
本店　大阪市中央区北浜東4－33　TEL（06）6946-4400
支店　札幌・東北・横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州

株式会社 奥村組

取締役社長　奥　村　太　加　典

本　社　〒545-8555 大阪市阿倍野区松崎町2−2−2　TEL 大阪（06）6621-1101（代表）
東京本社　〒108-8381 東京都港区芝5－6－1　TEL 東京（03）3454-8111（代表）

100年をつくる会社
鹿島
KAJIMA CORPORATION　代表取締役社長　中　村　満　義

本　社　東京都港区元赤坂　1－2－7　TEL（03）3404-3311（大代）

TAISEI

大成建設株式会社

社　　長　葉山莞児
専務関西支店長　寺下　均

本　　社　東京都新宿区西新宿1－25－1新宿センタービル　TEL(03)3348-1111大代表
関西支店　大阪市中央区南船場1－14－10　TEL(06)6265-4504
ホームページ　http : // www. taisei. co. jp/

株式会社 竹中工務店

取締役社長　竹中統一

〒541-0053　大阪市中央区本町4－1－13　TEL(06)6252-1201(代表)

戸田建設株式会社

代表取締役社長　加藤久郎
執行役員支店長　野村昇

本　　社　〒104-8388　東京都中央区京橋1－7－1　TEL 東京03(3535)1354
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1－13－47　TEL 大阪06(6531)6095
支　　店　東京・千葉・関東・横浜・北陸・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州

保存と開発に
取り組む

総合建設業

yasui moku

株式会社 安井杢工務店

代表取締役社長　安井洋

本　　社　〒617-0006 京都府向日市上植野町御塔道42　TEL(075)933-0012㈹　FAX(075)933-4931
東京事務所　〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-1-10 赤坂ビルデング303号室　TEL(03)5474-3671　FAX(03)5474-3672
http://www.yasuimoku.co.jp/　E-mail:soumubu@yasuimoku.co.jp



屋久島 蛇の口にて

暑中お見舞申し上げます　建材・報道・学校・団体等

平成18年盛夏

アシバネトイレブースシリーズ

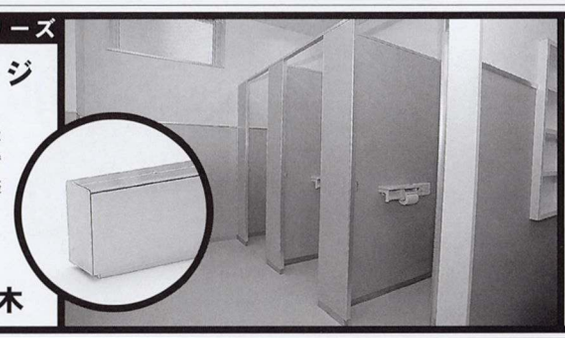
抗菌アルマイトエッジ

●

アシバネトイレブースのアルミ部材はすべて抗菌アルマイト仕様で、いつでも安心。また巾木は、特許取得の調整巾木を含め3タイプをご用意。
トイレの環境改善を追求しています。

●

トイレブース巾木

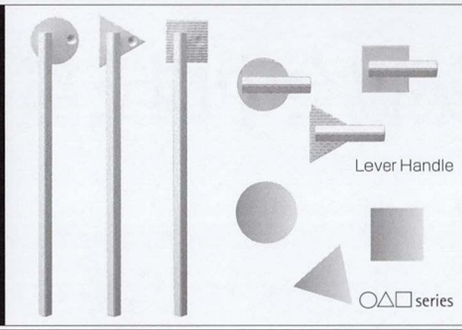


アシバネ印 **安田株式会社**

〒542-0081 大阪市中央区南船場1－11－9(長堀安田ビル7F)
TEL 06－6251－7091㈹ FAX 06－6262－3629
URL http://www.ashibane.co.jp/

札　幌 TEL 011-781-1236　関　東 TEL 048-795-2351
西関東 TEL 044-277-0111　名古屋 TEL 0587-95-4501
大　阪 TEL 06-6268-3531　福　岡 TEL 092-504-2031

Door Handle



建築文化を創造する
UNION 株式会社ユニオン
iso 9001　iso 14001
www.artunion.co.jp

代表取締役 社長　立野 純三

本社	大阪市西区南堀江2-13-22	〒550-0015	
大阪支店	大阪市西区南堀江2-13-22	〒550-0015	tel 06-6532-3731 fax 06-6533-2293
東京支店	東京都江東区白河2-9-5	〒135-0021	tel 03-3630-2811 fax 03-3630-2816
名古屋営業所・ショールーム	名古屋市中川区舟戸町3-20	〒454-0805	tel 052-363-5221 fax 052-363-5255
アトリエユニオン／東京	東京都中央区日本橋室町4-5-1	〒103-0022	tel 03-3517-1818 fax 03-3517-1819
アトリエユニオン／大阪	大阪市西区南堀江2-13-22	〒550-0015	tel 06-6532-8920 fax 06-6533-0224

日報

発刊50周年

建設業界でもっとも信頼　読まれている日刊情報紙

株式会社 **建　設　日　報　社**

社主　重村　一

本　社　〒550-0006 大阪市西区江之子島1－7－3 TEL(06)6444－2405－9
別　館　〒550-0006 大阪市西区江之子島1－6－2 TEL(06)6444－6431－4

建築 インテリア 大工 設備 環境 ロボット 機械 CAD

モノづくりの学校

大阪工業技術専門学校 SINCE1895



OCT
大阪市北区天満1－9－27　〒530-0043
0120-0910-19 FAX(06)6352-2861
URL http://www.oct.ac.jp

建築図書専門店

有限会社 柳々堂

〒550-0003　大阪市西区京町堀1-12-3
TEL(06)6443-0167　FAX(06)6443-1826
E-mail ryuryudo@osk4.3web.ne.jp
URL http://www4.osk.3web.ne.jp/~ryuryudo

社団法人 日本建築材料協会

会　長　藤井　實

〒550-0003　大阪市西区京町堀1－3－13　辰巳ビル9階　TEL(06)6443-0345　FAX(06)6443-0348
http://www.kenzai.or.jp/

社団法人 日本建築協会京都支部

支部長　望月秀祐

〒604-0944　京都市中京区押小路通柳馬場東入　京都建設会館別館　TEL(075)211-2857·2877

社団法人 日本建築協会中国支部

支部長　森畑　武

〒730-0042　広島市中区国泰寺町1－8－4日興ビル内　TEL(082)244-2111

社団法人 日本建築協会東海支部

支部長　松本壮一郎

〒460-0008　名古屋市中区栄4－3－26（昭和ビル5階）　TEL(052)261-1451

社団法人 日本建築協会和歌山支部

支部長　東野信義

〒640-8045　和歌山市ト半町38番地　建築士会館内　TEL(073)423-2562

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

OKUJU
Space Creator

クオリティ＆コストパフォーマンス
ALTsシステム
スナップ工法
SP-600
メタルシステム天井

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・南九州・名古屋・上海

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO

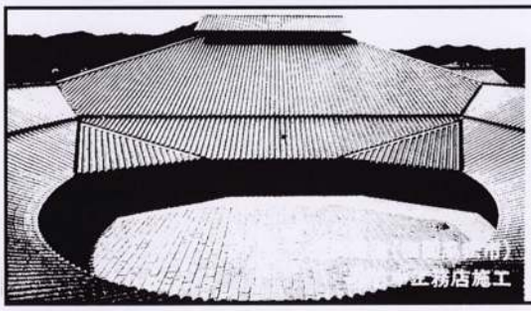
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士

本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目 2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和設備
給排水設備
電気設備
産業設備
水処理施設
環境施設

三機工業株式会社
取締役社長　宅　清光
常務執行役員関西支店長　丸岡敏峯
関西支店　大阪市淀川区宮原3-4-30　ニッセイ新大阪ビル
本　社　東京都中央区日本橋室町2-1-1　日本橋三井タワー
http://www.sanki.co.jp



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎　六五六一―七四五四
ファックス　六五六一―七四一六

ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL　大阪（06）6877－1581

人と社会に快適テクノロジー

ネットワークフロア

10年保証

溝配線OAフロアシステム



ネットワークフロアは置敷式超高強度軽量コンクリート製で耐久性に優れ、ガタツキ・キシミ音が全く発生しないOAフロアです。

薄型40mmですが他社二重床高さ70mm製品と同等の配線有効高さを持ち、光ファイバー配線システムに充分対応ができます。
（29mm高の製品もございます）

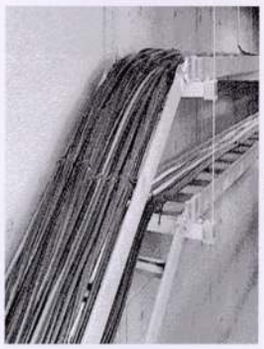
バスダクト

10年保証

シャフトスター

電力幹線システム

ケーブル



⇒



アルミニウムの帯状導体を絶縁物で被覆し、鉄やアルミニウムの箱状のケースに納めた電線に変わる電力配電システムです。
シャフトスターの３大特長は**経済的・軽量・省スペース**という点です。
スリムで軽いので施工がし易く、費用・重量はフラットケーブルの50%削減に成功しました。
（経済比較させて下さい。）

スクエアターフ Light

芝枯れ3年補償

外務省

屋上緑化システム





スクエアターフシリーズは薄型軽量にもかかわらず、保水性が高い雨水貯水型の屋上緑化用ユニット式天然芝です。（低・中木植栽も可能です。）
軽歩行が可能でレイアウト変更にも対応でき、増移設も容易です。
スクエアターフLightは風圧条件に厳しい折板屋根にも施工可能です。

安心と信頼の証

バスダクト

- 発売から48年、国内外に17,000件の実績
- 安心の10年保証付き　ISO9001取得

ネットワークフロア

- 発売から19年、840万㎡、32,000件の実績
- 安心の10年保証付き
- （社）公共建築協会　品質性能評価品
- （社）文教施設協会　推奨品
- JAFA3000N適合品　準不燃材料試験合格

スクエアターフ

- 発売から7年、約50,000㎡の納入実績
- 安心の芝枯れ3年補償付き
- （社）公共建築協会　品質性能評価品

〒530-004 大阪市北区東天満1-11-13
TEL 06-6358-3994（代）　FAX 06-6358-1510

KY-TEC 共同カイテック株式会社
URL http://www.ky-tec.co.jp

雑誌 03379-7

毎月1回1日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182
定価1,200円（税込）